

てて、兵を催し、又三石へ寄せらると、風聞ありしかば、再び合戦出来りぬと、三石の城中も城下も、周章する事限りなし。浦上村宗、之を聞き、何卒合戦に及ばずして、静謐ならん事を計り、大濱の妙覺寺の日興といふ僧を、呼び語らひ頼みければ、弘岡左京は、和僧の徒弟なり、弘岡、此度、常印の催に應じて、此表へ發向の事を、謀ると聞ゆ。和僧、榛石へ行きて、密に左京を語らひ、味方に引入る事ならば、恩賞は望に任すべし。尤も左京にも、只今迄取來りし本知に倍して、所知を行ふべしとありしかば、日興則ち領掌し、三石を出て、榛石へ行き、左京に、其由を言ひ語らひしが、左京忽ち心を變じて、浦上方になり、其手の者、皆左京に相從ふ。又別所孫二郎は、此度の先陣を承りて、加子川迄出張居たりけるが、是も相背くと風聞す。衣笠申しけるは、別所と浦上、常に不和なれば、一味の事はあるべからず。三石より謀に、いはするならん。常印、驚き給ふなど、いひけるが、久米十郎左衛門來りて、弘岡左京こそ村宗に組し、其手の者、皆敵になりぬと聞ゆ。斯くてあらば、いかなる變も計り難し、急ぎ諫をかへ給へと、告げければ、常印、大に驚き、さらば爰を去つて、暫く

政村衣笠  
を退去

山林に隠れ、時節の至るを待つべしと、衣笠が家を、忍びて出でられければ、隨從せし兵士、皆思ひ／＼に散亂す。左京が手の者共、逃散る者を追懸けて、十餘人討取る。之を此度の左京が高名にして、三石の城に行きければ、今迄の領知の上に、赤坂郡にての加増の所知を與へしとぞ。

### 義晴將軍播州より上洛并常印小鹽へ歸り弒さるゝ事

先の義澄將軍の二男義晴は、播州に下り、小鹽に居給ひしが、常印、小鹽を出てられし時、共に爰を出て給ひ、常印と一所に、書寫山の奥に隠れおはします。然るに去年、細川澄元卒して、當將軍勢衰へ、戦利あらず。今年大永元年三月廿五日に、當義植將軍、都を落ちて、阿波國へ迎り給ふ。後年に、阿波國に薨じ給ふ。故に鳥の公方といふ。其後に、細川高國、京都に在りて、權を取りしかども、將軍なれば、之を迎へん爲めに、高國より三石の浦上村宗へ、使を下して、故將軍の御二男義晴、播州に隠れ居給ふ。今度將軍になし奉るべしと、御供申して、急ぎ上洛あれとぞ、いひ遣しければ、村宗、大に悦び、

義晴將軍播州より上洛并常印小鹽へ歸り弒さるゝ事



我家の起る驗なりと思ひ、御承り候ひぬと、返答しけれども、去年よりは、常印とは敵味方となりければ、率爾に義晴の供して、上洛せん事叶はず。依りて又常印入道へ、三石より使を立て申しけるは、公方の母君、今尊公の御許に、御座候由承りて、此若君を渡し給はゞ、向後和睦をなし、以前の如く、君臣の禮をなし奉らんとありければ、常印、今はあるかなさかの體にて、山林に身を隠し、忍び居られしかば、即ち同心ありて、若君を呼び出して、村宗と和議調ひ、小鹽へ再び常印を迎へ、重家母堂・才松丸も、皆三石を出て、小鹽に歸り、住まはれければ、上下安堵の思をなしかる。斯くて村宗は、同年六月朔日、將軍若君義晴を供奉して、三石を發足して、京都に赴く。其行粧の華麗、いふ計りなし。同月六日申刻、幼君上京まします。頓て左馬頭に任ぜられ、十二月廿四日、元服。加冠は、細川武藏守高國奉りて、義晴と申す。明日廿五日、征夷大將軍の宣下あり。高國、管領に任ぜらる。將軍、時に十一歳とぞ聞えける。浦上掃部助村宗が、將軍の供奉して、上京せしかば、大に威を振ひ、在京して、明くる大永二年の春、三石に歸り、小鹽に至りても、其威勢彌々強大

義晴將軍上洛

義晴征夷大將軍に任ず

赤松政村討たる

にして、主人常印入道をも、物の數ともせず。老臣以下の面々をば、臣下の如くにあしらひければ、常印を始め、赤松の舊臣共、掃部助を惡む事甚し。村宗、之を傳へ聞きて、逆も君臣一和せん事、叶ひ難し。災の身に及ばざる以前に、常印をも失ふに如かじと思ひ、其身は三石に歸りて、後に浦上が臣岩井小源次・花房菅野三人を、九月十七日の夜、常印の許へ遣し、内談の事ありとて、近習の人を拂ひ、密談に及ぶ振をして、忽ち常印入道を弑して、早く出でければ、三人共事故なく、三石へ歸りける。是に依りて、小鹽又大きに騒ぎ出て、居城なり難し。浦上因幡守村國・完栗作十郎・範高・小寺藤兵衛職隆・伊豆孫次郎等、幼主才松丸を守護して、小鹽を落ち、小舟に取乗り、淡路に落行きける。浦上村宗は、己が思ふ儘に、其跡を治め、播州も西半國を取治むる。備前も吉井川より東は、もとより己が領地とし、其始め松田と、備前を争ひけれども、浦上が勢、追日強くなりしかば、松田は尼子が旗本となり、又備後の山名を頼みて、西備前の地を、奪はれざる計略のみにて、浦上と戦ふ事もなかりける。斯くて常印をば、書寫山に葬りて、祥光院了堂性因と、法號を贈りける。

義晴將軍播州より上洛并常印小鹽へ歸り弑さる事



一説に、常印を弑せしは、播州室津にての事といふ。此時、常印廿八歳と註せし者あれども、明暦二年、家督の時、七歳といふを以て數ふれば、實に今年廿五歳なれば、此説も叶はず。又重編應仁記に、義村を父とし、政村を子とす。此説も不審し、政村を初め義村といふ。則ち常印の事なり。其子は、晴政なり。是も始めは、政祐といふ。政村は左京大夫といふ。又兵部少輔と書きたるものもあり。初めは上總介といひしといふ。又二代ともに、初名を才松丸といふ。親の幼名を、受けて名附けしにや。

### 赤松左京大夫政祐小鹽へ歸り住する事

浦上因幡守村國・完栗作十郎景範・伊豆孫次郎則定等、才松丸を守護して、淡路にありしが、此幼主も、早や十一歳なれば、元服をなし、左京大夫政祐と號して、同年十一月、兵船を催し、播州へ押渡り、福泊に着岸し、大貫山に陣を張り、村宗領分へ、燒働して戰ふ。此由、三石へ聞えて、村宗勢を催し、宇喜多和泉守能家と、先陣として

赤松政祐  
大貫山に  
陣す

三千餘人大貫山へ押寄り、村國景範則定に對陣す。然るに但馬國山名次郎政豊、此虚に乗じて、播州を切取らんと、永良表より、小林・太田垣等を、先陣として亂入す。三石勢も、此兩方の敵に、周章してありけるを見て、浦上村國より、使を立て、村宗へいひやりけるは、今同姓の親族を背いて、對陣に及ぶ事も、全く赤松の家を起すべき爲めにして、私の儀にあらず。然るに、山名に國を奪はれん事、後日に臍を嚙むとも、甲斐なからん。和睦をなし、幼主を立て、相共に山名の勢を、退くべしといへりければ、村宗も、早速同心して、互に誓詞を取換し、三石よりも、再び赤松政祐を、播州備前の大守と仰ぎて、山名が勢へ、打向ひ對陣すれば、山名も利を失ひて、軍を入れければ、左京大夫政祐、又小鹽へ歸り住して、兩浦上、之を守護して、暫し戦ひも止みにけり。

政祐小鹽  
歸陣

### 宇喜多能家父子播州にて勇戦の事

斯くありて後、小鹽も靜になりしかども、始終一和すべき村宗とも見えざれば、浦



浦上村宗  
出陣

上村國、又三石を討つべき謀をなし、小寺藤兵衛は、五着の城に在りて、村國と共に計り、先づ政祐を守護して、時を待ちけるに、三石に其趣を洩聞えて、さあらば此方先んじて、兵を進め、村國又小寺等を討亡すべしとて、大永三年の春、村宗、三石を打立ち、宇喜多四郎能家が二男なりを先陣として、播州發向す。村國も之を聞き、三百餘人を率して、之を防ぐ。其時、餌兵をかけて、敵を誘ふ。先陣の宇喜多四郎、未だ若年なれば、其謀をも辨せず、軍を進めて、頻に之を追ふ。村國よき場に、伏兵を置き、四郎を前後より取巻き、忽ち討取りける。父能家は、四郎を討取られて、悲情に堪へず、自ら先に進み、敵陣へ馳入りしかば、從兵主を討たせじと、一同に村國が備へ打入り、爰を最期と戦ひければ、村國が兵、忽ち敗軍して、東を指して引退く。能家、自ら敵を打つ事八人、其餘首數百計りを得て、引取りける。其後も、猶ほ、迫合ひ絶えざりけるが、村宗思ふに、主人に對して、戦をなす故に、涉々しき勝利を得ずと思ひ、赤松雲松軒といふ一族、丹波に隠れありしを、三石に招きて、大將に取立て、度々播州へ、軍を出し、戦ひしかども、更に勝敗分れず、雲松軒も、野間といふ所

宇喜多能  
家奮戦

にて討死ありけり、扱宇喜多和泉守、勇戦の勝れたる事を、細川高國、遠く聞きて、大に歎賞して、河原林某といふ者をして、名馬一匹に、名ある釜を送りける。されども實子に遅れ、又老衰もしければ、其後は、能家己が居城邑久郡砥石城に、引込み、薙髮して常玖と號して、老を養ひて居ける。

播州依藤が城を攻む并柳本彈正殺さるゝ事

享祿三年、三木釜山城主別所加賀守就治、柳本彈正等、播州依藤が城を攻めたりしが、六月晦日の夜に入りて、柳本が家僕、主人彈正を殺しける。夫故、別所が陣迄、騒ぎ立ちける。之を依藤が城より及びて、兵を出し、寄手を討ちければ、一支もせず敗軍す。城兵は之を追討にして、首百餘級を、討取りて引取りける。斯くの如く、播州物騒なりければ、浦上村宗、其虛に乗じて、三石より打出て、小寺の城、三木の別所が城、有由の城等と、攻戦ひて打取る首千餘級を得て凱陣す。又備前赤坂郡、上道郡にては、松田左近將監と、迫合どもありて、月日を送りける。

依藤が城  
を攻む

播州依藤が城を攻む并柳本彈正殺さるゝ事



## 浦上村宗攝州出陣并討死の事

然るに、細川武藏守高國入道道永は、去る大永七年、桂川敗軍の後、伊勢國司林親郷は、道永の婿なりければ、之を頼み、其後、又山田の神主山田大路が家に、蟄居して、常桓と號を改め居られしが、何卒して今一度、義晴卿を將軍に備へ、執權して天下を掌握せんと、山田を立出て、江州佐々木を頼み、越前へ越しては、淺倉を語らひ、又雲州へ至りて、尼子を催促しけれども、皆是に應ぜざれば、爲方なく、備前へ巡り、三石に至りて、浦上村宗を頼みける。是は先年、義晴卿を供奉して、播州より落せし推舉に預りし事、多かりしかば、一義にも及ばず同心し、又村宗、所望しける。文明の頃、武衛家の臣たりし朝倉太郎左衛門敏景に、越前國を給り、守護の大名の數に列せられ、忽ち陪臣を離れ、諸侯國主の身となり、其後、孝景に及ぶ迄、御相伴衆多く、此例を以て、其村宗も此功を遂げなば、播州の守護を許され、將軍家直參の大名の數に、入られなんやと、望みければ、常桓聞きて、今度勝利を得ば、此條仔細あ

浦上村宗  
攝州出陣

らじと、堅く契約ありければ、村宗大に悦んで、聽て播州・備前・作州の兵を集め、享祿三年八月、村宗其勢三千餘騎にて、三石城を發し、攝州に出陣ある。細川常桓は、先達て三石を出でて、諸浪人等を組催し、兩家、同月廿七日に、攝州神呪寺に陣取り、細川晴元一味の城々共攻めんとす。伊丹城に高島甚九郎、池田の城に池田筑前守、富松城に藥師寺三郎左衛門等楯籠り、常桓の勢寄來らば、引請け一戰せんと相待ちける。九月廿一日に、先づ富松へ朝懸して、一時攻にして攻落し、藥師寺が者共、餘人討取り、軍神の血祭として、勇み進みける。三郎左衛門は、爰を落行き、之を晴元へ註進しければ、山中遠江守に、和泉國人を附けて加勢とし、尼が崎大物浦を守らせ、堺にありし軍勢を以て、久々知酒郡に、陣を張りけるが、十月十九日、常桓、伊丹表にて相戰へば、伊丹勢打負けて、井上新八郎を始め、三十餘人討死しける。十一月六日には、大物へ取懸りければ、藥師寺は降參し、山中遠江守・河原林右衛門尉は、討死を遂げ、其外五十餘人討たれ、殘る者共は、中島へ落行きけり。常桓は、爰にて越年して、明くる四年二月下旬、伊丹の城を攻扱ひになりて、城主高島甚九郎、城を

尼が崎合  
戰



伊丹城陥落

出でて、池田へ退く。是に續きて、三月六日、池田へ取かけ攻めけるに、阿州の侍有持等二百餘人討死して落城す。東條又四郎・波多野孫四郎は、一旦城中を切抜ければ、敵頻りに跡を追ひければ、山田といふ所にて自害せり。此勢にては、常桓、浦上村宗と續きて、堺を追落し、都へも切つて上るべしとぞ見えける。三月十日、諸軍を率して、淀川尻を打渡り、先陣は住吉古妻に屯し、常桓は、中島に陣を移し居たり。堺にては此大敵を引請け、逆も防戦、叶ひ難しと評議して、一先づ四國へ落行くべしと、其支度せし所へ、兼て催して置きける三好筑前守元長、四國勢一萬餘人を引率して、堺津へ着陣すれば、晴元を始め、諸勢大に力を得て、此勢を合せ陣しける。其中より早雄の若者共は、足輕をかけて、迫合ひけるが、いかさま一戦して、勝負を試みんとて、先陣の者、播州勢の先手へ、打つて懸り戦ひしが、忽ち討勝ちて、谷福島などいふ先手の兵を討取る。其外、八十餘人の首を取りて、引取りければ、住吉に長じける浦上が先手なまり兼ねて、天王寺・今宮木津へ、引退く陣を、取らざれども、常桓は、浦井に陣取り、浦上也野田・福島に陣取りて、兩家二萬に餘る勢なれ

浦上堺にて敗北

ば、近日堺へ押寄せんと謀りける所に、又三月廿五日、細川讚岐守政之、八十餘騎にて、堺浦へ着船す。其上、畠山が家老木澤左京亮長政、常桓の味方にて、隨一と頼みし者なりしが、忽ち心替りして、晴元へ降參し、堺津へ加はりければ、容易く堺へも寄り難く對陣して、暫く合戦もなかりけり。然るに、堺津にて、今は此軍になりたれば、最早敵を待つ事あるべからず。いざ押寄せ戦はんとて、五月十三日、細川典厩は、筑島へ打出て、陣を取り、三好元長は、住吉・遠里小野に屯す。三好山城守は、吾孫子・刈田に陣取り、其勢合せて五十餘騎、細川讚岐守の八十餘騎が、其儘、堺に陣取り、晴元を守護して、毎日天王寺の敵陣へ、足輕をかけて、矢軍あり。爰に赤松政祐、今は左京大夫晴政と稱して、浦上村宗等守護してありけれども、勢ひ衰へて、播州小鹽の居住もなり難く、近年は美作國久米郡原田村の新庄山に、城を築きてありしが、此度、兩細川攝州の合戦にて、浦上村宗も、出陣せし事を聞き、晴政よき時節到來す。今の微勢にては、逆も父常印の敵村宗を討つ事叶ひ難し。此時出陣し、晴元に一味し、其力を借りて、浦上村宗を討ちて、仇を報いんと、播州・作州の舊臣を



天王寺合戦

集めて、晴元へ内通し、六月二日、先づ神呪寺迄出張して、陣取る。此事村宗が陣へ聞えければ、一旦浦上へ従ひ居たる赤松舊功の侍、我も〜と神呪寺の赤松が陣へ加はりければ、浦上が勢、日を追ひて減少す。常桓、之を聞き、天王寺の陣人、數少くては叶はずと、自も天王寺近く陣替して、勢は衰へたれども、敵寄せば、有無の一戦をなすべしと控へたり。六月四日、三好勢先陣として、天王寺・木津・今宮へ、押寄せて攻戦ふ。浦上村宗、先を懸け、常桓禪門、後陣に詰めて、必死を極めて渡り合す故、三好勢も攻啞みてありし所に、晴元の舅、江州佐々木より加勢として、八十餘騎二手にして、阿部野の方より攻來れば、天王寺にも最早防戦に力盡き、浦上村宗、真先に進んで討死しければ、浦上に從屬しける兵卒、三百餘人討取られ残る者共、右往左往に逃行くを、野里川に追込まれ、水に溺れて死ける浦上勢も、五十餘人とぞいひ傳ふ。常桓の、第一宗と頼まれし〔はノ字 脱カ〕細川和泉守護元なり。伊丹兵庫介國扶、河原林日向守・藥師寺三郎左衛門・波々賀郡兵庫介・南條紀伊守・香西越後守等、枕を並べて討死し、其外、野田川を越して、落行く所を、爰彼にて討取らるゝ者も、二千

浦上村宗討死

山田常桓自盡

餘人に及ぶ。其隙に、常桓禪門は、遙に落行きて、尼ヶ崎の町家の京屋といふ者の所に、隠れけるを、三好山城守、聞き出して探し捕へて、境へ註進し、同八日、終に大物の廣徳寺にて切腹ある。浦上と共に、天王寺にて、討死せし備前侍の中にて、近藤平六兵衛盛久といふ者、當陣、いひ甲斐なく、切崩されし事を、無念に思ひ、其所を引さも切らず、天王寺の塔の七層へ上り切腹し、太刀を喰へ、眞逆に落ちて失せにけり。島村彈正左衛門貴則も、村宗を始め、備前勢數を盡し、討たるべきを、口惜しく思ひ、齒嚙をなして、立ちたる所へ、佐田岡文次・吉村十郎といふ敵二人を討つて蒐るを、飛び懸り、取つて引寄せ、左右の脇に搔い挟んで、汝、冥途の供せよといひて、野里川へ飛込み死にけり。此島村貴則が亡靈、化して蟹となりしといふ。げにも其時より、其所に人面の如き蟹出來ける。今に、其攝川〔州カ〕野里川にて、島村蟹というてあるは是なり。

赤松晴政歸陣并浦上村宗が子二人の事

赤松晴政歸陣并浦上村宗が子二人の事



赤松晴政は、尼ヶ崎の方へ兵を進めて、浦上村宗が兵の敗軍して、落行くを猶ほ討取り、父の仇村宗が討死を悦び歸陣して、又播州小鹽へ歸り住す。又浦上村宗が討死の死骸を、三石へ取かへれば、嫡子與四郎政宗・次男與次郎宗景、之を取納め、和氣郡木谷村へ葬り、書寫山にて追善共なしける。今に、其塚残れり。法名は、桃岳祐林といふ。此兄弟の時になりては、いかなる故か、三石の城には、人數を籠めて守らせ、播州室津の城に、兄弟共に移りけるが、程なく兄弟の中不和になりて、與次郎宗景は、太田原與三左衛門・日笠次郎兵衛・延原彈正・明石飛驒・岡本太郎左衛門・服部備前六人を連れて、寶津を立退く。和氣郡田土村天神山の城に移りける。其跡は、東備前、又作州も二郡計りは、皆宗景に従ひ、和氣郡本庄の小中山の森源七郎森村の森中務・平松村恒次五郎左衛門・同藤兵衛・曾根城の明石大和守景行等、皆城を築きて、天神山を守護す。戸田松の浦上近江守國秀、又三石城も、皆政宗を背きて、宗景に従ひければ、寶津の浦上掃部助政宗は、弟の與次郎宗景を討つべき爲めに、享祿五年、天文元年其勢二千餘騎を催して、備前に向ひ、二手に分けて、嫡男小次郎清

宗は、船五十餘艘に取乗り、海上より押寄せ、三石を攻む。此城は、此頃迄皆住居せし所なれば、案内をよく知つて、即時に攻破り、夫より片上に至り、土田・松山の城を攻めける。浦上近江守降參せしかば、政宗すぐに其土田・松山の城を本陣として、其東の山々に陣を取り、天神山よりも、宗景人數を出し、片上の葛坂を隔て、度々迫合ありけれども、更に勝負もなく、日を送りけるが、宗景も退屈して、先づ天神山へ陣を引取り、政宗の兵跡を、慕ふへしと思ひ、宗景、伏兵を置きたれども、跡をも追はざれば、事故なく、宗景、天神山へ歸りける。政宗も、土田・松山・三石に、兵を籠めて、室へ歸りける。

### 宇喜多常玖を島村殺す并宇喜多家の事

邑久郡砥石の城主宇喜多和泉守入道常玖・同郡高取山の城主島村彈正左衛門貴則は、浦上が家にて、股肱の臣なりけるが、宇喜多常玖は、老衰して、砥石の城に引籠り、島村貴則は、播州にて討死す。常玖が子興家といひて、家は繼ぎたれども、愚昧



砥石城没  
宇喜多常  
玖自殺

常玖自讚

にして用に立たず。島村貴則が子島村豊後守計り残りて、浦上家の仕置を、獨して計ひけるが、天文三年六月晦日、先君の遺命なりとて、島村豊後守、俄に砥石の城を襲ひて、宇喜多を討ちけるに、折節城中無勢、其上不意の事なれば、忽ち城を乗取られぬ。常玖は、老病に犯され、行歩も叶はず、爲方なく自殺して死す。興家は、愚なる上に臆病にて、之を防戦すべくともせず、城を逃出しける。興家の嫡子八郎は、當年四歳なれば、乳母抱きて、やうく逃出て、福岡へ落行きぬ。宇喜多記には、享祿二年出生といへば、此時六歳なる能家入道常玖の死骸は、城の續きなる大鹿島に納めける。能家入道の塚、今にあり。所の者は、誤りて宇喜多直家の常玖、存世の中、我像を畫かしめ、南禪寺の僧參西宗成を頼み、其像の上に、行狀を書きもらひて、邑久郷の向岸寺に納め置きぬ。向岸寺、今は廢して、其畫像は、邑久郷の民間に傳へたり。其文曰、

智勇兼備、功名遂全。本貫爲百濟王兄弟、曾來兒島、中古立三宅姓。雲仍洞酌、和泉恭而安、溫而勵。行無邪、言無偏。進思盡、退思補。管仲匡齊桓、有封邑於十餘世。攻必取、戰必勝、韓信附漢祖、延炎連乎四百年、一鄉懷寬和德、

闔國伏雄略權。屬赤松軍挫松田兵、出下略用上略。依則宗命祖宗助左。有<sub>一</sub>一天<sub>二</sub>無<sub>二</sub>一天。荆樹風吹厚同株、好蘭藻露、湛餘繁花妍。君々臣々、南山可<sub>レ</sub>移、節義勿<sub>レ</sub>易。父々子々、東海雖<sub>レ</sub>竭、忠烈豈<sub>レ</sub>匱、規模達々。瓜畎綿々、活<sub>レ</sub>殺縱<sub>レ</sub>橫著々揮<sub>レ</sub>金剛劍、摧<sub>レ</sub>魔群隊、與奪自在、念々張<sub>レ</sub>禪那、弓鳴神通<sub>レ</sub>弦。看々禎祥、家給椿齡永、奕葉春秋<sub>レ</sub>雨<sub>レ</sub>八千。〔雨イ〕

竊按和泉之前司能家之牒、上世居乎百濟國。甫兒時、兄弟三人、泛<sub>レ</sub>舶來<sub>レ</sub>于備前一島、始厝<sub>レ</sub>新第。洪幟皆書<sub>レ</sub>兒字<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>紋矣。仍其所曰<sub>レ</sub>兒島<sub>レ</sub>焉。中年之姓稱<sub>レ</sub>三宅、而有<sub>レ</sub>武名。諸孫瓜<sub>レ</sub>葛乎備之縣鄉邑、而號<sub>レ</sub>宇喜多。地利乎人和乎、嗚呼<sub>レ</sub>命乎。昔文治之比、丁<sub>レ</sub>源平騷亂之日、與<sub>レ</sub>佐々木三郎<sub>レ</sub>戰<sub>レ</sub>藤戶浦<sub>レ</sub>矣。比年、歸<sub>レ</sub>紀氏、代爲<sub>レ</sub>股肱。近頃、明德六年、江州前司紀宗助、略<sub>レ</sub>地于備之伊福郷、軍不利、退禦<sub>レ</sub>嶮。松田之兵、圍<sub>レ</sub>之四面。能家獨身入<sub>レ</sub>宗助壘、身被<sub>レ</sub>堅執<sub>レ</sub>銃、相戰四十日、勝<sub>レ</sub>鹿田軍。群敵解<sub>レ</sub>圍而去矣。宗助梟<sub>レ</sub>十餘人首、凱歌而旋焉。八年、紀則宗、美作前司禍起<sub>レ</sub>蕭牆、與<sub>レ</sub>播之東<sub>レ</sub>〔軍〕戰退<sub>レ</sub>日山陣<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>白旗城。親族群臣首鼠不<sub>レ</sub>爲者夥

宇喜多常玖を島村殺す并宇喜多家の事



矣。能家、切齒勵聲曰、人生一世之間、焉能央々有之乎、乃歸。則宗衆皆愧、能家言而屬則宗、則宗、於愛與幼主、而入下野前司源政秀之播之鹽壘、力戰數矣。據相府臺命、細川故右京政元、差中使求東西和議、三國離心頓休矣。文龜二年、戰于備之矢津。能家一身單力、而斬有松柏、其徒二人之首焉。三年、於備之牧石原、屢戰、蒙疵斃勅敵、有功矣。永正十五年、紀村宗、以事入三石壘。群下有聽氷、不決一焉。能家寧爲牛後、卒不作佗方臣誓歸乎。村、宗細川今京兆高國、投書感忠義至誠矣。十六年、村宗舍弟宗久、在香々登壘、與阿兄絕矣。能家在彼、乃通書告諭乎村宗而曰、臣若出壘則必有事矣。一夕脫而往備西縣矣。同年十二月、能家、將精兵二千餘陣乎新田安養寺、侵掠圍三石、播軍之後、而戮力乎村宗焉。播軍忽解圍而退矣。十七年七月八日、戰勝于作之飯岡原。敵軍溺死河水者數十輩、斬首有級矣。十月三日、村宗、入作陽陣乎岩山南。能家將二千餘從、以敵軍如雲其勢難當、士卒皆散、纔殘者七十人。同四日、能家一戰而勝。同七日、敵軍瓜潰矣。村宗斬數百人首、歸

于三石。大永二年、播東軍紀村國以下、從淡入播、壘于大貫山。村宗、則圍其左右者數重矣。于時、但之守山石次郎、乘間入播之永良、東西軍互計而請成焉。盖皆吾邪讐、而與山名之軍決戰也。既而和議就矣。翌年、村國變約挑戰、能家據嶮半日程。小男四郎先倡而戰死矣。能家真欲入軍中決討死敵軍忽潰。斬數千百人首、歸村宗軍焉。細川家臣河原林等、視而聞之、高國乃以書感其功。于後、從村宗至高國、則賜湛盧之精、泛駕之騎。能家長跪受焉。寔花哀之榮也。以至則宗宗助、村宗、遣數箇書、而回傳家、不可遣之盟匣而祕之。僉曰、軍中一韓也矣。山野出入紀氏之門者五十年餘、以故、衆臣皆有耐久々故意。能家法諱常玖、予字之曰玄仲。寄斯像、求當辭、不勝固辭。書拙語、以條理數件功勳于右云爾。

時大永四年歲在甲申秋八月吉夜

前南禪金剛幢下參兩叟九峯宗成

此宇喜多和泉守三宅能家は、其先百濟の王子より出て、此百濟の王子、日本紀姓氏錄三宅

宇喜多常玖を島村殺す并宇喜多家の事

宇喜多家  
由來



兒島高德

を以て姓とす。三宅といふは、備前國兒島の地名なり。兒島にても、東の地廿一村を三宅といふ。順和名抄には、三宅を三家といふ。其王子、天日穗の後胤邑久郡和田といふ所に住して、和田備後守範長、其子兒島備後三郎高德、其一族を従へて、元弘建武の亂に、南帝の御味方に至りて、忠戰をなす。事數度に及ぶ。然るに、建武三年五月に、和田備後守範長、播州阿彌陀宿にて討死し、其一族も多く、爰に死したりし。其時、三郎高德は、あとの四月、備前國熊山の戰に、深手負うて、旅行叶ひ難く、播州坂越の邊の僧房に、残り居ける故、生残りて在りしが、其後、伊勢の國に移り、又參河國加茂郡に行きて住ひける。按ずるに、房卿三男、伊勢國司顯能卿したがひ、征東將軍宗良親王に付き奉りて、伊勢參河等の國に、高德も移り行きけるにや。爰にて、男子三人を儲け、嫡子兒島太郎高秀、二男兒島次郎高久、三男三宅三郎高貞といふ。此太郎高秀、則ち宇喜多の鼻祖なりといふ。此高德の三郎なる三宅高貞は、今の三宅備後守康元の先祖なりとぞ。すべて此高德に傳ふる所此高秀より、和泉守能家迄、何代を経て、名も何といふ事見る所なし。又いつより宇喜多と移せし事も、未詳。按ずるに、高秀の子孫、備前に來住せしは、其父の故郷にも、親族あるに依りて、高秀、再び備前に來り、後に浦上の臣となべし。然るに上道郡西大寺の古文書に、文明二年、宇喜多修理進、宗家の下知狀と、

宇喜多元祖

宇喜多能家

延徳四年、宇喜多藏人久家の寄進狀とありし。若し此修理進宗家は、能家の祖父にして、藏人久家は、能家の父なるべくや、合せ考ふべき所なり。當國の里俗の説に、宇喜に、宇喜多の中將といふ人、當國兒島に流れ來り住みて、其子孫、宇喜多と稱す。直家、秀家等、其末葉といふ事なれども、其據なき浮説なれば、爰に取らず。和泉守能家は、斯かる亂世に、珍らしき性質にて〔アリノニ〕ける。此人をば、此國にて、其頃、古和泉守と稱して、賢人の如く、人のいひしとぞ。世に勝れし人にや。若年の時、父の前にて、能家物語に、今日蜘蛛の網に雀のかゝりて、落ちたりしといひしを、父の聞きて、其事あるべき事とも覺えず。譬ひありし事なりとも、斯様の虚説に似たる事は、語らぬがよしと戒めければ、能家、面目なき體にて、頭をさげて居たりしに、其折、其庭前の蜘蛛の網に、雀のかゝりて落ちけるとぞ。此の如く、天に叶ひたる至孝の人なりと、時の人いひし。武勇も此讚に見えし通りなりけり。夫故に、其時の人、戦はいかゞして、斯く武勇の名を得給ふぞと問ひけるに、さして人に替る事もなく、戰場にて斯かる時は、少し人に先立ちて懸り、引取る時は、少し人に後れて、引取る計りなりと語りし。又間々さある出立の時に、何とて震ひ給ふといへば、されば壯年の



時より、具足を肩に打かくる時、いつにても討死を、思ひ極むる心なるべしと、答へけるとぞ。其外、人に勝れし事共、物語多き人なりし。則ち後の和泉守直家の祖父なり。族の紋は、兒の字を記す。夫より兒島と島をいふ。代々の族の紋とする由、畫像の讚にも見えし通りなり。又直家の像の紋には、鶴龜又酢醬も見えたり。秀家卿の時は、族の紋、唐太鼓なり。いつより改りしにや、今も爰に、唐太鼓の紋、残りし所あり。

按ずるに、三宅姓説々あり。日本紀に記せし所は、垂仁天皇三年三月、新羅王子天日穗、日本へ來り、播磨國完栗邑に留り、後に但馬國に住す。是三宅連の始祖なる由見えたり。又姓氏錄には、天日鉾命と書きて、或記には、伊久米入彦命、垂仁天皇の御事を以て、三宅姓の祖とすとも記せり。宇喜多の家に傳ふる所は、百濟の王子備前國兒島三宅郷に來るといふ。之を並べ考ふるに、播磨に至りし始め、先づ兒島の三宅の地に來りて、後に播磨へ移りしとぞ。此故に、兒島の地名を以て、三宅連と姓を給ひしなるべし、又河野、或は稻葉等の家傳には、孝靈天皇の皇子伊豫皇子に、三子あり。

大宅氏元祖

三宅氏元祖

り。一男は、大三島諸山積明神、是れ大宅氏の始祖なり。二男は、備前國兒島に住す。其地に家、三戸ありて、養ひ奉る。故に三宅を以て姓とす。是れ三宅の始祖なり。三男は、越智親王子と申す。是れ越智姓の始祖にて、伊豫國の河野等、是より出てたりといふ。元弘の兵軍の時、兒島と河野は、一族なりしといひしと、太平記に書せしも、此説によりしと見えて、古き家の説なれども□□の皇子に、伊豫皇子といふは、日本紀にも、紹宣錄にも見えず。桓武の皇子に、伊豫親王あれども、遙か後の事にて、此説不審しければ、日本記、姓氏錄の本説等に見えし如く、三宅の姓は、天日鉾より出てたるといふ。まがふべからざる事にぞ。

又、和田備後守範高、姓は三宅、稱號は兒島ともいふ。故に兒島とも三宅とも記せしもの多く、其子孫も、兒島と名乗る。然るに範高を、佐々木の餘流といふ説あり。武家系圖中國大平記等。是は大なる誤なるべし。天日鉾の後、三宅の姓にて、宇喜多と同姓なる事、諸記註せる事明かなり。



### 備前國所々城主并海賊の事

備前國諸城

斯くて、島村豊後守は、砥石の邊宇喜多の領知を押領し、浦上家の事は、島村一人仕置し、威を振ひ、其身は、其儘高取山に居城し、薙髮して貫阿彌といふ。砥石の城には、浮田大和守を置きて守らしむ。其外、天神山の旗下の城は、和氣郡曾根城、明石大和守景行、日笠の青山の城に日笠次郎兵衛頼房、さとう山の城に日笠次郎兵衛御子日笠甚左衛門、神根のいわらの城に高取備前、大中山の城に中山五郎左衛門、働の城に明石飛驒、赤坂郡には〔脱字ア〕周通村城に笹郡勘次郎、是里の山鳥城に、平賀大進、西輕部の佐古谷城に額田喜介、磐梨郡徳富の熊野保木城に、明石源三郎、大和坂根に明石右京、肩背に岡豊前、田原城に浮田土佐殿、谷の城に小野田左馬進、邑久郡虫明城に虫明藏人、西須惠城に鳥山左馬、邑久江城に浮田五郎左衛門、尾張の城に鷺見越中等なり。又金川の松田が麾下の城々には、矢坂の富山の城に、横井土佐を置きて守らしむ。船山の城に次々木豊前、高柳の城に中島左馬頭、津高郡倉の城

備前國海賊横行

に伊賀伊賀守、三納谷城に高見小四郎、尾原新山の城に新山民部、小森百坂山城に菱川右京、赤坂郡新庄の西谷の城に松田彦次郎、伊田のうな山城に長崎四郎左衛門、同じく殿谷の城に難波八郎左衛門、大刈田の高尾山城に刈田四郎左衛門、山口のからく山城に岡與右衛門、大鹿の瀧城に草野五郎兵衛、上道郡沼城に中山備中、平井城に平井助之丞、龜山の城に寺井十左衛門、御野郡岡山の城に、金光備前等なり。此頃は、備前國中亂れぬ。所もなく東は、浦上政宗、同宗景兄弟、地を争ひ、西は松田、地を治め、尼子に屬し、浦上と戦ひ、備中の毛利麾下と戦ふ。其餘兒島郡には、讃岐國の細川家に従ひ、絢上城小串城に、高島和泉守高島源太兵衛、利生城きよむらに四宮隱岐守等、之を守る。又西兒島は、毛利家に従ひて、城を守りて、更に攻守の隙もなし。夫のみならず、兒島の南の海上には、島々多く物蔭あれば、往古より海賊をなすに、便りよくて、往還の船、世々其難に逢ふ者多し。今亂世に乗じて、彌、海賊横行する事隙なし。其海賊の集りける中にも、兒島郡日比と、邑久郡大島となり、故に其頃、日比關、大島關と唱へて、海路通行の難儀の所とせしが、大船に大黒丸夷



丸といふ船ありて、是にて渡海すれば、海賊の妨ぐる事なし。其外も、此船に屬せし由をいひて、金銀・米錢を出して、通行せしといふ。いつの年にや、戸板の某といふ周防の國司なりし人、大島に船がかりせしを、海賊、之を殺して、財寶を奪取りければ、此戸板某の子、親の敵を討たんとて、兵船を催し、大島に押寄せ、海賊の隠れ住みける岩穴の邊を、取圍み、薪を穴の口に積みて、悉く焼死しけるといふ。此事は、世に聞えて、謠曲に作りて、戸板といふ謠、則ち此事なり。其外、藝州の穂田備中守、難風に逢ひて、大島に船をかけしに、海賊の爲めに殺され、財寶を奪取られしといふ。又永正の頃にや、藝州武田判官元信の臣溫科左衛門家親といふ者、上洛して歸りに、此大島の海上を、夜中に押通りけるが、例の如く、左衛門が船へ、海賊の舟をひた／＼と押付け、財寶を奪取らんとせしに、此左衛門世には三十人が力あるといひし程の大力なれば、帆柱の桁を取りて、船に乗移らんとせし海賊を打倒し、其帆桁を取直し、賊船を突きければ、忽ち二艘をつき沈む。其勢にいかてか敵すべき。残りの船共、皆島蔭に逃げ隠れければ、溫科、何の難もなく、藝州へ歸りける。

一説に、この寺は、廣島四里程處なり。此寺にては、さし石といふ。此時、京都より、十里の濱といふ石を、取り下り、藝州可郡の福王寺に、納めしと雖も、かの寺の記に、此石を寺へ納めしは、遙か先崇光院の御宇の事にて、此時の事にあらずといへば、此事を註せず。昔、海賊のありしといふは、源氏物語の玉葛の卷に、海賊の事を書きけるも、此日頃の海にての事なり。其外、伶人茂光が、相模の使にて、西國へ下りし時、ひかたの禪師といふ海賊に、逢ひし時、筆策の小調子を吹きければ、海賊、此聲に感じて、茂光にかつけ物どもして退き、又門郡の府生といふ者は、まゝき矢にて、海賊の眼を射て、退けしといふ。古物語ども皆、此海上の事なり。此世の事ならねば、是等の事は、爰に記さず。

### 宇喜多八郎直家生立、浦上宗景へ仕ふる事

宇喜多興家は、父の仇を討つべき志もなく、流浪して、其子八郎共に、備後國鞆に、隠れ住せしが、後には福岡の富家に、阿郡善定といふ者あり。宇喜多の家臣の縁者なりけるゆかりにて、其家へ行き、父子とも養はれて隠れし。又其家の娘を、興家の妻として、二人の男子を儲け、後に忠家・春家といふ。直家の弟は是なり。天文



五年に、興家も、此家にして病死あり。福岡の寺へ葬り、法名露月光珍といふ。其後は、八郎をば母の養育にあひ、笠が村に叔母の尼ありし所に行きて、年月を送りて、十歳を越えたり。然るに此八郎、七八歳の頃迄は、人竝の生立に、越えて賢かりしが、十歳をも越えては、父の興家にも劣りて、鈍くなりて、其邊の民家にて、指さし笑ふ事多し。母、之をつくづく見て、兄弟の尼と物語して、何卒八郎を守立て、再び浦上家へ奉公させ、宇喜多の家を、起さんと思ふに、甲斐なく愚にして、用に立つべくもあらずと、涙を流し悲みて、兄弟共に力を落し居りしが、人もなき時は、八郎、母の許へちと寄りて、小聲にていひけるは、某、近年うつけになり候事は、實にあらず。必ず氣遣し給ふな。其故は、一大事を思ひ立ち候者、何卒命を全くして、人となり、浦上家へ仕へて、祖父の讐を、報じ奉らんと思ひ候。されども某賢しと見ば、敵は阿彌、よも生かしては置き候まじ。父も興家も愚にましませばこそ、其難に免れ給へ。某、夫を思ふ故に、作りうつけになり候。必ず憂ひ給はず、時節を窺ひ、宗景公へ奉公の事を願ひ給へと、語りければ、母大に驚き、扱は深き思慮ありて

の事と、密に悦ぶ事限りなし。其母、是より先、天神山の内室に、仕へてありし故に、八郎奉公の事を、宗景へ願ひければ、天文十二年八月に、八郎を呼出し、側近く仕へける。其年、赤松晴政、兵を出して、播州にありし宗景の取出の城、二三箇所攻破りければ、宗景、之を聞きて、天神山を發して、百々田豊前・日笠源太等を、先手として、播州へ打越え、所々放火し、赤松の壘共、二箇所屠りて、歸陣ありける。此時、宇喜多八郎十五歳にて、初陣なりしが、兜首一つ討取り、實檢に備へければ、宗景、之を賞しける。其後も、軍共ありければ、明くる天文十三年、八郎、元服して、宇喜多三郎左衛門直家と名乗りて、邑久郡乙子村の邊にて、三百貫の地を宛行はる。是其身の武勇と、又能家の舊功あるを以てなり。其頃、兒島郡は、四國の細川家に屬し、上道郡は松田に従ひて、是等より乙子の邊に、人數を出し、又大島邊の海賊迄も、陸に上りて、民家を亂妨し惱ます故、宗景より、乙子村の山に、取出を築きて、之を防がんとす。然るに乙子村の地、敵地には隣にて、味方地は遠き所故、抱へ難く思ひて、宗景の足輕大將等、誰行きて守るべきといふ者なし。其時、三郎左衛門進



み出でて、某未だ若輩なれども、乙子の邊にて、采邑を給はれば、幸に便あり。此城を、某に守らしめ給へと望む。宗景、之を老臣に議せらるゝに、皆然るべしといひければ、足輕三十人を添へて、三郎左衛門に乙子城を守らしむ。此時、直家、十六七歳の時なるべし。其大膽、是にて思ふべし。誠に其後は、敵、乙子の邊に出づると雖も、甲斐々々しく防禦して、敢て手さす事なく、後には却て此方より、兵を敵地へ出して、所々侵略せしかば、宗景、之を賞美して、尙地を増して、三千石を領して、城を堅固に守れり。されども直家、此乙子の在城の時、領知は少くして、兵卒は多し。夫故、兵糧甚だ乏くして、戸川平介・長船又三郎・岡平内等を始め、自ら耕作をなし、又時には、近郷へ出でて、夜盜・辻切などして、兵糧を續けし。されども不足すれば、直家を始め、家臣共、一ヶ月に五度・三度計り、失食とい事をして、一日食を絶ちて、其米を集め、城に納め置きて、出軍の時は、兵糧となす。甚だ艱難なる事、斯くの如くなれども、士卒よく思ひ付きて、軍功を勵しければ、其後、天文二十年、上道郡沼村龜山の城主中山備中に、一女子ありしを、宗景の下知にて宇喜多直家に、妻あは

せて備中が婿（とすい）一説に、中山備中、此時迄は、藤井のをん山の城に在りしともいふ。

### 富川平介、宇喜多直家に仕はるゝ事

富川秀安  
生立

宇喜多直家の第一の老臣富川平右衛門秀安といふは、此時、平介というて、若年より直家に仕へし人なり。其父は、備後の國門田村に、門田を氏としたる浪士あり。天文七年に、平介出生し、程なく父は卒しぬ。又女子も一人ありて、其母、此二子を、養育して在りしが、其處に住み難き事起りて、爲方なく、二人の子を連れて、其母門田村を出て、備中の内迄行き、母、熟々思ひけるは、此平介を取立て、人となさんと思ふに、此女子をも養育しては、叶ひ難かるべしと、覺悟して、池のありけるに、此二歳の女子の袖に、小石を多く入れて、其池に沈めけり。扱平介を抱きて、美作に姉のありける許へ、漸々日を経て、尋ね行きぬ。其姉の夫をば、富川禪門某といひて、名ある者なる故、此禪門を頼みて、此平介を預け置きて、吾身は、備前へ立歸



り、奉公をなすべし。扱落付き候はゞ、又平介をも呼取に參るべしと、懇に頼みて、母は備前へ出て行きぬ。斯くて平介を、禪門養ひ置きけるに、其生立、尋常にあらねば、我が爲めにもなるべしと思ひ、禪門子分にして、富川平介と名乗らせ養育しける。母も之を聞きて悦びて、備前にて奉公を望みけるに、宇喜多直家の弟忠家の乳母にぞありつきける。其翌年、作州の兵亂に、富川禪門害せられ、其姉も死す。其時、平介をば、歸依の僧のありけるに頼みて、隠し置き貫ひて、以後其遺言共、委く傳へて、備前の母に、平介を渡しける。其頃、直家并に弟の忠家、春家、共に乙子村城にありし時にて、平介を、其母が部屋にて、養ひ置きて、成人し、直に直家に奉公したり。平介は、直家に五六の年劣りなりけるとぞ。按ずるに、直家は、享祿二年生なり。平介は、天文七年の生れ、九の年劣りなるべし。此平介が母、勝れて才發なる女故、直家、家内のまかなひ物の出入迄、獨して勤めける。其後、直家の計らひにて、家臣岡惣兵衛が妻に遣しける。其惣兵衛が子、此腹にも餘多出來たり。平介をも惣兵衛が子分にして、養育したれども、是は其儘、富川平介と名乗る。後に富川平右衛門秀安と改む。其惣兵衛妻は、孫の戸川肥後

富川秀安死去

守達安、備中庭瀬にありし時迄、長命にて、慶長八年、九十二歳にて卒し、法名を妙珠といひしとなり。

### 雲州尼子作州へ出張の事

尼子作州出張

天文十三年十一月、浦上宗景に従ひける、作州英田郡妙見村三星城主後藤攝津守勝元より、天神山城へ註進して、尼子國久、出雲國より兵を出し、近日、作州へ發向の聞えあり。急ぎ御加勢を、越さるべしとありければ、天神山に兵を集めて、作州へ兵を出すべき用意、頻なる所に、播州へ入置きたる忍の者、立歸りていひけるは、當城より頓て、作州へ出陣ある由、小鹽へ聞え、其留守を窺ひ、赤松晴政、自ら打向ひ、天神山を乗取るべき謀の由、風聞に候と、告げ來る。宗景、之を聞きて、作州へ後詰する事も叶はず。猶ほ人數を集めて、播州を禦ぐべしとて、先づ百々田豊前に、足輕を添へて、三石城を守らしむ。其隙に、尼子國久作州へ出張し、高田篠吹・伊王山の三城を攻落し、五百餘人を切捨て、思ふ儘に横行し、宗景に従ひし侍小瀬今村・竹

尼子國久作州出張



内・江原・大河原・草刈・市玉串・蘆田・牧・三浦・福田等に、降参させ、雲州へ引取りける。三星の城の後藤のみは、よく防戦して、終に尼子に降らずしてありける。播州の方は、三石等に加勢を籠めて、守らせける故、赤松は出てざりけり。

### 直家砥石の城を攻む并落城の事

天文十四年、邑久郡砥石の城に、浮田大和、備中方へ内通の聞えありし故、宗景、之を穿鑿あるに、實正なれば、乙子の宇喜多三郎左衛門直家に下知して、浮田大和を討たしむ。直家、勢を乙子より出し、天神山よりの加勢を合せて、砥石の城を攻めけるに、利あらずして、乙子の城へ引返す。其翌日、却て大和乙子の城へ人數を出して、之を攻めんとす。直家、足輕を出して、之を防ぐ。大和、利あらずして引退く。其時、二手に分けて、一手は、金岡村へ引取り、一手は、北地村へ引取りて、乙子より池田太郎三郎出てて追討す。大和が子小姓に、馬師岩法師といふ者、殿して退きけるが、北地村の荷蓋島といふ原にて、池田と鎗を合せて、暫し戦ひしが、何れへ

直家砥石  
城を攻む

直家砥石  
城を攻む

も勝負付かずして、互に引返す。其間に、大和が兵卒、皆砥石へ引取りて、岩法師一人、諸勢に後れて引退く。今日、岩法師が働、おとなにも勝れりとして、大和、大に賞美して、則ち元服させ、馬場次郎四郎職家とぞ名乗らせける。又一日直家、乙子より兵を出して、砥石城を攻む。近藤常左衛門・星賀十郎・花房又七郎、後號道悦城戸近く攻寄する。大和、士卒を下知して、之を防ぐ。馬場次郎四郎、白團の腰差して、一の城戸を防ぐ。近藤は馬場に詞を懸けて、白團の腰差すは誰ぞ、今此城を乗るか、早や爰を引くか、引かぬと呼ばはる。馬場答へて、軍の場に出づる者に、其方は引かぬかといふ事やあると、詞迫合して攻戦ふ。其時、花房又七、中指を番へて、次郎四郎を射る。其矢次郎四郎が楯を持ちたる楯を射割る。星賀十郎も矢繼早に、楯を二矢迄射付くる。其矢、皆元矧まで射込む。されども次郎四郎が身にも當らず。次郎四郎怖へず、楯は傍に投捨て、切つて懸れば、是に續きて、城兵三十餘人、直家の兵に、切つて懸る。直家の先陣、是に切崩され、引色に見ゆる所を、大和、采配を打振つて、兵を進めて、寄手を追討つ。されども直家、亂れたる兵を引纏めて、晩景に及んで、

直家砥石の城を攻む并落城の事

三〇



砥石城没落

乙子城へ兵を入る。其後、乙子と砥石と、足輕を出して、絶えず迫合ありけるに、天文十八年の春、宇喜多直家、天神山の勢と牒し合せて、兩方より人數を出して、砥石の城を夜討にす。大和不意を討たれて、忽ち城を乗取られ、備中を指して、落行きけるを追懸け、多く追討ちし首を、取りて引取りける。此時、大和を討取りける者は、なかりしかども、後に聞けば、大和も其時、討死せしとは聞えし。砥石城を攻落しける由、天神山へ註進ありしかば、此城は、島村貫阿彌が居城、高取山の並びなれば、島村、之を守る。直家には、今度の賞として、奈良郡の地を、加恩あり。奈良郡の城を、預けられければ、直家、此城に移りて、乙子城には、弟七郎兵衛忠家に、岡平内を添へて守らせらる。奈良郡の城といふは、上道郡猶原村の西南、今は新庄山の城といふ。是なりといへり。

馬場次郎四郎宇喜多直家に仕ふる事

馬場次郎四郎職家、若年ながら武勇名高く、直家も敵ながらも、拔羣なる働きを見及ばなければ、大和滅亡の後、便りを求めて呼寄せて、直家、之を扶持し、與力三人を

高月城合戦

預けらる。其内、次郎四郎十八歳なりし。是より前、浮田大和、砥石に在りし時、天文十七年九月に、備中勢を牒し合せ、赤坂郡鳥取庄高月城を攻めけるに、高月の城は、松田方の持城なり、城より伏勢を置きて、合戦の半に、寄手の後より、突きて懸る。大和次男、片岡次郎左衛門、伏兵を防ぎて力戦す。馬場次郎四郎も、此手にありて戦ひしが、膝口を篋深に射られて、二三町程引退く。其時、養泉坊といふ山伏來りて、矢を後より抜きて捨てければ、彌、歩行叶はず。其時、大和、乘智の馬に乗りて、又二町程引退く。山の側に休息してありしに、城兵、又八十人計り、大和が旗本を目に懸け、大和を討取らんと、突いて懸れば、忽に突かれて引退く。總勢も氣を失うて、共に崩れ立ちけるを、城中兵、伏兵も、一つに合ひて、逃ぐるを追ふ事、甚だ急なり。次郎四郎、之を見て、先に討死すべき者、爰迄遁れ退く。雜人の手に懸らん事、是非もなしと、獨り怒りて、居たりし所へ、侍輩の片山彦三郎次郎四郎が妹婿なり、弟彦六郎といふ者引返し、我が馬に、次郎四郎を搔乗せて退かしむ。片山が追來る敵と、渡し合ふ。其隙に、次郎四郎、二町計り乗抜きけれども、猶ほ敵慕ひて、十文字の鎗を打懸け、引落さんと

馬場次郎四郎宇喜多直家に仕ふる事



馬場氏由  
來

せしを、次郎四郎、其鎗を打拂ひ、切折つて引取る。彦六郎は、能く殿しければ、高月の敵も引取りける故、二人共に、何の難もなく、砥石城へ歸りける。若年より斯様の手強き働どもせし者なり。此馬場が先祖は、世々備前國の地土にて豊原庄に住す。其前は、陸奥國の住人栗屋川次郎、貞任の後胤なりしが、備前國邑久郡へ、流浪して來り、安部某といひてありけり。其後、此邑久郡、後白河院の御領になりし時、馬場某といふ者、郡司となり、豊原郷に來り住す。此馬場、一女子あり。之をか安部氏が妻として、一男子を生ず。馬場郡司が外孫なる故に、之を養子とす。是も又郡司を勤めて、馬場伊賀守綱職といふ。其子を馬場新左衛門といふ。是は京都に詰居て卒す。其時、亂世故にや、其子所領をも請傳へず。此次郎四郎職家は、新左衛門孫なり。天文十三年、十三歳の時より、浮田大和に仕へ、砥石城にあり。後直家に仕へ、年を追ひて勇名あり。

按ずるに、安部姓は、其先神武天皇、大和國にて長髓彦を、御征伐なされ候時、長髓彦が兄安日命をば、奥州卒渡濱に流さる。其子孫津輕を領す。齋明天皇の

御宇に、安倍比羅夫に屬して、蝦夷を征する先鋒となりて、功ありし故、之を奏し勅勘を免され、又比羅夫の姓を受けて、安倍と稱す。貞任宗任、則ち安日命の子孫なりといふは、此馬場が家は、類なき古き家なり。

### 飽浦・加地を討つ并加地兒島を退く事

兒島郡に、飽浦といひ加地といふ地侍あり。是は共に、佐々木の餘流にて、昔元暦、佐々木四郎盛綱、藤戸の海を渡しける先陣の賞に、兒島の地を給はりしより、其子孫、爰に來り住して、元弘建武の頃、飽浦三郎左衛門尉信胤加地源左衛門・加地筑前守貞治の、勅撰の歌人加地備前守時秀など聞えしが、末流なりしが、天文廿二年の冬、飽浦・加地兩家、兒島にて爭論のこと出來して、合戦に及ぶ。終に加地戰負けて、船に取乗り、京都に走り、飽浦、獨り其跡を治めてありしが、後は、宗景に屬し、又宇喜多に仕へて、飽浦美作といひて、四千石餘の地を領してありしが、其後如何にかなりし。

飽浦加地  
の由來



一説に、飽浦は、打負けて上京し、佐々木義實を頼みて、近江國へ行きしと云ふ。されども此後、宗景、天神山没落の時、飽浦美作といふ者を頼みて、暫く兒島に、隠れしといふ事もあり。又飽浦美作が、秀家に仕へし事もあれば、此説は取難し。此一説は、江口武鑑に見えし事なり。此書、偽書なりといへば、飽浦打負けしといふは、誤なるべし。

### 浦上宗景と尼子と作州合戦の事

尼子晴久  
作州出陣

天文十二年三月中旬、雲州の尼子修理大夫晴久、近國の兵を集め、二萬八千の勢を以て、作州へ發向す。作州の國民共、大軍に恐れて、降參する者も多かりける。此由、天神山へ聞えてければ、浦上美作守宗景、備前美作の兵を集めて、天神山を出陣す。其勢一萬五千、高田表に陣を取り、其邊の城々に、兵を加へて守らせ、暫く對陣し、互に足輕をかけて、迫合數度に及びける。斯くて五月十三日、尼子の陣より、眞木隱岐守・同嫡男上野介・高田彈正忠・淺山・櫻井・牛尾・多胡等、三千餘騎、高田の郷中に打つて出て、敵かゝれとぞ招きける。先陣、之を見て、作州の士後藤〔攝津守イ〕左衛門勝元、

片山空介久義・蘆田左近將監・三浦元兼が一族福田玄蕃・勝昌・同助四郎・市又次郎・玉串監物・三星由井・鈴木以下、二千餘騎渡り合ひ、攻戦ひけるが、已に浦上勢引色に見えければ、播州侍宇野刑部入道・魚住某等七百餘騎、横合にかゝりて、出雲勢を突崩す。一陣に控へたる出雲勢、外山飛驒守・河副美作守・森脇治部大輔・三澤三郎左衛門・黒正里田・疋田等、二千七百餘騎、崩るゝ味方を右に見て、備を進め、打つて懸る。宗景、之を見て、敵は荒手にて懸れば、味方敗北すべし。後陣入替りて、助けよと下知すれば、浦上四郎五郎・周景・同權八郎・沼本新兵衛・同八郎・兒島入道・佐用・竹内・栗原等、千四五百騎先手を助け戦ふ。互に懸りつゝ、入亂れて戦へども、勝負もなく、日も暮に及べば、相引に引取りて、又對陣してありけるが、同廿二日、眞木隱岐守・同上野介・同宗右衛門、其外一族郎等五百餘騎、先に進み、高田・淺山・櫻井・牛尾等、一千餘騎、二陣に備へて、宗景の先陣に討つて懸る。浦上勢に小寺美濃守・黒田眞壁等、三千餘騎、備を進めて攻戦ふ。眞木が一族、先日も甲斐々々しく戦もせざりしを恥ぢて、此度は勇を勵し戦ひける故、小寺等、一戦に懸立てられ、散々にな



りて引退く。三浦・三星・佐用・上月等の作州士、二千餘騎、皆穢くも引く者かなと、入替りて備を進むれば、出雲勢も牛尾河副一千餘騎にて、先陣にかゝり、吉田・筑後・守・同左京亮、五百餘騎にて、二の目を詰めて進めば、播州勢、之を見て、鹿子・魚住・梶原・志方の者共、五千計りにて、兵を進む。出雲勢より、又尼子紀伊守嫡子同式部大輔・二男左衛門大夫・三澤・三刀屋・卯山・立木・湯本庄・赤穴・杉原等、一萬計り打つて蒐りて、大軍入亂れ、辰の刻より未の刻迄、戦ひしが、多勢に無勢叶はずして、備前守打負け、前後一つになりて引退く。されども浦上宗景の旗本五千餘騎は、備を亂さず。之を見て控へてありしに、浦上の一族に、賢徳齋といふ古入道が、宗景を諫めて、今御旗本を以て、助け給へ、亂れたる敵軍なれば、極めて打勝ち給ふべしと、勧めけれども、宗景、いやとよ、吾旗本を以て、敵の亂れて、追討をするを討たば、必定之を打崩すべけれども、又我旗本の戦ひ亂れたる所を見て、尼子晴久の旗本を以て討たば、必定なり。其時に、誰ありて我をば助けん。さらば其時、味方總敗軍になりて、生残る者は稀なるべし。旗本を堅固に備へてあれば、假令先手は、皆打負

備前勢敗軍

浦上宗景  
歸陣

くるとも、總崩れにはなるべしと、静りかへつて備へたり。尼子方にも、之を察しけるか、晴久の旗本を以て、宗景を討つべしとせせず、備を亂さずして、浦上勢の敗軍を、見れども追はず、引取りて備をなし、浦上方にも崩れたる人數を、纏め備へける。其日、尼子方へ討取る首數七百五十餘級、浦上方へも三百三十餘級の首を、打取りけるとぞ聞えける。斯くて浦上宗景は、今度味方を、多く討たれ手負數知れず。又作州の城ども、尼子に攻取られて、恥辱とは思へども、又戦ふとも勝利あるべからずと思ひ、敵人數を引取らば、又城々をば取返すべしと思案して、堺目の城共に、人數を籠め、堅固に守らせ、人數を引きさて、天神山へぞ歸陣ある。尼子は、爰より播州迄押入り、敵城十七箇所攻落し、番勢共を籠めて、雲州へ歸陣す。其後、又天神山より、作州へ兵を出して、攻め取られし城兵、取返して、番兵共置きける。宗景、雲州勢には、打負けたれども、是は國を隔てたる敵なれば、戦をなすことも稀なり。近き敵の播州小鹽の赤坂晴政は、勢衰へ、宗景の兄の政宗は、寶津に蟄居して、家臣皆宗景に従ひたれば、恐るゝこともなく、松田西備前を治めて、尼子家に



屬して居たれども、次第に勢ひ衰へて、備前も國中、大抵は宗景に、慕ひ敵するもの者少し。

備前軍記 卷第二 終

備前軍記 卷第三

中山備中・島村貫阿彌を宇喜多討取る事

中山島村  
宗景に叛

邑久郡砥石の城主島村貫阿彌・上道郡沼村龜山城主中山備中或曰圓山城敵に内通して、宗景を背く聞えあれば、宗景、之を討つべき内心なれども、所々の合戦、隙なくて延引あれば、色にも出さずして、漸く永祿二年の春に至り、宇喜多直家申しけるは、島村相叛き申候由、則ち自筆の文をも取出し、慥なる證據をも、取りて告げければ、宗景も兼て、聞えし事なりとて、始めて此事を謀りて、いかゞして討つべきとあれば、直家答へて、貫阿彌事は、某が祖父の仇にて候へば、仰付けられ候へば、早速討取り申すべしと望む。其時、宗景曰、夫は望に任すべし。汝が舅中山備中も、謀叛の聞えあるは、知りたりやとあれば、直家答へて、是も其沙汰、承及びたり。舅なれど

中山備中島村貫阿彌を宇喜多討取る事



も、君の御爲めに候へば、是又御下知に候へば、討つて參り候べしと諾ふ。宗景、其忠義甚だ感賞ありて、中山・島村誅罰の事、汝一人に任する間、誤なく謀を運らし、人數をも出さず、外の騒ぎにもならぬやうに、よく計らへとて、歸しける。直家、奈良郡の城に歸りて、工夫を廻らし、舅中山方へ一入、親しく懇にして、龜山城の沼より、東茶園畑といふ所に、小さき茶亭を作り、直家、殺生野廻りの時、此亭に休らひ、中山をも此所に呼びて、殺生の鳥を、爰にて料理して振舞ひける。度々此の如くあれば、備中、此沼を廻りて、遠く至るを愁ひて、沼城より此茶亭へぞ橋を架けんといふ。直家悦びて橋を架けたり。其後は、猶ほ度々、彼亭へ往きて、酒宴に及ぶ。直家謀しすましぬと思ひ、宗景へ密に告げ、最早近日には、備中をば討取りぬべく覺え候。左もあらば、烽火を擧げて、相圖をなすべし。其時、貫阿彌方へ御使にて、中山備中、謀叛ありしに付、某に仰付けられ、御成敗ありし。貫阿彌急ぎ、沼に參りて、某と謀りて、城を堅固に取圍むべしと、御下知あらば、沼へ來るべし。其時、島村をも討取り申すべしと、密に註進せしかば、宗景、人を福岡の邊に置きて、烽火を

浮田直家  
中山備中  
を討つ

守らせける。二月の事なりしに、毎の如く、沼村邊にて、直家殺生して、暮に及んで、彼茶亭に行き、其夜は又直に、沼城へ入り、酒宴をなす。深更に及べば、備中も興に乗じて、今夜は夜も更け候間、是に御逗留あれといひしを、直家、幸の事に思ひ、左あらばこゝに逗留仕るべし。家來は返すべしとて、供に來りし者を呼び、今夜は爰に一宿すべし。皆歸すべしと下知す。城中にも、番の備共、皆休息させ、女童二三人酌にありし計りにて、打解け物語して、猶ほ夜も更けて、御休み候へとあれば、備中寢所へ入らんとする所を、直家、刀を取廻す體に見せて、抜打に備中を切る。切られながら、脇差を抜かんとせしを、組伏せ、首を取り式臺へ出で、戸を開き、門をも内より明けて、直家の家來を呼ぶ。兼て謀りし事なれば、城下に忍びて、所々に隠れし直家の侍、駆込み切廻る。城中の家來は、思ひ寄らぬ事、誰を敵とも知れざれば、十方にくれて、逃迷ふを、此彼所にて切殺し、即時に城を乗取りければ、則ち相圖の烽火を揚げ、宗景より福岡へ出し置きける、之を見て、兼て示し置きし如く、島村が砥石の城へ、使到りて、早く沼城へ到り、直家に力を合すべき由の書



直家島村  
貫阿彌を  
討つ

狀を出しければ、貫阿彌、斯くの如くの謀ありとは知らず、有合士七八人を連れて、沼城へ馳來り、見れば早や城門も差固め靜りてあれば、島村城中へ案内して、門を開かせ、本丸へ入る。直家は兼て、計り置きたる事なれば、貫阿彌を即時に斬殺し、供の郎等も、夫々手當あれば、残らず殺しけり。又跡より來る島村が家來共、道々に伏を置きて打捕り、扱沼城には、直家の家來、少々残して守らせ、自身は直に砥石城へ取懸け攻めけるに、城中の兵は、悉く沼城へ馳行きて、残る者は、下郡共計りなれば、手に立つ者もなく、立所に城を乗取りて、是も直家の臣を、置きて守らせける。是等の事、委く天神山へ註進あれば、宗景、大に賞美ありて、沼城を直に直家に給ひ、中山・島村が所領をも、過半與へられければ、頓て沼城へ移り、奈良郡乙子の城をば、家臣をして守らしむ。直家の祖父の讐、貫阿彌を討ち、又天神山より采地を増して給ひ、城をも多く取敷きて、其勢竝ぶ者なかりけり。此後は、天神山の下知をも受けず、自身の計らひにて、兵を出し、所々を取敷きて、直家の臣を、分けて入置きて、守らす取出共多し。

直家威を  
振ふ

### 穰所元常を討取る井龍口落つる事

龍口城を  
攻む

上道郡龍口の城には、穰所治部元常ありて、松田に屬せしかば、之を討取らんとて、沼の城より、浮田七郎兵衛忠家を大將として、長船又三郎延原等を出して、之を攻めんとす。穰所治部、此元常は、文明年中、福岡合戦の時、松田に屬せし穰所彈正左衛門が末孫なりといふ。城を出て、竹田河原の北に、備へて戦ふ。宇喜多の先手長船延原、追崩されて敗走す。治部、直に忠家が旗本に、討つて懸り、之をも追崩すべしと、備亂る、所を、先手の長船延原、早く取つて返して、元常が勝誇りたる備へ、横を入突いて懸れば、治部、是に切立てられ、敗北して段の原を指して引退く。宇喜多勢も、其道の狭ければ、長くは追はず、備を纏め、引取らんとする所へ、赤坂郡和田の城主和田伊織、行年十九歳、容貌美にして、心も剛なりしが、兼て元常と、男色の親しみあれば、此合戦を聞き、五十騎計りにて、龍口を救はんとて出てけるが、早や軍果てける所へ、進み來て、河原に旗を立て、打つて懸る。されども浮田忠家の旗本も、先手も備を纏めて控へたれば、強ひても戦は

穰所元常  
敗北

穰所元常を討取る井龍口落つる事



ず。又日も暮に及びければ、互に備を入れて、己が城々へ歸りける。其後も小迫合どもありけれども、人數を多く出して、合戦するに及ばず。其上此龍口の城といふは、北西は嶮岨にして、屏風を立てたるが如し。山下に大河廻り流れ、南は谷深く、東計り脇田山に續き、甚だ堅固なる城なれば、力攻めにしたりと云、兵士の損ずる計りにて、攻取る事は難ければ、謀を以て、攻取らんには如かじと、長船又三郎、諫めて直家へ申しけるは、御譜代の子供の中、容貌もよく、又心も速かなる者を、撰び給ひて、敵の城中へ入れて、討取り給ふ事然るべし。治部は、武略よけれども、男色に耽くる者なれば、斯の如くあらば、十にして七八は、討取る事あるべしといひて、岡清三郎が、直家の傍に居たりしを見やりて、申しければ、直家も心得、打點頭きて、答にも及ばず、座を立たれける。夫より一二日も立ちて、岡清三郎、不義の密契あり。其艶書は、取りたれども、其相手は、誰とも知らず、拷問して聞き極め、成敗せんと、捕りて押籠められ、此の如き事、誰知りたる事もあらねば、清三郎、斯かる事あるべからずと、家老共、様々いひて、直家の心をなだめけれども、更に聞入れず、

奥に入りぬ。又三郎より外の家老、此密計を、實に知りたるか知らざるか、皆眉をひそめて退きたるに、岡平内に來れとありて、物蔭にて呷きて、直家申されけるは、汝、清三郎を、密に圍を抜けさせ、爰を落ちて、何卒龍口の城へ入らしめよ。謀は清三郎に、此間能くいひ聞かせたりとあれば、平内、畏みて密に、清三郎が圍を出して、落しける。其明くる日、清三郎を城外へ出して、誅せよとて、牢を明くれば、清三郎見えす。番の者呆れて、斯くと申しければ、直家、大に怒りて、即時に、其牢番をば成敗ありける。扱平内は、盗出せし清三郎を、龍口の城の川向牧石原に、平内が遠き縁ゆかりの僧の、草の庵を結びて、住ひけるものありければ、之を幸と頼みて、其庵に隠し置きて、便宜を求めて、龍口へ奉公せんことを窺ひける。或時、治部、城下の川に、網を引かせて、之を見てありしを、能き時節と、清三郎も川岸近き藪蔭に、尺八を吹き、暫し歩みける。治部も、常に尺八を好みければ、之を聞きて、人を遣し見せけるに、其人歸りて由しけるは、年の程、十五六の美少年の、尺八を吹くにて候とあれば、治部、さらば行きて見んとて、己が劔術の師加藤十藏子小姓早川左門、水野



織之助、彼是六七人、小舟を川向の岸に付けて、其藪蔭に行きて見れば、清三郎、其儘尺八を吹き居たり。白き帷子に、刀・脇差をさし、其容貌美麗、いはん方なし。皆驚き、殊に治部は男色を好めば、此清三郎が傍に歩み寄りける。清三郎驚きたる振にて、彼草庵に歸り入らんとするを、治部、詞を懸けて引留め、御邊は、いかなる人ぞ。斯かる方にあるべき方とも思はれず、夫のみならず、尺八の調、耳を驚かしぬ。某は龍口の城主なりといへば、清三郎驚き、手をつき、治部公にてましますにや。某は此頭なり。宇喜多直家に、仕へたりし岡清三郎と申す者なるが、奸曲の者にさへられて、無實の罪を受け、已に成敗に逢ふべきを、家老共不便を加へ、密に落し候て、怪しき命は助かり候へども、寄る方なく、やう／＼此草庵に身を隠し置き候て、近き間、遠國へも參るべく候。もとより敵中より參り候者なれば、御不審も候べし。さらば如何様にも御計らひ候て、なき跡を頼み奉ると打萎れて、涙ぐみたる様、いと哀れなり。治部、男色を好む上、清三郎が様の哀れなれば、爰に捨置きては、いかなる難に逢ふべき。又此美童を、人に任せんも、いと残り多し。寺城に速

に歸らんと思ひ極めて、供にありし加藤十藏を、かたへに招きて、斯くやんごとなき少人、爰に捨置きなんも、残多くも又不便にもあれば、城に連れ歸らん。敵中より參りし者といへど、野心などあるべき程の年にもあらずといへば、十藏答へて、敵中の者に候へば、幼年たりとも、いかゞ御了簡あれかしと、諫むれども、更に聞入れず。若し野心あるやうもあらば、其時、手に懸けて成敗せんに、何の難き事あるべき。殊に彼に付き、敵中へ謀をなす媒ともなりなんなど、非を理に曲げていへば、十藏も力及ばず。扱治部近く立寄り、清三郎、自らいひしは、其身の難をかくまふべし。我に従ひて、城中へ来るべしとありければ、御情の程、身に餘り忝く覺え候へば、いかて否とは申し奉らん、仰に従ひ參らせん。然し一先づ庵主へも、其由語り聞かせ、暇乞をもなしたしと申せば、暫しの事、何か苦しかるべきとて、供にありし郎等、一人差添へて遣し、やがて立歸りければ、則ち引連れて、初めの舟に共に打乗り、城に歸りて、身近く愛せんと思へども、敵中の者、其少年の言葉計りにては疑はしく、臣も之を謀りければ、さすがに身近くも、なさざりしが、沼の城下へ間者を



入れて、事の様を聞きしに、清三郎が物語せしに、少しも違ひもなかりければ、今は疑も解けて、身近く寵愛し、水野・早川兩人の愛も、やゝ疎くなりて、唯清三郎と酒を盛りて、酔ひ臥しぬる事、度々なれば、皆あやうき事に思ひて、老臣共、之を諫め、又加藤十藏を、和田の城へ遣りて、老臣伊織を頼み、意見を乞ふといへども、更に聞入れず。清三郎が心底を試みるに、更に野心などある者には、あらずといひ放ちて、之を愛しける。其上、此事の初め、沼城にて、言語もならぬ程に、老ぼれたる乞食女を、清三郎養ひて、己が母と唱へ置き、沼城より盗み出し、龍口の城に養ひて置き、清三郎母と稱して、いと懇に、朝夕仕へける。誰か之を謀とは知るべき。是等の事にて、老臣等も疑を少し散じければ、其後は強くも諫めざれば、彌治部は、打解けて清三郎のみを相手として、酒宴の隙なし。清三郎も、情の厚きに馴れて、身命をも抛ち仕へける様に見すれば、治部斯くこそあるべけれど、露心おく事もなく、其外も此奉公の様を見て、今は疑心も、何となく解けて、月日も経ければ、今は皆心置くさまもなきを、清三郎見濟し、永祿四年六月半の頃、暑さを避けて、

穢所元常  
殺さる

城の北の流に、臨みたる涼所にて、河水を見下し、清三郎と共に、尺八を吹き、數盃を汲みて沈酔し、清三郎が膝を枕になし、時を移して眠りける。其外は、あたりに人もなければ、今こそよき時節なれと思ひ、治部が脇差の側にありしを、引寄せて心もとを刺し、首打落し、袴をぬきて、首を包み、河の上にはたちらる。嶮岨の九十九折を下りて、毎もつなぎ置きである、治部が川遊する、小舟のあるを引寄せ、首を先づ投入れ、續いて乗らんとする所へ、早川左門、此音を聞付けて、涼所へ行き見て見れば、主人は朱になりて首なし。是は清三郎が所爲なるべしと、清三郎が、殿を切りたると、二三聲呼ばはり捨て、先づ追駈けて出て見れば、此の險阻を下る者かげ見えしを、續きて追行き、其舟の際にて追着き、打つて懸るを、清三郎、振返りて切付ければ、左門が鬚のはつれより、左の肩先へ切割き、はづれに切りけれども、うす手なれば、二の太刀にて、左門が眉間を切付け壘み重ねて、切捨てける。左門は、時に十五歳なりしとぞ。其首をば取らず、清三郎は急ぎ、件の舟に打乗り、棹さして川を下り、打あがり逃行くを、城兵共舟を求めて、跡を追へども、時



岡剛介

も延びければ、尋ね得ずして、清三郎、事故なく沼の城へぞ歸りける。先づ清三郎は、岡平内方へ行きければ、則ち之を連れて、直家の前に出て、治部が首を出しければ、直家、大に驚き、幼年にて此謀を仕負せん事、難き事なれば、終には殺されもやせまじと、不便に思ひけるに、よくも討取りたりと、且つ悦び且つ感じて、賞功淺からず。其明の日、前髪を取らせて岡剛介とぞ名乗らせける。扱龍口の城には、老臣山口與市、衆を集めて、主人の生害、今は悔むとも是非に及ばず。此讐を報じ、弔をなさん事を、衆議して論ずるに、沼の城へ押寄せ、無二の一戦して、討死せんといふ者もあり、又和田の城主伊織を招きて、大將として籠城せんともいへど、我城を捨て、龍口の城に籠らんも、なり難しといへば、さらば此山口與市を大將として、楯籠るべしと、衆議定りて、一先づ穰所が家臣、楯籠りける。沼よりも此舉に乗じて、龍口の城を攻む。今は主人なければ、兵氣一ならずして、防戦も叶はず。又落行く者も多ければ、山口與市も籠城するに力なく、されども老臣の身なれば、士卒と共に、落行く事も、面目なく覺えて、詮方なく三の曲輪にて、腹切りて失せにけれ

山口與市  
龍口籠城

龍口城没落

ば、誰城を守る者もなく、散々に落ち失せて、宇喜多勢入替り、所々に火を放ち、一時に焼拂ひ、直に和田の城をも攻めければ、伊田伊織城を落ちて、金川の城へぞ立退さける。

一説には、岡清三郎、一旦龍口の城の川向舟山城主須々木豊前に奉公して、後、穰所が方へ行きしも、其時偽りて、母とせし乞食女を、牧石河原にて切殺し、獄門にかけられしといふ。又一説にも、治部を討ちしは、岡本權之丞といふ。又龍口の城主穰所治部を、修理ともいふ。されども本文に記せる所、實説なるが如し。岡剛介、此後も武功を重ね、大身となりて、後には岡信濃といふ。或曰、穰所治部が子小姓早川左門、龍口の城下北の川端にて、清三郎に討たれけるを、其所に則ち葬り、其塚、今もありといふ。尋ね、べし。

### 浦上政宗父子生害并清宗殺さるゝ事

浦上宗景の兄掃部助政宗は、播州室の城に在りけれども、其性愚にありければ、宗

浦上政宗父子生害并清宗殺さるゝ事



浦上政宗  
父子生害

景には攻められて居たりける。其政宗の嫡子を、小次郎といふ。一曰、與姫路の城主黒田官兵衛娘を、此小次郎妻として、永祿七年正月十一日、婚禮ありしに、其夜の騒ぎに、小鹽の赤松晴政より、忍びを入れて、政景も小次郎も、父子共に殺害す。されども小次郎弟三郎九郎清宗といふありければ、其臣江見河原源五郎等、取立てて、室の城を取治めける。政宗の法名は、實嚴祐英といひ、小次郎の法名は壽成といふ。其黒田の娘をば、弟の三郎九郎の妻として、男子一人出生す。之を久松といふ。然るに江見河原を、天神山の宗景より語らひて、三郎九郎を討取りて出さば、所領を興ふべしとありければ、是に與して、永祿十年五月十八日、月待の夜、三郎九郎を殺して、源五郎は、天神山へぞ逃行きける。源五郎が母をば、室に残し置きたりしを、串指にして殺されける。其時の狂歌に、源五郎、兼て鼓の上手にてありければ、

三拍子揃ひにけりな江見河原うち親うち鼓さへうつ

三郎九郎清宗、法名江月惠觀といふ。其子久松、幼年にて、室にも住み難くて、小鹽に行きて居けるが、九歳の時、宇喜多直家備前岡山へ迎へ取りけるとぞ。

清宗殺さる

### 宇喜多と松田と和睦并三村家親備前へ働く事

宇喜多と  
松田和親

松田左近將監元成、文明の初め、赤松を背き、西備前を治めしより後は、代々浦上と合戦に及び、宇喜多と戦ふ事隙なくて、尼子へ屬してありしが、近年、尼子家衰へぬれば、松田も又勢を失ひけるを見て、直家より和睦の事を、いひやりければ、則ち領掌して、是よりは宗景の先鋒となり、則ち松田當左近將監、天神山へ遣仕して、直家の娘二人ありしを、宗景の下知にて、一人は此左近將監に嫁し、一人は作州三星の城主後藤攝津守元勝の妻となさしむ。又備中國成羽の城主三村紀伊守家親、年來、毛利元就の麾下にありて、伯州不動が嶽、或は法性寺の城にありて、尼子と合戦隙なし。故に自國の迫合なかりければ、松田等、備中に出て、土地を犯す事多し。今は尼子衰へて、雲州富田一城になりければ、三村も、暫く本國に歸り、領分をも治め、松田をも討たばやと、毛利家に乞ひければ、元就聞きて、尤なり、望に任すべしとて、備中へ三村を歸されける。扱三村備中へ歸りて聞けば、松田は宇喜多と和睦

三村備中  
出陣

三村家親  
尼子合戦



し、浦上へ屬して、備中へ働くべく聞えければ、先づ三村、備前へ働き出でて、岡山の城を攻め、舟山の城を攻めて、金光與次郎・須々木・豊前等に、降参させて、備中へ歸りける。

### 三村家親作州へ働き并馬場高名の事

三村家親  
作州出陣

三村紀伊守、永祿八年五月には、又美州に出陣して、後藤紀伊守勝元が三星の城を攻む。勝元は、天神山の麾下にて、又直家の婿なれば、加勢として、直家より馬場次郎四郎に、足輕を副へて遣す。敵城を攻むれば、城中よりも兵を出して、日々迫合あり。五月廿四日、次郎四郎、愛宕精進の爲めに、城の前の川に出でて、沐浴しけるに、敵出づるを見て立歸り、具足を着して出でけるに、城兵一人、先立ちて敵と鎧を合す。又外に敵二人、弓にて鎧脇を詰むる。次郎四郎之を見て、其弓を持ちたる二人の敵へ、突いて懸る。餘りに間の近ければ、敵矢を放つに及ばず、刀を抜きて切つて懸れば、鎧を以て、次郎四郎、之を強く突立つれば、叶はずして逃げて行く。又

馬場高名

敵一人、鎧を以て懸れば、是と鎧を合せしが、初め鎧を合せし敵味方と、物分れしと、次郎四郎が鎧を合せてある後より、突いて懸る。前後の敵を、一方へ引請けんと、少し退きて、二人と戦ふ。よき透間を見て、二本の鎧を一所に手取りにして、放さぬ故、敵二人ながら、鎧を突放ちて退くを、追懸け行き、一人の敵躓き倒れければ、直に押伏せ、首を取る。其所へ敵二三人來りて、馬場が兜を取つて、引倒さんとする所を、切拂ひ、又切つて懸れば、馬場が勇に恐れて、近付く者なし。其場は早や敵陣に近く、又敵十四五人計り鎧にて控へて見え、又續いて味方の勢もなければ、次郎四郎も引退く。敵少々追來れども、切拂ひして、三星の城へ歸りける。其後も小迫合はありけれども、強く合戦もなし。或日、狂歌を書きて、矢文を城中へ射る。

井樓をあげて攻むるぞ三星を天神添へて目通くびもの  
城中より、額田與二右衛門、返歌を書きて射返す。

天神のいのりりの強き三星をなりはすまど家近に居れ

などいふ事ありて、三村も強くも攻めず、備中へ歸りける。馬場次郎四郎が、此度



の鐘、天神山へ聞えければ、早々宗景より感状を出されける。

今度於ニ三星山下、及ニ合戦、經ニ鎗令ニ粉骨ニ之段、無ニ比類ニ候。恩賞必追而可ニ相計ニ候。恐惶謹言

五月廿八日

宗景在判

馬場次郎四郎殿

### 三村再び作州へ働き并家親討たる事

年も明け、永祿九年の春になりて、重ねて三村家親、作州へ働き出で、備前へも討入るべき由聞えければ、宇喜多安からず思ひ、何卒謀を以て、三村を討留むべしと、工夫ありて、津高郡賀茂に住せし浪人侍に、遠藤又次郎・同喜三郎といふ兄弟の者あり。初めは成羽に、久しくありて、家親をもよく見知り、家中にも知音もあり。又作州堺に今居れば、土地の案内も、よく知りたれば、能き間者と思ひて、兄弟を呼寄せて、何卒家親が陣所へ忍び入りて、謀を以て、殺すべきやうであると、密に頼まれ

三浦家親  
作州出陣

ければ、又次郎承り、仰畏り候。されども一大事の御頼みにて候へば、三村は大名にて、人数も多く候へば、某が身にて、討取らん事、甚だ難儀なる事にて候。されども某を、御見立て御頼なされ候事、生前の面目にて候へば、身命を捨て、謀をなし申すべく候。されども功を遂げずして、打取られ命を失ひ候はゞ、妻子をばよきに頼み奉るといひて、諾ひければ、直家、大に悦び功を遂げば、賞は望に任すべしとありて、遠藤兄弟作州へ立越え候て、彼方此方と忍びける。三村家親、此度は、穗村の興禪寺を、本陣として、其邊に皆々軍兵共、陣取りける。常に其等の便宜案内は、よく知りたれば、敵陣の間を忍び入りて、兄弟申合せ、鐵炮にて覗ひ、打殺さんと謀りける。二月五日の夜の事なれば、月も入り、夜廻りの者に紛れて、二客殿の庭へ忍び入り窺へば、本堂の方に、家親が聲聞ゆれば、縁へ上り、唾にて障子の紙を濕し、打破り見れば、家人を集めて、家親は佛壇の前に、寄副ひて、軍評定をせしと覺ゆ。又次郎隠し持ちたる短き鐵炮に、二つ玉籠めたるにて、之を打たんと、彼の障子の紙の破れより狙ひけるに、火繩立消して、玉出でず。則ち鐵炮を引き、其筒を縁の



下へ隠し置き、又夜廻りの番所へ行き、篝火によりて、寒氣世のうさなど物語り、静にして羽織の裾、火の中へ入る。番人物焼き臭しといふ。喜三郎龜末にて、某が羽織を焼きたりとして、揉消す振りにて、其所をさりげなく立去り、木陰にて其火を、火繩に移し付けて、又次郎に渡す。又次郎、之を取りて、又元の縁に上りて、覗き見れば、今度は家親、初めの佛壇に凭れ懸り、眠り居たるを幸ひと、能く狙ひすまし、打ちたれば、胸を打抜きぬと見ゆ。兄弟共之を能く見極めて、堂の後の藪に、隠れて居たるに、寺中大に騒ぎけるが、程なく静りぬ。さらば忍び出でんとせしに、最前の鐵炮を、縁の上に其儘置きたり。之を置きなば、以後に隠したるといはれんと思ひ、再び立歸り見れば、元の所に鐵炮の、其儘ありけるを提げ、藪を潜りて、忍び出で、事故なく備前へ歸り、沼の城に至り、其夜の次第を、細々と語りければ、直家、大方なく悦び、猶ほ實否を極めん爲めに、作州へ忍を入れて聞きしに、家親死したるといふ沙汰もなく、今日は備前へ打入るとして、皆兵糧などつかひて、軍立ある體を、聞きて歸りければ、直家も不審しけるが、又聞えしは、三村が軍勢、途中よ

三村家親  
狙撃さる

り俄に備前へは向はず、備中へ向けて歸陣したり。是家臣三村孫兵衛、諸軍を静めん爲めに、家親の死去を隠して、事静かに、成羽へ軍を入れけるにてありけり。扱歸着の後、家親の死去を披露ありければ、家臣、誠に暗夜に、燈を失ひしが如く、呆れてぞ居たりける。其後、興禪寺にて、家親打殺されし事、世に隠れなければ、其賞として、又次郎に千石の地を當て行はれける。夫より多く武功を重ねて、浮田の號を許され、領地も替へられて、後には浮田は河内と名乗り、四千五百石の地を領しける。弟の喜三郎も、同じく賞を行はれ、是も後に遠藤修理といひける。

一説に、家親を遠藤が鐵炮にて、打ちし事は、作州弓削寺といふ。又佛經寺にての事ともいふ。共に誤なり。久米郡穗村の興禪寺に、後迄佛壇の横板に、其鐵炮の玉跡ありしと、見し人語りし。

### 三村五郎兵衛、紀伊守の弔合戦討死の事

斯くて、備中成羽には、三村紀伊守家親を葬り、佛事などなし、忌中も過ぎて、老臣



等打寄り、弔合戦をせん事を論じけるに、三村五郎兵衛、進み出でていひけるは、先君あへなく、宇喜多が爲めに、命を失ひ給ふ事、其憤骨髓に通りて、無念なれば、弔合戦日を延べ難し。其上をめぐとしてあらん事、當家の恥辱、申すに及ばず。一日も早く、軍を出して、先君の讐宇喜多を討つて、其首を手向け奉らん外なし。若し運盡き、戦ひ負け討死せば、先君の死に従へるなりと、無二の覺悟にいひ出しければ、三村孫兵衛親成、答へて五郎兵衛論ずる所、一理あれども、今此怒に任せて戦へば、味方の兵を多く損じて、戦、勝利あるべからず。其上、又敵に勝を付けて、後度の戦なるべからず。暫く時を待ち、元親實親家親の二男三男なりの兩君を、守立てて成長の上、之を大將として、一戦を遂げんこそ全き忠義なるべけれといひければ、一族郎等、時に當り、討死せん命の惜さにや、皆孫兵衛が旨に同意して、此謀、尤もなりと、是に決定しける。されども五郎兵衛は、是に同心せず、皆孫兵衛が遠き慮りに同意して、家中一統に存命して、若君を守り立て奉り、忠義をなせば、御跡危き事なし。此五郎兵衛に於ては、愚昧にして、命永らへたりとも、君を助け奉る才力ある

## 沼城合戦

身にあらねば、吾一人は敵に向ひ、弔合戦をなし、討死して君恩に命を奉る外の、後念なしとて、其座を立てば、其一族若黨五十餘人、犇々と出立つ。其外家親に、厚恩を蒙りたる士六七輩、是に同じ、皆一途に討死を定めて、禪院に残らず立入り、松峯和尚といふ禪僧に、末期の一唱を受け、面々法名を過去帳に記し、焼香して、直に出陣し、永祿九年四月、備前堺より沼城の直家へ、使を立て、三村五郎兵衛、今度主君三村家親の弔合戦に、罷向ひたりといひ送り、上道郡へ打入りける。其勢僅かに七八十百にも足らざる勢を、二手に分けて、一手は五郎兵衛、將となりて、釣の渡りより南に向ふ。一手は、矢津越より沼城へ押寄する。直家之を聞きて、七郎兵衛忠家、戸川・岡・長船・小原等に、三千餘人を添へて三村勢に出向ふ。宇喜多勢も三備に分けて、一手は南の勢に向ひ、一手は矢津越より來る敵に向ふ。一手は遊軍となす。是は此度の戦は、最前の憤を、深く思ひ詰めたる弔合戦なれば、小勢ながらも、必死の敵にて、味方危き故、此遊軍にて、弱きを援はんとて控へたり。五郎兵衛、五十餘騎一手にして、思ひ切りたる事なれば、弓・鐵炮を放射すと齊しく、突いて懸る。長船



三村五郎  
兵衛討死

が備も、之を請けて、暫く攻合ひ戦ひしが、長船切立てらる。二の目に備へたる岡、之を受けて、渡り合ひ切結ぶ。是も危く見えければ、七郎兵衛忠家、横鎗を入れて突崩す。必死を極めたる三村勢なれば、引くも退かず、三村五郎兵衛が郎等、三田權兵衛・山縣作介・兒島十郎太郎、枕を並べて討死す。五郎兵衛も四方八方切つて廻り、終に其所にて討死す。大將討たれば、是にて散じける。扱矢津へ向ひたる勢には、戸川平右衛門馳合ふ。是も同じく必死の兵なれば、鋒先甚だ鋭くして、戸川勢打負け引退く。其時土田の上蟹の目といふ所にて、三村が備五人鎗を揃へて、突いて懸る。馬場重助、次郎四郎、名を改めて重助といふ。爰に向ひて、先づ弓を以て、敵一人を射伏せたり。残る兵と、鎗を合せて突合ひけるが、續く味方もなく、戸川が備も、引取ると見えければ、突拂ひくして、山の腰を傳ひて退く所に、味方一人、敵と渡り合ふ。手をも負ひて、既に討たるべく見えければ、敵を突拂ひ、其味方の手負を助けて引退く。其時、味方の備よりも、取つて返し來りて切合ひ戦ふ。敵必死に極めて、強しと雖も、小勢なれば、終に味方の大勢に、戦ひ負けて、三村勢、悉く討死して果てにけ

る。されども五郎兵衛を始め、七十餘人、命を君恩に報じ、名を千載に残しける。

宇喜多方にも小原藤内・高月十郎太郎・矢島源六・宇佐美兵藏等、四十七人討死し、手負百餘人に及びける。今度馬場重助へ、直家より感狀を出しける。

去十日、蟹目被<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>合戦、於<sub>ニ</sub>鎗脇、敵一人被<sub>ニ</sub>射伏、剩引退刻、後陣葦合戦之體、

被<sub>ニ</sub>見懸、被<sub>レ</sub>返候由、志之程、神妙候。必可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>褒美<sub>一</sub>者也。仍狀如<sub>レ</sub>件。

五月十五日

直家在判

馬場重助殿

### 宇喜多と毛利家和睦の事

宇喜多直家、永祿九年迄は、毛利元就にも尼子晴久にも敵して、作州鷹巢城を攻落させて、花房助兵衛・職之城主江見次郎を、討ちて歸りける。又備中にては、日幡八郎左衛門、毛利勢の圍を受けて、籠城しけるが、沼城へ援兵を乞ひければ、又花房助兵衛に、足輕を添へて差遣し、之を助けて籠城し、終に毛利勢を追退けぬ。然るに



此頃、天神山の浦上宗景より、毛利輝元へ使を立て、近年家臣宇喜多直家、逆威を振ひ候。之を誅罰せんと存候。援兵を頼入る由を申遣す。又備中の三村家よりは、父の家親を、宇喜多に討たれ候。此讐を報せんと存候。哀れ御加勢を下され候へ。此恨を散ぜん爲めに、備前を切從へ、國をば進上申すべしと、いひやりける。此事共、直家傳へ聞きて、今毛利と中違して、近國の敵に力を添へられなば、叶はじと思ひ、小早川隆景へ、角南隼人入道如慶を、使に遣して、安國寺を以て、深く頼み、浦上三村を捨て、加勢を某に給はり候はゞ、備前半國をば進すべしとありければ、其節は、元就は老衰して、吉川元春、小早川隆景が計ひなれば、兄弟、雲州の陣所に評議して、上方へ手遣をなさんにはとて、宇喜多直家に力を加へ、備前を味方に屬けて、働くに利ありとて、宇喜多と和をなして、合力すべしとの答にて、角南如慶歸りければ、浦上三村とは、毛利家手切に及びける。宇喜多が武威、彌、盛になりけり。

宇喜多  
毛利和睦

### 津田村明禪寺城落城の事

三村家親殺されし後、次男修理亮元親三男孫次郎實家・家親の弟同宮内少輔等、相謀りて、備中の城々に兵を籠め、備前にても、岡山城主金光與次郎・舟山の城主須々木豊前・中島の城主中島大炊等を、味方にして、宇喜多勢を防ぎ守りければ、直家も、容易に備中へ、人数を出す事もならず。却て三村、統べて備中國中の兵を驅集め、大軍を以て、備前へ働出でて、宇喜多と合戦し、親の仇を報せんと、用意する事頻なり。宇喜多家に、之を聞きて、沼城の防戦の爲めに、永祿九年の秋、上道郡澤田村の明禪寺山に城を築きて、番勢を置きけるに、備中より兵を出して、所々に小迫合ありて、明禪寺の城へ、敵取拂ひ攻めける。城中よりも兵を出して、防ぎ戦ふ。馬場重助、山の麓に下りて防ぐ。其中に大溝あり。重助、飛越ゆるとて、向の岸を踏崩し、轉ぶ所を敵、鎗にて突く。重助起上る勢に、敵、鎗を突外し、行あまる。重助、則ち刀を抜きて切伏せたり。其所へ敵又、一人來りて、重助に打つて懸

三村宇喜  
多合戦



る。之をも討取る首、二つ提げて、城に入りて、其日の迫合は果てにけり。明日、永祿十年の春、御野郡へ、備中勢出張りて、風雨烈しき夜、明禪寺の城へ夜討をかけ、澤内村を焼きて攻入る。城中も不意を討たれて、大きに周章す。此火の光に、松明も立てず、備中勢、所々より攻入りければ、前後も辨へず、敵味方も分き兼ねたれば、防ぎ兼ねて、終に一の木戸を乗取られ、多勢入りぬれば、城兵詮方なく、南の山越しに、中川へ出でて、漸々沼城へ引取りける。討たる者も、五六十人に及びける。其跡へは、備中勢入替り、根矢與七郎・薬師寺彌七郎に、人數百五十餘人を添へて、明禪寺の城を守らせける。

明禪寺城  
没落

按ずるに、澤田村明禪寺山の城を、近世に記せるものに、皆妙善寺山と書く。是は御野郡津島村に、妙善寺あるに混じて、誤れるなり。寂室語録に、明禪寺にて作る所の詩、一章あり。文明中に註せる首書に、明禪寺は、備前國の澤田村にありと書きたり。則ち其寺の、廢せし跡の山なるべし。

### 明禪寺合戦備中勢敗軍の事

宇喜多直家より、備中方へ屬せし諸士へ賄し、謀を運らして内通せしめ、殊に岡山城主金光與次郎・中島の中島大炊等は、備中の味方は遠く、沼城の宇喜多は近き故、内々直家へ通じける。又舟山の須々木豊前も、同意しければ、明禪寺山の根矢・薬師寺方へも、沼より通じて、岡山・中島・舟山等も、皆味方へ參るべき由なり。其城、敵中にありて、始終守りつめ難し。降參あらば、所知を宛行ふべし。さなくば兵を出して、其城乗崩すべしと、いひやりければ、根矢・薬師寺評議して、舟山・岡山等の味方、沼へ參るべしといふは、直家の僞なるべし。其上、根矢・薬師寺、共に妻子を備中に置きたれば、宇喜多に通ずる事なるべからず、されども此城、無勢なれば、直家、大軍にて攻めん時、禦防の術なし難く、早く備中へ、此由を告げて、援兵を受くべしとて、飛脚を立て、加勢を乞ひ、沼へは手切の返答に及びける。直家、此に依りて考ふるに、明禪寺の城を攻めば、備中勢、必ず後詰あるべし。さあらば敵を味方



地へ引出して、討たんに利あるべし。幸の事と工夫ありて、金光與次郎へ、直家より頼みにて、近日明禪寺城を攻めば、其時、三村後詰あるべし。さあらば有無の一戦して、三村を討取るべき間、必ず備中勢後詰あるべきやうに、誘ひ出すべしと、いひやりければ、金光、領掌して、石川左衛門久智三村元親の姉婿なりへ、使者を以て、いひやりけるは、近日、直家出陣して、明禪寺城を攻むべき聞えあり。其時、早々御出陣ありて、城中と牒し合せて、御討あらば、御勝利疑あるべからず。此事、三村家へ示し合さるべしと、いひやりければ、早速成羽へ註進あり。明禪寺の根矢・薬師寺よりも、飛脚にていひける事同じければ、堅く三村一族、相談ありて、直家は、不具載天の警なり。此度、直家、明禪寺の城を攻むるにぞ幸なる。天の與ふる所なれば、大軍以て駆向ひ、一舉に直家を討取り、其勢に浦上をも討亡し、備前を皆取敷くべし。殊に此節、毛利家出雲へ働きて、留守なれば、加勢の氣遣もなし、能き時節到來、出陣を急ぐべしと、備中にて三村統勢を、驅催しける。總大將には三村修理元親・石川左衛門尉久智・植木下總寺秀長・庄式部少輔元祐等、其勢合せて一萬餘騎の着到を附

明禪寺合戦

けて、既に備前へ發向す。宇喜多直家は、今日沼城を打立ちて、五十餘人と五段に備へ、本陣は、古津の山はなに備ふ。總勢は、目黒村邊迄に控へたり。直家の先手を進めて、明禪寺の城へ押寄せ、先づ一戦して、暫く息を繼ぎたる所へ、斥候者馳歸り、後攻の備中勢、三手に分れて、押向ひ候。一手は、富山の城の南に付きて押出し、一手は首村より、上伊福村通り、中道へ來り、又一手は、山に付き、津島御野村へ通り、駒の渡りへ懸ると見え候と、告げける。直家、之を聞くと等しく、兜の緒をノニ縮め、馬に打乗り、采配を振つて、只今明禪寺城を乗取らずば、三村が虜となるべし。又今此城を、屠り取つて返して、備中勢を切崩さんこと、竈上の塵を拂ふが如し。早や攻落せ、者共とて、田島の中を、一文字に乘切つて、明禪寺山の城下に付いて脱ア大將斯くの如くなれば、諸勢蟻附して、搦立ちければ、城中、身命を捨て、防げども、寄手の勢に、忽ち城を乗取られて、櫓々に火を放ち、寄手切つて廻れば、根矢も薬師寺も力盡さて、南の山傳に、瓶井山へ引取り、引残りたる者共は、度を失ひて、所々に逃げ惑ふを、追詰め、打殺す。扱城中残らず、焼上れば、後詰の備中



直家明禪  
寺占領

勢、遙に城中の火の手を見て、急々牒し合せて、前後より討つべしといふ。謀も相違して、揉みに揉んで馳來れども、行程十餘町を隔たれば、爲方なく直家は城を攻落し、残らず焼拂ひて、其山に旗本の備を立て、靜り返つて相待ちける。斯くて備中勢、備前へ打入り、辛川表にて手配りし、先陣庄元祐七千餘人、金光與次郎宗高を、案内者として、富山の南の野中を、斜に押し、春日社の前なる川瀬を越して、瓶井山に傍うて、明禪寺山の城へ入らんとす。中の手は、石川左衛門尉久智五千餘人、上居福村の中道より、岡山の城の地なる瀬を渡り、原尾島村へ押出づる。是は、明禪寺城を攻むる直家の後陣へ、切懸らんとす。總大將三村元親は、中島大炊を案内者として、八十餘人、釣の渡りを越えて、湯迫村より北の山に傍うて、田御神村を経て、矢津越に沼城へ寄せて、留守を乗取らんと謀る。先陣先づ春日の宮の前の川を越して、三棹山を指して、備を進むる所に、明禪寺山の城兵共の、落ち來る者に、行逢うて、是は如何にもといふ程もなく、宇喜多の先手戸川・明石・長船・浮田忠家等、段々に備を進め、繰替へく、鐵炮を打懸け、三棹山の高みより、鋒先を揃へて、突いて懸れ

備中勢明  
禪寺に攻  
入る

庄元祐討  
死

ば、備中勢思の外に、城を乗取られ、後れ心の附きたる所へ、宇喜多勢は、勝軍せし勢にて、慕直になりて、突懸れば、庄元祐の備へ、忽ち打負けて崩立ち、引返すを、元祐采配打振り、穢し者共、爰を去つて、後日の恥辱遁るべからずと、兵を勇むれども、聞きも入れず、右往左往に引いて行く。又留り戦つて、討たる者も數を知らず。されども元祐を、家臣有岡某と二人、旗本に五十人計り、備へてありしが、今は爲方なし。是迄なり討死せんと、延原土佐が備へ、討つて懸り、火を散して戦へば、延原切立てられ、色めく所へ、二陣に續ぎたる浮田忠家、横合に突いて懸る。朱の四半に、兒の字を書きたる印なれば、元祐、之を見て、此は直家の一族と見えたり。進んで打てや者共と、大聲に呼ばはり、爰を最期と戦ふ。宇喜多は、又一人も漏さず、討取らんと下知すれば、元祐の兵三十餘人、枕を並べて討たれける。元祐も手を負ひたるを、家臣助けて、引取らんとする所を、大將と見えければ、能勢修理、頻に追うて、徳興寺の原一町計りにて、元祐を討取りける。大將討死すれば、先づ此

隱徳記には、元祐、此後、備中にて討死と雖も、是は謀なり。此時、此所にて、備中兵士討死夥し。其骸を、穴を掘りて埋め、塚を築きしと



いふ。今は塚なし。玉峯院の門内に、中手の石川左衛門尉久智は、直家の明禪寺の城を、攻むる後を討たんと、原尾島の西迄、進みたれども、早や城は落ちしと覺えて、火の手揚りたれば、案に相違して、先備を爰に踏止め、控へたる所に、下へ廻りたる元祐が勢も、大崩と見えて、引退けば、石川久智も呆れて、中島加賀といふ老功の侍を呼びて、兼ての謀、大に違ひたれば、只今になり、直家の備へ蒐りて戦ふとも、勝利あるべからず。上の手の、元親の備と一所になつて、直家と一戦をなさんは、如何にとあれば、加賀答へて、仰御尤に候。某が存ずる所は、敵の近付かぬ間に、川をあなたへ退き、西の岸に備を立て、直家、川を渡して蒐らん所を、半途を討ち給はんに、利あるべきか。其外には、斯くの如く、謀相違したる上は、詮方なしといふ。又石川が老臣等、敢て是に従はず、面々軍策を演じける間に、宇喜多與太郎之家按ずるに、此甚だ幼年なるべし。宇喜多氏の別人時、與太郎は、甚だ幼年なるべし。宇喜多氏の別人河本對馬・花房助兵衛、三手に備へて、石川が備へ近々と進みける。石川久智、止む事を得ず、東尾島村の中道に、備を立て、待懸けたり。宇喜多先陣に進みて、打つて懸り相戦ふ。河本・花房は、左右より靜かに、備を進め

て、戦半に、西方より鎗を入れて突きければ、石川勢駆立てられ、中島加賀を始めとして、多く討死して、石川も危く見えけるを、伊勢新左衛門、石川を謀りて、竹田村の末まで引取らる。爰にて敗軍を集めて備へける。宇喜多勢は逃るゝ敵を、八幡村の邊迄追行くを、石川やうやく備を立直し、宇喜多勢の、亂れて追ふを待受け、又引返し戦ひければ、宇喜多勢戦負け、討たるゝものも多く、既に危く見えける。やうやう小町村迄引退く。石川勢も、前の敗軍の跡なれば、強ひても追はず引取りける。扱上の手の總大將三村修理亮元親は、今朝巳の刻に、釣の渡りを越ゆ。若し松田金川より舟にて、下る事もあらんと、須々木豊前をば、其押の爲に、舟山に残し、中島の中島大炊を案内者として、土田矢津越をして、沼城の宇喜多が留守へ切入つて、城を乗取らんと進み行さけるが、四御神村の邊を過ぐる時、明禪寺の城の火の手見えければ、早や落城せしと見る所に、又南の二の手も、追々敗軍せしと見ゆれば、元親の備、總兵騒ぎ立ちて色めき、後陣より引返す。其上、此方には、所々小川多くて、足場悪しければ、騒ぎて引取り、人馬、溝川に落入る者多くて、彌、亂れ崩れける。



されども元親の旗本は、備を亂さず、後陣の亂るゝを見ながら、沼へは越えず、南へ向つて、備へ進め、明禪寺の西の小丸山に、直家の備へしを見懸け、是と一戦せんと押向ふ。直家も元親の蒐り來るを見て、備を山より下し、高屋村に備へて、明石飛彈岡剛介を前備として、待懸けし所へ、元親は親の讐の事なれば、溝をも畔をも構はず、眞一文字に蒐り來る。明石岡が備へ命も惜まず、切つて懸る。其勢に、明石も岡も切立てられて崩立つ。三村、爰を先途と追詰めて、直に直家の旗本へ、切懸らんとする所へ、最前に、國留村にて、備中勢の下の手に、切勝ちたる戸川・長船・宇喜多・延原引取つて後陣に控へたるが、直家の先手切立てらるゝを見て、靜々と備を進め、元親の旗本へ、横合より打つて懸る。此勢に明石も岡も取つて返して戦ひ、直家の旗本も亦進んで、三方より三村の旗本を討ちければ、元親も狼狽し、忽ち敗軍す。元親、怒りて今は討死すべき時なりと、馬引返し進む所を、家人馬の口を取付きて、西に引向け引退けば、此手も亦總敗軍になりて、竹田村の地迄引きて行く。宇喜多勢追討して、三村が兵を討取る事、數を知らず。されども直家、自ら長追を制し、軍

備中勢敗軍

を纏めて、引取りければ、三村も石川も釣の渡りを越えて、漸く備中へ引退さける。備中勢、上・中・下三箇所の手にて戦死せし兵士、總兵擧げて記すに違あらず。之を永祿十年の明禪寺崩れといひて、其頃は備前の大合戦、直家の代第一の勝軍なり。

### 金光・須々木・中島等、直家へ降參の事

此度、直家備中の大軍に打勝ち、三村等敗軍ありければ、兼て内通せし備中に隨ひし西備前の城主共、皆々沼城へ降りける。先づ岡山の城主金光與次郎宗高、則ち沼の城へ出仕して、直家の麾下に屬しければ、岡山城を其儘守らしむ。舟山城主須々木豊前は、嫡子四郎兵衛を以て、直家へ、此度の勝利の賀儀を述べて、御味方に參るべしといひける。直家、之を聞き、豊前、兼て味方へ内通せし者なれば、今度備中勢の退くるに追討して、首一つにても、持參すべきに、元親が下知を請けて、金川の押をして、今更降參表理の侍なり。されども降人を、殺すべきにもあらずして、戸川平右衛門に下知して、須々木父子が領知を、取上げられ、豊前へ隱居させ、剃髮し

金光等直家に降る



て行連と名を改め、茶料を興へ、四郎兵衛は、直家に仕へて、所領少し給りて、舟山釣の兩城を破却させられける。中島の中島大炊は、三村が矢津へ、向ふ時の案内者はしたれども、敗軍の時、引残りて石川が勢の退くを、追討ちにして首一つ取り、沼へ持參して降參す。然るに大炊が一族、備中にありし中島新左衛門といふ者、大炊が直家へ降り、備中勢も追討せし事を惡みて、中島に残り居て、中島の城の邊に、榎の大木ありし。其空なる所に、立隠れて、大炊が、沼より歸りけるを、待ち居て、何心なく歸る所を、切殺して、備中に歸りける。此新左衛門をも、後に又大炊といふ。其切殺されし大炊が子、源三郎といひて、直家の臣となる。今に其子孫、中島村にありて、其所に新左衛門が隠れし榎の古木も、今に残れり。

一説に、中島の中島大炊が討たれしは、是より前、永祿四年、龍口山落城の時、和田の城をも中島の城をも、宇喜多より攻落す。其時城主大炊、城を落ちて榎の空に、隠れ居しを、探し出して、討つともいふ。又備中の中島新左衛門、後に大炊といひしは、同名なれども、是が本の稱號、二階堂にて、一族にてはなしといふ。其

頃、當國の中島大炊、備中國の中島大炊、筑後國高橋紹運が臣の中島左馬助が子中島大炊とて、西國に同名三人ありて、紛らはしき事ありといふ。

### 宇喜多備中國へ働の事

直家備中  
出陣

直家は、三村元親に戦ひ勝ちて後、毛利家へ使者を立て、彌、御手に屬すべしといひやる。又三村は、河州の三好家を、頼む由聞えて、毛利家とは彌、手切になれば、近毛利家出軍ありて、三村を討つべし。直家にも、備中へ發向あれとの返答なり。直家、大に悦び、備中表へ人數を出し、所々の城々を攻めらる。先づ永祿十年五月に、鹽川の郷内芝場の城を、攻取るべしとて、戸川平右衛門、一手を以て攻めけるが、小城なれども、地形堅固にて、前には川あり、沼廻りて、南に庭瀬城あり。北に日畑城あり。皆敵地なれば、押の兵を置きて、芝場の城戸、近く攻寄せ、井樓を組上げ、鐵炮を放ち懸け、明日は乗取るべしといふ所へ、直家思慮ありて、花房助兵衛を使として、戸川に早く引取るべしとの事なり。されども早や攻落すべく見えし程



直家備中  
出向

なれば、助兵衛心得て、早く乗取れとの御使なりと、いひ傳へて、助兵衛、一番に乗込み、戸川が兵續きて攻入り、城中の兵を、悉く追拂ひ、火を懸けて、城を焼拂ひてぞ歸りける。同じき秋八月中旬、備中國へ直家働き、諸城を攻落せよと下知して、宇喜多七郎兵衛を大將とし、長船又右衛門・沼本新右衛門・明石飛驒角南隼人等、九千餘騎にて亂入す。才田城主植木下總守秀長・猿懸城主穗田實親・三村元親等、所所にて防戦ありけれども、日外の負軍に勢を失ひければ、忽ち宇喜多勢に破られて、皆己が居城に引入れて楯籠る。續いて之を攻めんとて、先づ翌日、才田城を攻めければ、城主下總守、防ぎ兼ねて、降人となる。此城をば、則ち下總守に宇喜多勢加へて、之を守らせ、近郷を焼働さしけるに、人民恐怖して、指さす者もなく、直家の麾下に、屬する者多し。

一説に、庄式部少輔元祐、此時討死と雖も、明禪寺崩れの時、備前國富徳興寺にて討死せし事、實説なり。

### 宇喜多又尼子に組する事

去る永祿九年、雲州富田月山の城落ちて、尼子家君臣共、散々になりけるが、家老山中鹿之助、京都にて、尼子家再興の事を謀りて、尼子孫四郎勝久を大將として、吉田三郎左衛門といふ者を、中國へ差下し、味方を催し、備前・作州兩國に至りて、直家を頼み語らひ、尼子に一味ありて、國を興さば、早速備前一國を切隨へて、宇喜多に渡すべしといふ。山中幸盛が狀を出して、仔細を演説しければ、直家、之を聞き、家臣等に談じて、即ち一味の返答に及んで、毛利家に背きけれども、先づ時節を窺ひ、毛利家に敵する色を出さざりしが、明くる永祿十一年、浦上宗景、之を聞きて、毛利家へ使を立て、宇喜多直家、尼子が舊臣山中鹿之助が催しに應じ候や、表裏の直家、之を誅し給はゞ、御先手仕候はんと、告げやりて、宗景、毛利と和睦し、直家を討取るべしと、謀りける。

宇喜多尼子に一味

浦上、宇喜多を謀る



### 宇喜多、松田を討つ、金川落城の事

津高郡金川城主松田左近將監、去る永祿五年に、浦上宗景と和談し、直家の婿となりて、宇喜多とも親しくなりたれども、直家は、猶ほ隙を窺ひ、松田を討たんと思ひけるに、松田、近年、日蓮宗を甚だ以て、信仰して、我領内の寺々を、其宗に改めさせ、従はざる寺をば、焼き拂ひける。金山觀音寺吉備津宮など、放火せしは此時なり。又金川の城にも、日蓮宗の道場を、建立しければ、家中の兵士も、領内の百姓も、左近將監を疎み、退去する者も多し。直家、之を幸ひの事なりと、謀りて討たんと思へども、老臣に、横井・土佐・橋本某・宇垣市郎兵衛某弟與右衛門などいふ能者ありて、家を取治めける故、亡し難し。此横井・土佐は、醫術を能くして、此藥を飲めば、病も則ち平癒するやうに、いひ觸しける。其上、正直仁愛の生付にて、敵といへども藥を與へ、療治しける。又宇垣兄弟も、謀など能くせしものなりし。直家、或時、沼より金川へ到りて、鹿狩を所望して、城と共に狩をしける。其時、鹿を打つとて過りて、宇垣與右衛門を打殺

宇喜多松田合戦

し、誰打ちしとも知れず、實は直家の臣に、打たせし事なりしとぞ。其後、兄の市郎兵衛も退去して、松田が家治らず。さたちけるを幸ひと、永祿十一年七月、直家より、津高郡虎倉城主伊賀左衛門久隆是も直家の婿なり、同與次郎明石掃部が婿なりを招きていひけるは、松田左近將監、我等に反心ありと聞きぬ。依りて討果すべく思ふ。如何謀るべきとあれば、其頃、近隣迄も、皆松田を疎みて、伊賀父子とも不和なりし故、伊賀答へて、此節、松田を討ち給はん事、いと易かるべし。御先手仕るべしと、手に取るやうに、請合ひける。直家、大に悦びて、其謀共、伊賀父子と能く示し合せて、相圖を定め、伊賀は虎倉へ歸りにける。扱七月五日、約束の日限なれば、直家百騎計りの人數にて、赤坂郡矢原村に至り、陣を取る。伊賀は、兼て忍びを附け置き、内通せし事なれば、五日の夜、金川城内道林寺丸へ、人數を忍びて入れ、関の聲を揚げたり。折節、左近將監は、城外に出てて留守なり。家老横井又七郎、取合せ手配し、門々を指固む。伊賀父子、鐵炮を打懸けて、本丸を攻む。左近將監は、之を聞きて、急ぎ馳歸り、搦手より城に入る。横井も人數を出して、之を迎ひ入れて、こゝを先途と、弓・鐵



炮にて、之を防ぐ。左近將監、櫓に上りて、伊賀に向つて、何の故を以て計らひ、城を攻むるか、暫く言葉戦ひする所を、伊賀が兵士狙ひ濟して、之を打つ。左近は爰に討たれにけり。息孫次郎、之に代りて、士卒を下知して防戦す。松村修理も、伊賀が兵を入れ立てじと、戦うて討死す。直家の兵、天原より城中へ入り、伊賀が勢と、一所に合うて、本城の四面を取巻き、平攻に、六月一日、之を攻むれども、堅固の地なれば、容易に乘取り難くて、夜に入りける。城兵共寄手も、討死する者〔脱ア〕ルカされども寄手は、多勢になりて、之を攻む。城には本城計りなれば、逆も守り詰め難く、七日の曉、孫次郎并に次男左門、潛に城を忍び出でて、猶村某といふ者を連れて、備中へ立退きて、大將落ちければ、士卒も多く落行きける。伊賀父子、之を見て、頻に兵を進めて、一二の城戸を攻破り、本城へ切入れば、残り留りし松田が譜代の郎等、皆討死して、城は落ちにけり。松田兄弟は家人、少々連れて、西の方山傳ひに、下田村迄落ち行きしが、虎倉の城より、伏兵を、此邊にも置きければ、孫次郎を目に懸けて、切つて懸る。今は遁れぬ所と思ひ、前後左右切廻り、孫次郎は爰に

金川城没落

て討たれにけり。次男左門盛明は、雜人と共に紛れて、漸々備中へ落行きける。

### 宗景勢と直家、片上迫合の事

去年、永祿十一年より、宗景は、毛利家に屬し、宇喜多は、尼子再興の合力せしかば、天神山と沼とは、彌、矛盾になり、人數を出し、足輕を懸けて、迫合ふ事、度々なり。今年永祿十二年の春、天神山より、伊部に城を築きて、日笠源太を置きて守らす。沼より花房助兵衛を、將として攻めさせて、終に攻落し、城主日笠をも討ち取りて、宇喜多より兵を入れて、守らせける。又片上の土田松の城に、天神山より、浦上河内景行を置きければ、此伊部の城と、時々迫合ありける。馬場重助、此伊部に來り居し時、戸田松の兵と、葛坂にて迫合ありて、重助、其外鎗四五本にて、敵を追ひて、葛坂の下の堂まで、追つ追はれつ、五六度も迫合ひて、引取りける。敵、猶ほ跡を慕ふ。重助等、敵を追拂ひて、鎗を逆に取り、鋒先をあとにして、伊部の城へ引取りける。

浦上宗景  
宇喜多直家  
迫合



## 宇喜多直家齋田城後詰の事

毛利宇喜  
多を攻む

宇喜多直家、約を變じ、尼子家へ合力し、毛利家に背きける事を惡みて、永祿十二年四月、毛利六郎左衛門元清、一萬餘の勢を率して、備中に出陣し、宇喜多の城を攻めんとす。三村修理亮元親・同弟上田實親等、之を幸ひと、毛利家の先手に加はりて、先づ植木下總守秀長が籠りたる齋田の城へ取かけて、之を攻む。植木孫左衛門・福井孫六左衛門、其外宇喜多よりの加勢の人数等、堅く守りて防戦す。尤も此城、堅固の地なれば、寄手、之を攻めて、命を落す者多くて、俄には攻落されじとて、元清下知して、戦を止めて、遠攻にして、四面を遠く圍む。城中糧乏しければ、長籠城叶ひ難く覺えて、潛に峯本與一兵衛を出し、備前へ遣し、直家へ後詰を乞ふ。直家之を聞き、此城を撫て置きては、味方へ屬したる諸方の城、志を失ひ、頼みなく思ふべければ、其事心得ぬ。早速人数を出し、後詰すべしと返答して、峯本をば返し、早兵をば集め、其勢一萬計り、引率して、沼城を打立ち、齋田の此方一里計り東に陣

齋田城合  
戦

取つて、城を圍みし毛利勢の後へ、人数をかけて戦ふ。城中、大に力を得て、切つて出て、前後より揉み立て戦ふ。されども毛利の軍にも、加勢として、來りし熊谷信直、桂元隆を、兼てより後詰の押に備へ置き、此前後の敵に、手を分け戦ひて、宇喜多勢百三十餘人討取られければ、直家も少し猶豫して、堅く備へて控へける。扱城中糧乏しければ、何卒兵糧を入れんと、手段をなしけれども、計り難くして、日を経ける所に、石川・福井・工藤等、宇喜多に加はりければ、是に力を得て、之を先手として、又戦ふ。花房助兵衛職之と、穂田與四郎一番に鎗を合せて、入亂れ攻戦ふ。城中より之を見て、只二三日の糧ありて、籠城しても逆も死なん命、いざ打つて出て討死せんと、門を開き突いて出て、又越前より攻戦ふ。今度は後詰の兵も増し、城兵も必死になりて戦へば、毛利勢崩れ、近付きて見えける所を、直家の旗本を進めて、爰を討て者共と、大聲に下知して、突立つれば、毛利勢叶はずして、總崩になり、逃げて行く。三村元親・上田實親、返し合せて戦ひしが、元親は深手負うて家人の肩に懸りて引退く。實親は、終に討死し、宇喜多の兵に、首を取られける。大將元清も、蹈み

毛利勢敗  
軍



留り、返せしと下知しければ、敗軍勢も是に勵まされて、取つて返し、其勢一千二百百人集りければ、則ち備を押立て控へければ、直家も之を見て、人數を纏め、勝鬨を揚げて、早々兵を引上げける。其日、宇喜多方へ討取る首數六百八十餘級とぞ記しける。直家、味方の城々に、兵を加へ守らせ、兵糧を籠めて、備前へ歸陣あれば、毛利元清も、兵を引いて入りける。

### 尼子勢と毛利勢と作州合戦、宇喜多勢加勢の事

斯くて、尼子勝久は、永祿十二年の夏、出雲・伯耆の味方を集め、隱岐國へも押渡り、出雲へ入國。やがて信州へも、出陣あるべき催しありければ、以前尼子方なりし美作國の三浦・牧・玉串・市・蘆田等發起し、高田の城を攻破り、毛利家より籠めたる津川・土佐・壇上・與太郎・山名・權平等を討取りて、其跡に籠城しけるを、又毛利家の杉原播磨守、之を攻落して、己が兵卒牛尾・足立國衛等を置きて、守らせけるが、此度尼子勝久、本國へ歸入せし事を聞きて、三浦等力を得て、又高田の城を攻む。依りて毛利

高田城を

攻む

家よりも、加勢として、香川左衛門光景・嫡子少輔五郎廣景・次男兵部少輔春繼、五百餘騎、高田の城に入りける。三浦・蘆田・玉串・牧等、之を見て、逆も小勢にては、攻取り難く思ひて、備前の宇喜多へ、加勢を乞ひければ、則ち長船又右衛門・岡剛介沼本新左衛門に、四千餘騎を附して差遣す。三浦・牧・玉串等、此備前勢を合せて、之を攻めけれども、城兵大勢にて防戦すれば、落つべきやうなし。然るに城中に、熊野彌七郎・佐伯七郎次郎とて、もと尼子の臣なりければ、之を語らひ内通して、熊野は兵糧藏に火を懸けて、城を出でて、寄手に加はる。佐伯は、隱謀現はれて殺されぬ。斯かる騒共、城中にありければ、其虚に乗じて、玉串・牧等、一千餘騎、十月四日、高田の山下へ、押寄せ放火す。城よりも出でて防戦す。城兵の乃美修理・村間源左衛門・香川惣右衛門などいふ者を、討取つて引取りける。其夜、玉串・牧・蘆田等、備前の加勢長船・岡等に、城を攻むる手段を計り合せ、いざ明日は、伏兵を置き小勢を以て、餌兵となし、敵を引出して、討つべしと牒し合せて、明くれば七月六日、備前勢三千餘人を、久瀬といふ所に、三手に作りて、三箇所に、伏兵として置き、久瀬山に相圖



の旗を上せ、玉串監物昭則・牧助兵衛清冬兩勢を、餌兵と定めて、城下へ押向ふ。然るに城中よりも、今日は伏兵を置きて、働き出て、寄手を討取らんと、牛尾太郎左衛門・足立十兵衛・品川市右衛門・門田彌四郎・香川右衛門・同石見・芥川・江戸・村間等五百餘騎、是も三手に分けて、城下に伏置きけるが、何として、寄手に聞えけるか、之を知つて、玉串・牧等、其伏兵を、置きたる真中へ、鐵炮を揃へて打懸け、續いて鎗を入れ、突いて懸れば、牛尾・足立等、思ひ懸なく、不意を討たれて、伏兵小勢にてはあり、立足もなく、打負けて引退く。玉串・牧、勝に乗じて、之を追ふ。又城兵、兼ねて設け置きし兵卒、切つて出て、玉串・牧と戦ふ。兼て謀りし事なれば、玉串・牧打負けて、弱々と引いて行く。敵は利を得たりと追駈けて、覺えず小坂一つを、追越しける所を、時分よしと、山上より相圖の旗を出せば、長船・岡沼本の伏兵三手に分れて、鼓を打ち鬨を作りて、切つて懸れば、高田城兵、一合もせず崩れ立ち、伏兵の人数は多し、頻に追うて、之を打つ。香川右衛門勝雄、かくて引取らば、残らず討取らるべし。悉く爰にて討死せん。其隙に、皆引取れと下知して、取つて返し、切合ひ

て討死す。門田彌四郎・繼久・錢櫃佐助も、是に續きて、戦ひて討死し、其外残り少々に討なされて、城へ引取りける。此時、既に寄手城へ附入にして、乗取るべく見えし所に、城に残りたりし香川左衛門光景・嫡子少輔五郎廣景・次男兵部少輔春繼・宗像三郎左衛門・原田又右衛門・芥川七郎・村間新左衛門・塚脇十太夫・江戸三郎五郎、以下二十餘人突いて出て、之を防ぐ。小勢なれば、備前勢引包んで、之を打ちけるに、大半討たれ、残る者は、麓なる柵の中へ入りけるを、其柵木二十間計り、引破りて、打つて懸る。打残されし六騎、又四騎討たれて、今は香川兵部少輔・宗像三郎左衛門と、二人計りになりけるが、暫し息をつがんと、薄一叢、枯立ちける蔭に休ひける。備前勢も戦ひ疲れて、控へたる所へ、玉串監物馳來り、一丈計りの鎗を提げ、郎等二人從へて突いて懸れば、一村薄の蔭より、香川兵部少輔・春繼と名乗りて、突いて出て、我は玉串監物と名乗り合うて、鎗を合せ、暫く戦ひけるが、玉串草摺をかけた、細腰へ鎗を突込めば、玉串、小膝を打つて倒るゝ所を、香川押へて、頸を取る。監物が郎等一人は、宗像三郎左衛門、突伏せ、今一人は、猿渡壹岐守、後ればせに來

玉串香川の組打



りて、突伏せ、首を取つて、鹽に入れにける。又牧勘兵衛が手へは、香川佐渡・同石見、返合せ戦うて、香川兵部少輔と共に、城に引入りける。玉串監物が兵卒も、大將討たれければ散亂し、牧も備前勢の長船岡・沼本も、皆引取つて、其日の軍は果てにけり。此時、玉串と香川と鎗を合せたる所を、一町四方作毛もせずして、香川が鎗場とて、今に残れる。其後も、備前勢、長船又右衛門・岡平内・富川平右衛門等、作州に在陣して、城を攻め合戦迫合止む時なし。明くる元龜元年、備中へ直家出陣あれば、是等の人数を引取つて、花房助兵衛職之に、兵を附けて、祝山の城に籠め、毛利勢を押へける。

此時、直家より富平・岡平・長又と、書きたる三人へ、連名の下知狀、戸川家に、今に傳へて、數通ありといふ。其頃、氏と名とを、一字宛狀に書く事、諸家にはやりし事なり。

出雲國秋上綱平備中働并毛利勢働出候事

高山城落つ

秋上綱平歸陣

元利元清備中出軍

出雲國より、秋上三郎左衛門綱平、二千餘騎を率して出陣し、尼子勝久より、直家を頼み來りければ、是元龜元年正月月中旬、備中に出陣、直家と秋上綱平と、一つになりて、所々放火し、<sup>〔幸イ〕</sup>高山の城を取圍んで、頻りに攻めければ、城主石川降參す。其勢にて、石賀・安達等も、皆降りける。是等の降人の士を先鋒として、些郡の城を攻む。些郡久之丞といふ精兵の射手、能く防ぎて、一矢に二人・三人射殺しければ、城も即時に落ちざりけり。直家、兵を分けて、天王山の城を乗取らんと下知すれば、些郡よりも、人数を出して、爰をも助けて防戦し、暫し籠城したれども、終には守り得ずして、是も降參すれば、此城には、大賀駿河守を籠置き、其外、國中の事共下知し、降人の人質共取りて、直家も、秋上綱平も歸陣す。扱松田の城主庄高資、其子兵部少輔勝資、同右京進植木下總守秀資、津々加賀守・福井孫六左衛門等、尼子に屬して、三千五百餘騎、國中に打出て、鴨形の細川を始め、二三箇所を攻落し、是より竹の庄を攻めんとす。此由共、藝州へ註進ありければ、元清、八千餘騎を率して、備中國に出陣。三村元親を先陣として、先づ松山城の庄高資を、一時攻に攻落し、男女百餘



人を切捨て、國中此間、敵に降りける者、一々に攻取らんと擬しければ、降參する者多く、植木庄が類、皆雲州へ落行きける中に、齋田城の植木資富計り、城を守りてありけるをも、方便〔てカ〕の打果し、元清、猿懸城に在りて、備中を治めて、又國中毛利家に屬しける。

### 宇喜多、金光與次郎宗高を殺す事

御野郡岡山の城主金光與次郎宗高、近年、直家の麾下に在りけるが、此頃、直家に叛く由、風聞ありし所に、金光が家來に、後藤某といふ者あり。此者を兼て、直家懇にして、沼の城へも、度々呼びて、碁の相手とす。然る所に、此後、後藤某罪ありて、金光殺害す。直家、之を聞き、大に怒りて、先年、明禪寺軍の後は、直家に敵し難くて、味方に屬すと雖も、内々には叛心を懐く故に、後藤が直家に、懇なるを惡みて、罪なきに殺害す。其儘、捨置きなば、惡しかりなんとて、元龜元年の夏、宗高を沼の城へ呼びて、切腹をいひ付けらる。宗高、之を陳謝すれども、更に直家許容なく、扱宗

金光宗高  
切腹

高、最期に及んで、直家下知して、死後、子供に所領を與ふべし。さあれば城を異議なく渡すべしといふこと、認め置くべきなりとあり。是又異議に及び難く、書狀を書きて後、切腹したり。則ち岡山の城請取るを、富川平右衛門に申付けられしに、富川が與力、訴訟して、金光が家人、若し相背きなば、富川與力、六十人ばかりにて、踏み鎮めがたし。殊に敵地に、近きところなれば、如何といふ。馬場重助、之を聞き、岡山は、成程古き場なり。餘人は心もとなし。某に任せられよ、與力召連れ罷出で、城を請取りて、直に城をも持ち堅むべしと、望みければ、直家、之を聞き、富川・馬場兩人を、差向けらる。與力百二十人連れて、岡山へ往きて、宗高が書置きたる狀を、家來に見せ、直家に降りなば、本地相違なく、宛て行ふべしとありければ、一族家臣異議なく、同心して城を渡しければ、富川・馬場、直に城に、在番して守りける。

按ずるに、此金光與次郎宗高は、實は能勢修理が弟にて、法名を友讚といふ。其時迄は、宗高が薩提寺岡山にありて、金山岡山寺といふ。今磨屋町にある觀



音、則ち是なり。其與次郎が子、宇喜多に仕へて、金光又右衛門といふ。宇喜多の家亡びて後、古松村の民間に、隠れしといふ。

備前軍記 卷第二終

備前軍記 卷第四

浦上宗景上洛の事

天神山の浦上遠江守宗景、播州にては、赤松又は別所と戦ひ、備前にては、宇喜多と地を争ひて、合戦絶ゆる事なし。然るに宇喜多直家は、毛利に背き、尼子に属しけるより、宗景は毛利の味方になり、上方の織田家へも使者を立て、旗本に屬せんと約す。信長公下知して、赤松別所と和睦させしかば、播州通行障る事なくなれば、元龜二年春、宗景上洛し、信長公へ出仕す。此時、備前・美作并播州の内も所領すべしと、信長公の朱印を給はりければ、宗景大に喜び、天神山へ歸りけれども、夫は名計りにて、其勢衰へたれば、日を追つて武威を失ひける。

浦上宗景  
信長より  
朱印を給  
はる



兒島本太城合戦并五流山伏の事

其頃、兒島郡南表は、多く四國に通じ、西の方は備中に一統し、或は毛利家に屬し、或時は宇喜多に降參などして、城を守る者なし。然るに、日比村に住せし四宮隱岐守より、讃岐國香西駿河入道宗心を語らひ、今度通生かよふの本太もとふとの城を攻落し、其功を以て、毛利家へ降參し、其威を借りて、兒島郡を従へ、取敷くべしと申合せて、元龜二年の春、香西宗心、讃岐より渡海す。是に従ふ者共は、羽床伊豆守・瀧宮豊後守・同孫十郎・福家七郎・新石五郎・香川民部・小早川三郎左衛門・新居大隅守・久利三郎四郎・飯田右衛門・同備中・筑城清左衛門又曰、此時も城主修理なるべし。直家の時は、修理大夫として、其能勢自讃といふ。其子修理大夫は、岡山妙福寺に墓あり。則ち開基なり。以て合考ふべし。追て按ずるに、此時、本多の城主難知。此後、直家より能勢修理を置きて。追云、通生にあらず、鹽生なり。又南海治亂記、通生を加陽に作る。他國人故に、備中の加陽に混ぜしなるべし。吉田右衛門通生より出づといふ。通生と本太と別所の□□に見ゆ。地理を見しに、通生の宮の鼻と、所城跡なり。此に右衛門居し、本太に修理在せしなるべし。宮脇兵庫・同彈正・楠川太郎左衛門・居石五郎兵衛、香西が郎等には、香西備前・植松備後・唐人彈正・片山志摩・秋山太郎左衛門・松浦清左衛門・山地孫左衛門・藤井太郎右衛門

香西宗心  
本太に押  
寄す

本太城合  
戦

門・中飛彈・香西兵庫・諫訪又右衛門・佐藤内藏助・乃生孫兵衛・葛西太郎兵衛・木津右近等馬上四百五十騎、雜兵三千餘人出船し、日比・澁川下津井三箇所へ押渡り、三方に手分して島中に打出づる。香西宗心は、下津井に着船し、本太の城へ押向ふ。城中よりも、吉田右衛門尉三百餘人を率して、神田村に打出でて相戦ふ。香西が兵の中を、百計り分つて、敵の打出てし後の山へ廻して、合戦半に、後より切懸りて、吉田が三百人を中に取込み戦ひければ、城へ引くにも引かれず、爰を最期と戦ひけるが、吉田右衛門・香西・加藤兵衛と、馬上より引組み落ちけり。加藤兵衛下になりける所を、郎等馳來り、右衛門尉を討取りける。其外城兵多く討たれて、討洩らされたる者、少少本太の城に入りける。香西宗心、此勝軍に競ひ、すぐに城へ付入にせんと、猶ほ兵を進め、城近く攻寄せしが、雨降出でて、日も暮に及んで東西暗くなる。又、此本太の城は、三方海岸にして巖石數十丈、東の方計り山の尾に續きたる所をも、堀切・塀・櫓を構へたれば、容易に攻入るべきやうもなし。其上、雨頻に降出で、俄に霧下りて、前後を知らず。前を討ちても後に知らず、後を討つても前に知らず。寄手引



浦上宗心  
討死

取り兼ねて漂ふ所を、城中の兵は、案内はよく知りたれば打つて出て、宗心が旗本へ突いて懸る。前後の備には之を知らず、旗本の兵は戦ふ術を失ひて、皆戦死すれば、宗心は、床机に居ながら敵を受けて、太刀も抜かずして、大將なるぞ。能く討てて討たれにけり。大將討死なれば、總軍亂れて、右往左往に崩れ立ち、下津井指して、漸々引取りける。讃岐勢もとへ至れども、夜に入り雨は降る。走るも進むも分け難く、十方を失ひ、やう／＼舟に乗りて歸りける。香西宗心が首をば、實檢して、首桶に入れ、本太より讃州へ送り遣しける。此合戦の時、俄に雨降り霧下りける事は、兒島林の権現の五流山伏の顯徳院、其下の山伏の大勢連れて、本太の城に入りて壇を構へ、怨敵降伏の法を行ひ、肝膽を碎き祈りける。其驗なりとぞ、其所にいひ合へる。其怨敵降伏の行法せし林の五流山伏といふは、文武天皇三年、役の行者を、伊豆國大島へ配流せられし時、其門弟義學・義玄・義眞・壽玄・芳玄といふ行者、其害を避けん爲めに、紀州熊野本宮の神輿を、船にて海に浮べて、兒島の地に到り、福岡の邑に鎮座ある。福岡といふ、今の林村なり。其後、天平寶字五年に、木見村に新宮を移し、諸興寺

五流山伏  
由來

冷泉院の  
宮墓去

といひ、山村に那智山を移して、瑜伽寺といふ。林の本宮を合せて、之を新熊野三山と稱し、其五人の行者の末流、則ち今の五流なり。後鳥羽院の御時、三井寺長吏覺仁親王櫻井宮と稱すを、初め新熊野山の檢校に補せられて後、今に至りて聖護院宮、代々其職に居給ふ。櫻井宮、此所の檢校にてまします故、承久の亂を避けて、兒島へ下り給ひ、尊龍院に居給ふ。其兄の宮頼仁親王冷泉宮と稱す、此地へ流されさせ給ひ、一つ所に居給ひける。冷泉宮は、寶治元年四月十二日薨じ給ひ、櫻井宮は、弘長三年三月廿八日薨じ給ふ。冷泉宮の御墓は、木見村にあり。櫻井宮の御墓は、林権現の境内にあり。此冷泉宮の御子道乗僧正、櫻井宮の弟子になり給ふ。其子五流の家々の主となりて、法を嗣ぎ給ふにより、其子孫他姓を交へずして、皇胤と稱す。然るに應仁の亂の時、五流の内、覺王院圓海、細川勝元の所縁により、其權威を借り、一山を恣にす。衆徒之を惡み、覺王院を亡さんとす。是により覺王院、此山を退き、備中西阿智へ行き、兵を催し、林村へ亂入し、伽藍僧坊一宇も残らず焼拂ふ。是より互に挑み戦ふ事度々なり。其後、備中高松城攻の時、秀吉公より加勢を乞はる。されども兼ねて、毛利家に一味せし故、同心せず。



秀吉新熊野の領地を没收

是に依りて、豊臣家天下を治め給ふ時に至りて、當山領沒收せられける。此の如く、修驗道にては、諸國の貫長なる者にて、兒島にては、殊に之を信仰して、行法をも頼みければ、其驗もありしなるべし。

### 作州皿山・佐賀山の城落つる事

元龜二年、花房助兵衛職之、作州荒神山の城にありて、毛利家の城々と迫合ひけるが、人數少くて、守り兼ねければ、直家より、加勢の人數來りける。此勢を以て、同國皿山の城を攻め、毛利家より置かれし肥田左馬助・高橋四郎兵衛、之を防ぎけれども、度々攻めて終に肥田・高橋も討死して落城す。同三年、佐賀山城をも攻落し、城兵悉く切捨て、兩城共に花房が兵を分つて守りける。

### 宇喜多直家、岡山の城へ移る事

近年四國にて、長曾我部元親威を振ひ、土佐國を討從へ、阿波讃岐へも打入るべき

宇喜多直家岡山城に移る

の所、三好・香川等より、宇喜多を語らひなば、難儀なるべしと思ひて、天正元年の春、直家へ長曾我部より使を立て、近々に阿波・讃岐へ相働くべく候。其時三好・香川より、加勢を乞ふとも、許容無之様に頼み來り、此後は申合せ、四國平均あるべしとの事なり。直家、家臣を集め、之を談じ、長曾我部一味同心の返答に及びける。斯くの如く、直家も年々に手も廣がり、沼の城下に、兵卒又足輕等迄、多勢になるに隨ひて、城内も城下も所狭く、屋敷を割付くるに事たらず、始終爰に居城なし難し。然るに岡山の城は、山下殊の外廣大にして、東の大川海に通ひ運漕よく、以來繁昌すべき土地なれば、此城へ移るべしとありけれども、是も今迄金光が居たる城にて、家居も狭く、家中の屋敷も少くて、居住なり難ければ、城中を廣く出し擴げ、郭をも作り添へて、繩を仕直し、土居・堀等築き改めらる。是に依つて、其地にありし守社を外へ移さる。天正元年の春より、岡平内奉行をして、門櫓・塀・柵等造營ありて、堅固大概出來せしかば、同年の秋、直家、沼の城より岡山の城へ移徙あれば、家中も家屋敷を作りて、爰に移る。商賣人も兒島西大寺、其外國中又近國よりも、富家の町人



來り住みて、城下賑ひける。又山陽道の驛路、上道郡御野郡の北の山下を通ひけるをも、今度完甘の山鼻より、野中へ出て岡山の城下を通ひ、萬成村の小山を越えて、辛川へ出づる道を作り、諸方への働き手遣ひ能く、往還自由なるやうになりける。もとより岡山の地、勝れたる城地にて、諸國へ通路運漕自由なれば、年々に廣大になり、繁昌して今に至れり。

按ずるに、今村宮今の社地へ鎮座あり。蓮昌寺、上道郡森下村へ移り、今御堂屋敷といふ所なり岡山寺、山科町へ岡山の地より移されし事、皆此時なり。

### 津高郡虎倉城合戦の事

天正二年の春、毛利輝元・小早川隆景、備中國へ出陣し、直家の領地を侵し、備前へも打入るべしとて、備中竹の庄に陣取りて、藤澤村又福山城に居たる宇喜多よりの番勢を追落して、是に人數を籠め、備前國の虎倉の城の近邊迄焼働す。伊賀左衛門久隆は、虎倉の城に楯籠りて、毛利勢働き來りたらば、一戦に及び、討果さんと待

懸けし所に、四月十三日、毛利家の馬廻の士兒玉小次郎元兼・栗屋與十郎・神田宗四郎等、宗徒の大將として大勢、藤澤を打立ちて働き出てけるに、近郷には敵一人もなければ、備前國津高郡上加茂に至りけれども、敵猶ほ見えす。夜はほのくくと明けぬ。さらば虎倉の城へ押寄せんと、爰に勢を揃へて人數を進む。城中にも、毛利勢、加茂へ押込み、やがて爰に寄すると聞え、城の近邊の嶺筋に、弓・鐵炮三百挺計り物蔭に備へ置きて、静まり返りて待懸けし所へ、栗屋與十郎・太田垣某等攻寄せけるを、思ふ程に引請けて、山上より弓・鐵炮を打懸ければ、寄手一攻もせず、色めき立ちける所を、伊賀が家人城中より、切つて出て突懸りければ、毛利勢、一度に崩れて逃げて行く。栗屋與十郎備を立直さんと、返し合せく戦ふ所を、伊賀が家人片山與七郎、川越に鐵炮にて、栗屋を打落す。片山が中間川を越えて首を取る。太田垣も續いて討死す。大將討死すれば、殘黨立も直さず逃行く。伊賀が勢、透間もなく追駆け討す。兒玉與七郎・名護屋與十郎・井上源右衛門・中島瀨兵衛・小寺右衛門・輔藤右衛門等、上賀茂のうすひ谷といふ所にて、返し合せて戦ひしが、終に討死



兒玉元兼  
の勇戦

す。神田宗四郎は、四箇所疵を蒙りて、既に討たるべきを、栗屋孫次郎我馬に抱乗せて、栗屋は殿して退きぬ。兒玉小次郎元兼といふ剛の武者、追來る敵を度々突拂ひ突拂ひ引取りければ、疵も多く蒙りける。されども、之をこととせせず、小高き所へ馬を乗上げ高聲に、返せ〜と衆を勵ましける。其時、熊谷玄蕃岡宗左衛門殿して引取る。井上七郎兵衛は、弓の上手にて、射拂ひ〜引取りて、皆爰に集る。其外敗軍の兵共、兒玉に勵まされて、又爰に留り、百騎計りになりければ、之を纏めて、おき坂迄おき坂は、下賀茂より備中へ下る所をいふ引取りける。猶ほ城兵慕ひけるを、此纏めたる兵の中より、三澤攝津守・同郎等野尻藏人取つて返し、暫し支へける。其隙に、毛利勢引取りける。城兵共、又備を纏め引取りける所に、伊賀が家人土井某といふ者の馬、俄に駈出し、引けども〜止まらず、敵中へ駈入りけるに、河原六郎左衛門、土井を見知りて、駈寄りて討取りける。此河原六郎左衛門は、元來伊賀が家人なりしが、故ありて追出されて、毛利家へ仕へければ、今度備前の案内者に選ばれ、此陣に在りける故、此敗軍を己一人が恥辱と思ひ、殿して戦ひけるに、計らず土井に駈合せ、

河原六郎  
左衛門素  
性

山縣三郎  
兵衛討死

之を討つて、やう〜手を塞ぎける。又寄手に山縣三郎兵衛もありける。山縣兼ねて、栗屋與十郎と斷金の契深かりけるが、今日敵に押隔てられて、福岡迄引退さける所に、栗屋は、虎倉の城下にて討たれたるを聞き、常々死ぬる事あらば、一所とこそ契りしに、栗屋が討死を知らず引取りて、生残りけるこそ面目なけれ。黄泉に廻り逢ひて、何とか申分くべきと、即ち取つて返し、虎倉の城下へ只一人攻上り、大音揚げ、山縣三郎兵衛といふ大剛の者なり。思ふ仔細ありて、討死せんと爰に返し來りたり。出合ひ給へと名乗りければ、城中に之を聞き、哀れ剛者を我討取らんと、十人計りも打出て戦ふ。元より山縣は、死を極めたる事なれば、散々に戦ひて、終に討死してけり。此日、毛利家に討死せし者百三十餘人、手負數を知らず。虎倉の城兵は、土井某、馬に馳出され討たれし外、戦死せし者更になかりける。伊賀左衛門大に悦び、岡山へ註進しければ、直家も大に之を賞して、又加勢をも加ふべしと、返答ありければ、輝元評議して、此陣は敵方へ指出てたる山にて、此方よりは渡り場悪しく、川も阻たれば、其便宜しからずとて引取り、川よりあなた勝山といふ



小城を築きて、桂源左衛門・赤川次郎左衛門・岡宗左衛門・并に三村家人竹井宗左衛門等を相添へ護らせ、同五日、輝元・隆景は、松山の城に打入けりる。

元祿の頃、四國の修行者一人、笹ヶ瀬の邊に行斃れ死したる事あり。何方の者と  
いふ事を知らず。然るに、其負ひたる笈の中に古文書あり。毛利家より、山縣三  
郎兵衛へ當てたる感狀、又秀吉公の文あり。其外蘭奢待と名書きたる伽羅もあ  
りけり。是等御野の法界院に藏して、今にあり。考ふるに、虎倉にて討死せし三  
郎兵衛が孫の漂泊せし者にや。

### 堤棚奥宿の砦攻落さるゝ事

虎倉の城より奥に、堤棚奥宿といふ所あり。是に砦を築きて、伊賀が家土河原源左  
衛門・河田七郎に、足輕五十人を添へて置きける。同年備中より、毛利家の穂田元  
清、來りて之を攻む。虎倉へ加勢を乞ひけるに、延引せし中に、穂田終に城を乗取  
る。河田七郎は討取られ、河原源左衛門は深手負ひて、城の東なる瀧の邊に隠れ居

河原源左  
衛門が最  
期

たるを、敵之を見て、谷を越えて二人馳來る。源左衛門がいふ、某深手を負ひたり。  
閑かに寄りて首を取れといひて、脇差刀を抜いて投出す。敵今は心易し、首打取  
らんと、二人左右より寄せけるを、源左衛門、其敵を左右の脇に引挟みて、瀧の落つ  
る壑へ飛落ちて死けり。城中打殘されたる者共、虎倉へ歸りて、源左衛門が最期の  
様子語りけるとぞ。

### 宇喜多毛利和睦備中働并三村元親切腹の事

天正二年、義昭將軍は、織田家に打負け、四國に下向あり。備後の鞆に着岸、毛利輝元  
を頼み、再び歸路の事を謀り、直家をも同じく頼み給ふ故に、毛利家と直家と、再び  
和睦ありて、此謀をなせば、直家、織田家へも尼子へも、又手切になりけり。是に  
依つて同年の冬、直家より、角南隼人入道如慶を使として、小早川隆景へ申送りけ  
るは、備中の三村兄弟、阿州の三好家を頼みて、毛利家に背き候はゞ、油斷あるべか  
らずと告げやる。夫のみならず、十一月に三村元親が家老三村孫兵衛親成、主人元

直家、毛  
利家へ使  
者を送る



毛利宇喜  
多三村の  
城々を攻  
む

親と不和になり、備中を立退き、隆景の許に行き語りけるは、近頃は元親、阿州の三好家に加勢を乞ひ、毛利家を打つべき手段に候に付、某等之を諫むと雖も用ひず。其上某をも打果すべき沙汰あれば、難を避け立退き、御幕下に至り候由をいへば、三村が謀叛、宇喜多より申越せしのみならず、家臣さへ斯くいへば相違あらず。早々三村退治すべしとあり。輝元、元春は強ひて同心なかりけれども、小早川隆景が直家と謀り合せて、出陣を急ぎ、同じき十二月、小早川隆景出陣あれば、直家も同廿三日、岡山を出陣あり。隆景と申合せ、兩勢を以て、三村持の城々を攻屠る。先づ十日、岡山の城も明渡す。直家も隆景も、爰に越年し、明くれば天正三年正月二日、哲田郡新見の城の元親弟三村宮元範を討たれし。夫より山田村に陣を据ゑ、三村阿西入道を虜にし、美袋城を攻めければ、城主結城民部忠秀降参す。此兩人をば兒島へ流し遣す。幸山の城の石川源左衛門久成、城を捨て、松山へ入り、同廿三日には、

松山城合  
戦

鬼見の城を攻む。上田入道養子の孫次郎、實親に腹を切らせて降人に出てぬ。子を殺して命を乞ひける上田入道がこと、爪弾して悪まぬ者もなかりける。扱宇喜多、小早川、兵を休めて爰に至り、四月七日より松山の城に取詰め、晝夜を分けず攻戦ひけれども、三村修理亮元親、手配よくして防戦せしかば、城落ち難く、然るに、河原六郎左衛門といふ者も、備前賀茂の者にて、伊賀左衛門に仕へしが、後に小早川家に行きてありし。隣國なれば、備中の案内も知り、又、三村家に親しき者もありける故に、間者となりて此城に入りて居りしが、石川左衛門と一所に天神の丸にありて、左衛門本丸へ行き、留主の隙を窺ひ、河原相圖をなして、備前・安藝の人数を引入れ、又急いで、語らひ置きし大概源内、直賀、小林又三郎などいふ者案内して、忽ち天神丸を乗取りければ、備前・藝州の軍勢、急に押寄せて城を攻落す。修理亮今は叶はず、此城にて切腹せんといふを、家臣さまざま諫め、四國へ落さんと雖も承引せず。夫故先づ元親の子勝法師石川久成をば、四國を志して落しける。其後元親の切腹を家人共止めて、難なく引立て城を出て、後の山傳に、元親を助けて



三村元親  
の辭世

落行きけるに、過りて元親、谷へ轉び落ちて氣絶しける。之を介抱しける内に、皆散々に落ち失せぬ。漸々息付きければ、残りたる家臣二人、助けて爰も落行く所に、又刀鞘はしりて、元親足を切つて歩行なり難くて、落行く事叶はず。今は詮方なく、頼久寺の邊、松連寺といふ寺に入りて切腹す。元親常に和歌を好みければ、其友なる方へ歌を讀み書置きける。其辭世に、

思ひ知れ行き歸るべき道もなし本のまことを其儘にして

人といふ名をかるほとや末の露消えてぞ歸るもとの雫に

と書いて失せにける。先に落ちたりし勝法師も、途中にて伊賀左衛門に行逢ひ生捕られぬ。當年八歳なりけるが、すぐれて聰明なる生付にて、暫時暑を凌ぐ爲めに、伊賀久隆扇を勝法師に與へける。此扇に、

夢の世にまぼろしの身の生れ來てつゆに宿かる宵の稻妻

といふ古歌の書きてありけるを、詠みて涙を流し、我れ城中にて自害すべき身の、永らへて憂目を見すると悔み、又三村が臣の今降り來りしは、今は見ぬ顔をなす。

三村勝法  
師の最期

畜生にも劣れりなど、番にありし侍に物語する様、人となりしものにも勝れりと、番の面々皆驚きて、八歳にして斯くの如き事、尋常の兒にあらずと、隆景へ告げければ、頓て井山の法福寺にて首を刎ねられけるに、其時に少しも騒がず、潔き最期なりとぞ。逸曰、法福寺の末寺小寺報恩寺に、勝法師の墓あり。三村等の城共、皆斯くの如く攻落しければ、宇喜多直家は歸城ありける。

### 兒島常山落城の事

三村修理亮元親生害あれば、備中國中、皆小早川に降參しけるに、備前國兒島の常山の城主上月肥前守隆徳は、三村方なりければ降參せず、四國へ援兵を乞ひける。されども三村が一族多く亡びて、何を頼みとて、是に與する者なければ、四國其外よりも、加勢する者一人もなし。是に依つて上月が家人、肥前守を諫めて、此城一つに小早川の大勢を引請け、尤も外よりの加勢も無く、後詰の頼も無くて、いかで此一城守り詰めらるべき、一先づ四國の方へ退き給ひて、重ねて大軍を催し、軍して



城を取返し候へと諫む。肥前守打聞きて、いやとよ我れ多年毛利家へ對して恨ある故、元親をも進めて、今度毛利家へ背き軍せしも、我れ其張本なるに、此春元親父子生害し、其外一族多く討死し、三村家打亡されたるに、我れ何の面目ありて、爰を落ち存命し、人に面を向ふべし。其上阿州へは、實子を人質に遣し置きたりしに、援兵の一人も差越されず、譬ひ行きて頼みたりとも、いかで其甲斐かあるべき。所詮當城を枕として、討死の外他事あるべからず。汝等命惜くば、何方へも落行くべし。少しも恨なしとあれば、家臣も兎角の咎もなく、皆討死を極めて、籠城の手配をなしける。六月四日、小早川隆景備中より、直に兒島へ發向ある。案内者は、上村孫兵衛親成・同孫太郎親亮父子先陣して、彦崎迫川に陣を取る。隆景の旗本は、千餘騎にて山村に陣取る。其先手浦兵部は、宇藤木に陣取りて、同六日辰の刻に、大手の城戸近く押詰めて攻懸る。猶ほ城中には、靜り返りて人なきが如し。若し舟に取乗り、四國へや落ちたりしと、先づ麓の茂間路の人家に火を懸けて、其威に攻入らんとする所に、城中には、敵を城近く引付けて、討つべきと待懸けし事なれば、今

常山城合戦

こそ防げと下知をなして、肥前守具足を固め、廣縁より飛んで下り、自ら鐵炮を取つて、透間もなく打出す。嫡子源太郎高秀、常は弓を好みしが、是も鐵炮を打出す。隆徳が弟小七郎高重、弓を取つて透間なく射出す。其外城兵爰を先途と防ぎける。寄手間近く攻寄せたれば、更に化矢はなくて、手負、死人數を知らず。大に攻啞みて、攻口を退き控へて、再び寄せ兼ねたる内に、六日の日も暮れにけり。明るる七日の曉、城中最期の別にや、女の聲もして、酒宴の聲聞えける。夜も明くれば又、城を攻む。城よりも昨日の如く、弓、鐵炮を打出し、今日は城戸を開き、小七郎高重鎗を取つて真先に進みて、肥前守も源太郎高秀も、其外城兵共、滿丸になりて突いて出て、寄手の先手浦兵部が備を突崩し、兵卒十五六人突斃して引取りけるが、肥前守が妻、今年三十三歳三村家親が娘元親が妹なりなるが、寄手は兄の敵なれば、之を討たずして、暗々と自害せんは、口惜き事なりとて、甲冑を着し、二尺九寸國平が作の太刀を帶し、長刀を提げて打出んとす。召仕へける女、之を止むれども聞入れず、振切つて打つて出づれば、其女俱に續いて打つて出て、土倉兵庫・池田新兵衛・近藤李横井意仙等八

上月隆徳が妻の勇戦



十三人、眞先に進みて、浦兵部が備へ又切つて懸る。皆死を極めたる者なれば、面も振らず堅横に切廻りければ、討たる者數を知らず。されども、寄手は大勢なれば、城兵八十三人、残り少なくなりにけり。肥前守妻は、兵部を目に懸け進み寄るを、浦が兵卒押阻て、戦ふ所に、妻女聲をかけ、従者も多く討たれ、身にも數々手負ひたれば、最早是迄なり。此太刀も入用なし。之は國平が作にて、三村重代の物なり。兵部殿へ參らすなり。後世弔ひ給はれと、いひ終り、太刀を其所に投出し、城中へ引入りける。兵部を始め、寄手の者共目を驚し、感ぜぬ者はなかりける。扱城戸を指して皆よく防げ、靜に自害するどとて、妻女内に入り刀を喰へ、打伏になりて死す。肥前守の繼母五十七歳なるが、自害すれば肥前首を打落す。嫡子源太郎高秀十五歳なるが、父に向ひ、御跡に残らば御心に懸るべしとて、續きて切腹すれば、之も同じく首を打落す。肥前守が妹十六歳なるは、母が刀に貫かれて死す。其外幼き子供をば、肥前守刺殺して、最早や心に懸る事なしとて、肥前守隆徳、本城にある大石の上に上りて、腹搔切れば、弟小七郎介錯して、其身も腹切つて伏しにけり。

常山落城

斯かりければ城内の者共、自害し又山傳に落失せて、守る者なければ、寄手城中へ乗込みて、城は落ちにけり。斯くて隆景、城を取詰めて、山本四郎左衛門・渡邊伊豆を、城番として歸陣あれば、直家の加勢も岡山に歸りける。其後常山の城を、毛利家より直家へ渡されければ、富川平右衛門を置きて、之を守らせける。常山の城跡に隆徳が腹切石とて、大石今に残れり。

按ずるに、常山の城主の名、一には三村上野介高德と記せしもの多し。誤りなるべし。備中國根屋氏へ、援兵を乞ふ事をいひやりし古文書、其國の民間に、今も残るを見しに、上月肥前守隆徳と書きたり。又林権現の社記に、明應の頃、上野土佐守・上野肥前守、西兒島十七箇村を押領すとあり。之は文明の福岡合戦に、上野土佐・上野豊前・上野肥前といふ人あり。同人なるべし。さらば、是等兒島の地士にて、肥前守隆徳迄、代々常山の城主なりしにや。上月と上野とは唱へ同じければ、記し誤りしにぞ。又林村に、兒島三郎高德が宅地の跡といふ所あり。されども、兒島三郎は、邑久郡和田に住せし人にて、兒島に住せし事を聞かず。兒島

兒島高德の宅地



といふは、其先よりの家の稱號なり。若し此林村にて、兒島三郎高德の宅地の跡といふも、上月高德の宅地の跡といふを、誤りたるも知るべからぬにや。按ずるに、兒島麥飯山の城主明石源三郎を、宇喜多家より置きしを、天正三年、毛利家より攻落し、源三郎討死すといふ事、中國太平記に見えたれども、其餘此事を記せしもの無し。此天正三年は、上に記せし如く、常山落城の年にて、毛利と宇喜多と和平の時なれば、毛利家より、宇喜多持の城を攻むる事あるべからず。又明石源三郎を後に飛彈といふ。則ち掃部が父なりと、宇喜多記にも見えたり。此飛彈何れの年に死して、掃部家督せし事は知らねども、飛彈が名は、秀家卿の代迄も見えたれば、此時源三郎、討死といふも誤れり。斯くの如く麥飯山の落城の一事、不審多ければ爰に載せず。

### 和氣郡天神山の落城の事

天神山の浦上宗景と、宇喜多直家と一先づ和平あり。宗景の嫡子松之丞一曰、與次郎を直

直家、浦上久松と  
を共に宗勝  
を攻む

家の婿とす。宗景は之をも悦び〔脱字ア〕されども直家の武威強ければ、詮方なく、斯くの如く親みをなしながら、宗景は織田家へ通じて、直家を討たんと思ひ、直家は宗景を亡して、備前國中を領せんと企てけれども、現在の主君を弑せん事、外の聞えも疎ましく、人の心の背かん事をも憚りて、年月を経けるが、播州小鹽に、浦上清宗の子の久松といふ〔者一字〕天正の初め九歳にてありし方へ、中村七郎右衛門といふ者を使として、言遣りけるは、天神山の美作守殿は、御叔父の筋目にては候へども、正しく先君清宗を殺し奉り、御領分を押領し給ふ。父の御讐にて候へば、御誅伐なさるべく候御事に思召立たれ候はゞ、御先手仕るべく候間、先づ當地岡山へ御移りなされ候へかすと、懇に言遣りければ、今は久松、父の領分を掠められ、いと幽かなる時にて蟄居し、譜代の家臣少々養育して、小鹽の城下に居たる事なれば、其家臣共幸の事と思ひ、則ち同心の返答ありければ、迎ひとして、岡山より大船三艘を催し、譜代の家臣共一所に取乗り、浦上久松岡山へ移れるを、直家様々馳走あり。主君の如く尊び、扱天正十年二月上旬、人數を催し、久松の名を借り播州勢と稱して、岡山を打



浦上宗景  
播州に落

立ち、和氣郡天神山の城へ押寄せ攻めければ、堅固の地なれば力攻に及び難くて、宗景の家臣明石某を語らひ、内通して、反忠をさせ、寄手を引入れ、城に火を懸け攻めければ、宗景防ぐべき術盡きて、二月五日の夜、家臣七八人連れて城を出でて、和氣村へ山傳に落行き、新福寺の僧貳意といふを頼みて、案内者として、播州場芝山へ立退きけるに、供にありし者共、又散々になりて、日笠禪正といふ者のみ附添ひける。其後播州に隠れ住み、老衰しけるが、黒田甲斐之を誘ひ、筑前へ下り、八十餘歳にて病死ありといふ。宗景の終り、説々あり。後に註す。竝べ見るべし。 宗景播州へ落ちし時、帶ける太刀を僧の貳意に與へける。之を賣りて、金銀を多く得て還俗し、曾根村の百姓となりといへり。又其時着せし腹巻、民間に残りて、今、上道郡中野村の百姓傳へて持ちたり。かくて天神山の城をば焼拂ひ、又宗景の行衛を聞くに、片上へ落行き、戸田松の城に隠るゝ由聞えければ、城主浦上河内景行へ、直家より使を立て、宗景、供に後藤數馬を連れて、其城に入り給ふと聞えぬ。速に出さるべしとありければ、景行返答に、宗景當城へ御入は無く候といひて、其使を打擲して歸しける。直家怒りて、直

戸田松の  
城落

に戸田松の城を攻む。景行、下知して防戦すと雖も、百にも足らざる小勢なれば、終に攻破られ、浦上河内、後藤數馬等、皆播州江島へ落行きける。戸田松の城をも又焼き捨てて、直家は岡山へ歸陣ありける。

按ずるに、天神山落城、宗景亡びし事、説々多し。天正七年八月といひ、天正五年七月といひ、又八月といふ。其外直家より、赤松刑部少輔則房を語らひ攻めしとも、或は吉川元春、小早川隆景、之を攻落せしともいふ。後太平記、殘太平記、中國太平記等。 されども、皆誤れるが如し。又宗景播州へ落ちし後、鹽飽島へ渡り、妹尾某を頼み、又飽浦美作守を頼みて、新に兒島に城を築きて籠り、猶ほ直家と戦ひて、某年三月十五日、宗景終に直家に殺さるといふ。宗景の終り何れが正説なるか未詳。

### 浦上宗景先祖并赤松家滅亡の事

浦上美作守紀宗景は、代々赤松家の老臣にて、浦上小寺と、太平記にも多く竝べ記せり。殊に文和四年に、赤松則祐に備前國の守護職を給ひし時、浦上を當國の守護

天神山落  
城の諸説



代とし、三石に代々在城せしなり。猶ほ夫より先を考ふるに、舊き播州の地土なりしにや。桓武天皇の御宇、播磨國夷第二等去返公島子ゆきかへりしまこに、浦上の姓を賜はりし事、類聚國史に見えたれば、此浦上の家は、其子孫なるべし。按ずるに、さらば浦上は、則ち姓なる稱す。いかなる故かいぶかし。斯く古き家なるに、滅亡して子孫長く斷絶したり。又主人の赤松の家も、世々に衰へ行きて、終に秀吉公の時に、播州の赤松上總介則房一に曰、刑部少輔則房といふは、阿州へ移され、赤松兵衛廣範といふは、但馬の竹田へ移さる。共に一二萬石の地を領せしにや。其後慶長五年の亂に、二人共石田三成に組せし故に、則房は其年十月朔日、大坂にて切腹し、廣範は十一月廿九日に、因州鳥取にて切腹ありし。廣範に一男一女の子ありしが、男子は出家して高野山赤松院の住持になり、女子は黒田家の臣に嫁せしといふ。又小寺も播州御着の城にありしが、秀吉公播州へ打入り給ひし頃、御着を落ちて藝州へ行きしといふ。其末如何にかなりし、皆主従の家亡び果てにけり。

赤松則房  
廣範の切腹

### 宇喜多播州働の事

斯くて直家は、宗景の領地を押領し、備前國中を治めけれども、宗景に屬せし者共、備前・作州に籠城してありける。されども之をば差置きて、先づ小鹽の赤松下野守を亡し、其所領をも合して領せんとて、同春、岡山を出陣し、片上に宿陣し、其翌日は、三石に陣取り、其翌朝播州へ攻入り、花房助兵衛職之、鷲山等に合戦す。赤松勢、所々防戦せしかども叶はざれば、備前勢所々の壘を攻落し、人數を籠置き、岡平内は宇根の城を守り、上月の城にも人數を入れ、御用赤穂の二郡を奪ひ取つて、岡山へ歸陣ある。

直家諸方  
に働く

### 羽柴秀吉と宇喜多播州合戦の事

天正五年十月、羽柴筑前守秀吉に、信長公より播州を給はり、西國征伐の事を承り、其國に下向。先づ書寫山に陣取りければ、國中降參する者多し。其中に、御着の城



主小寺藤兵衛政職は、毛利家に通じ、荒木に人質を出し置き、秀吉へ表裏の事あれば、御着の城に居難く、藝州へ落行きけり。其臣なる姫路黒田美濃入道宗圓元備前國福岡の人は、引放れ秀吉へ参り、先鋒となりて、己が居城姫路を秀吉へ参らせければ、城普請ありて後、爰に移り給ふ。扱上方勢、直家の領地を侵し、城々を攻めければ、上月の城より、岡山へ加勢を乞ひける故、長船又右衛門・岡剛介に三千の人数をつけて、上月の後詰をなす。秀吉の先鋒黒田官兵衛孝高、後詰の勢と戦ふ。續きて堀尾茂助・富喜八郎二の目より進んで、備前勢の横を打つ。岡山勢の二陣より、又進みて戦へば、秀吉の先手追立てられ、富喜八郎は討死し、堀尾茂助も深手負ひけるを、郎等松山小右衛門馬に搔乗せて退く。秀吉之を見て、堀尾討たすなと下知して、旗本を進めて切懸れば、終に岡山勢打負け、敗走して、上月の城も落ちにけり。此事岡山に聞えければ、直家自ら八千餘を率して、岡山を出陣して、先づ播州姫路の端城別府の阿閉の城を攻む。其夜、官兵衛五百餘騎を率し、姫路を出でて阿閉の城に入つて、下知しけるが此城要害淺間なれば、敵見侮りて攻むべし。其時味方静まり返り

て、敵を近く引付けて、鐵炮を打出すべし。扱敵色めくを見て、太鼓を打ちて切つて出づべきぞと、示し合せて待居たり。それをば知らず、宇喜多勢只一揉にと、楯をついて攻懸り、石垣下につく所を、弓・鐵炮を以て散々に打出す。寄手多く討たれて、少し猶豫ひて見えける所を、相圖の太鼓を打ち、城戸を開きて、三百人計り打つて懸れば、寄手の先陣、一たまりも無く崩れて引退くを、追討にせられて、多く討取られける。此勢に宇喜多の侍梶原源三兵衛・明石左近等は、黒田の陣に降りける。直家敗軍の兵を集めて、爰を引取り、直に上月の城へ押寄せ、後詰なき内にとて、一時攻に攻落して、眞壁彦九郎に兵を添へて守らせ、岡山へ歸陣ある。扱尼子勝久、近年は京都へ上り、信長公に屬して出陣し、再び旗を擧ぐべしと謀りけるが、上月の城を攻取らんと、秀吉へ望みて、勝久二千餘騎にて押寄せけるに、眞壁彦九郎元來臆病者の上に、先日味方敗北せしに恐れて、敵の未だ取巻かざる先に、城を捨て岡山へ歸りければ、尼子入替り、上月の城を守りける。眞壁が弟に次郎四郎とて、岡山にありけるが、兄の彦九郎上月の城にて、一防もせず逃歸りけるを討たんと



す。眞壁立上り、拔打に切りければ、眞向より二つになる。續いて安達治兵衛切つて懸るを、是も亦一打にと切りけるが、切損しけるに、安達兩膝をかけて薙ぐ。眞壁薙がれて倒るゝ所を、安達押へて頸を取りにける。安達は數度の武勇ある者なれば、弟の安達慶松續きて働さけるに、其首を與へて、勝久には、慶松が討たるとぞ披露しける。其外其夜、討たるゝ備前勢七千餘人なりし。其餘敗軍し打洩されたる者共、岡山へ逃歸りて、其由をいひければ、直家之を聞き、再應の負軍に、腹立大方ならず。此度は自ら出陣して、城を攻落さんと兵を集む。此由尼子が忍の者、岡山にて見及び、上月へ立歸り告げければ、勝久・鹿之助・立原源太兵衛評議して、此城へ直家大軍を請けては、始終防ぐ事なり難し。其上長く籠城せんには、兵糧も乏しく叶ひ難しとて、天正六年二月、勝久、上月の城を立ちて、攝州へぞ引取りける。此事又岡山へ聞えければ、敵より兵を入れざる前にとて、急ぎ直家の臣上月十郎・矢鳥某に人數を添へて守らせける。其由又姫路へ聞えければ、秀吉尼子勢いひ甲斐なく城を去つて、敵を入れぬ。今度自ら發向して、足をためさせず追落すべしと、事を無

念至極に思ひければ、直家に訴へて、上月へ押寄せ、城を取返し、度々望みける。直家、よくも申したりとて、人數を三千附けて、次郎四郎を上月へ向けらる。兄の恥辱を雪がんと死を極め、妻子に暇乞ひし、日蓮のはね題目笠印に書いて附け、天正六年正月の末、岡山を打立ち、其翌日、上月の城下六十餘町此方に、一夜陣を張つて、明日こそ城を攻めんと、馬の鞍を下し具足脱いて休みける。山中鹿之助之を聞き、此度は眞壁次郎四郎兄が恥を雪がんとて向うたれば、手痛さ合戦すべし。いざ此方より、逆寄に夜討にせんと、能き兵八百餘人を勝つて、相印・相詞を定めて打立ちぬ。外に加藤彦四郎に三百人附けて、二十餘町手前に備へさせ、神西三郎左衛門に五百人附けて、五町計りに備を張りて、若し討損ずる事あらば、入替りてと約束して、鹿之助は眞壁が陣近く押寄せ、其邊の所々に火を懸け、関を作りて切つて入る。餘寒の時なれば、皆身を縮めて伏居ける所へ、不意に打入りければ、太刀刀をも取敢ず、我先にと逃散りけるを、追詰め／＼討取りける。眞壁は、猶も逃行く味方を制して、何卒一戦せんと、床机に腰を懸けて下知しける所へ、素膚の歩武者の敵一



張付谷の  
由來

人走來り、眞壁を〔脱字ア〕て二萬計りの人數にて押寄せ、段々に取巻き、之を攻めけるに、上月、矢島も命を限りと防ぎ戦ひけれども、大勢の寄手なれば、防ぎ得べくもあらず。士卒爲方なくや思ひけん、上月、矢島を討つて出づべく候。士卒の一命を助け給へと、降を乞ひければ、秀吉其事許容なく、押して城中の兵を搦め取り、上月十郎には腹を切らせ、其首を取つて、江州安土の城へ參らせける。残る宇喜多が侍共には、上總踊といふ事をさせて見せんとて、残らずに簑笠を着せて、磔に上せ、其下に焼草を積みて火を付けて、悉く焼殺しける。大勢の苦しみ體、目も當てられぬ有様なりける。夫より其所を張付谷と名付けけるとぞ。

按ずるに、此天正五年十一月に、秀吉の先鋒黒田官兵衛・竹中半兵衛、福岡の城を攻む。岡山より後詰す。秀吉出でて戦ひて、直家敗走せしといふ事を、本朝通記に書きしは、太閤記に見えしを取りたるなるべし。されども此頃、福岡には城もなし。城なければ、岡山士の福岡を守りしといふ事も、福岡の邊にて、秀吉と直家合戦ありしといふ事も、福岡當國には語り傳へもなし。上月城等の防戦を傳

へ誤れる事なるべし。

### 毛利・宇喜多上月城攻并羽柴秀吉其外上方勢後

#### 詰の事附尼子勝久父子自害

立原源太  
兵衛の意  
見

尼子勝久、當二月、上月の城を明けて引退さし事、世の嘲り止め難く、此度落城こそ幸なれ。再び爰に向ひ、籠城し防戦せんと、勝久家臣を集めて評議せしに、立原源太兵衛出でていひけるは、此事然るべからず。世の嘲りはさる事なれども、此上月城、元來不堅固にて、守り詰むる事難し。其上今度は、秀吉の加勢あれば、宇喜多も毛利・小早川へ加勢を頼みて、定めて大軍にて攻むべし。然らば運を此城にて開かん事、如何あるべし。當家運を開くべき謀は、當時は只、皆々の働をなして然るべし。以來を考ふるに毛利三家織田家へ敵して、今秀吉と戦ふとも、天下を治むる兵權には及ばずして、終に毛利和議して、織田家に従ふべし。其時當家も、天下を掌握ある織田家の威を借りて、本國に打入りなんは、何の難き事かあらん。夫迄は時



山中鹿之助の意見

節を見合せて、危き戦をなさん事を謹み給ひて、然るべしといひければ、山中鹿之助が曰、此度上月の城に籠りて、毛利・小早川又宇喜多迄も引出して、之と戦はん事、幸の時節といふべし。暫し上月に籠城して、防戦ある中、秀吉も餘所に見て後詰せてやあるべき。秀吉後詰ありても、猶ほ危くば、信長公出張し給ふべし。其大軍を以て、毛利等を討つは、いかで討勝ちてあるべき。今は時の至りて、運の開くるやといひければ、勝久を始め皆此議に同じて、則ち勝久再び上月の城に籠りて、防戦すべしと望みたれば、秀吉も之を尤なりと許されて、勝久は其臣鹿之助・源太兵衛、其外龜井新十郎・吉田三郎左衛門等二千三百騎を率して、上月の城に楯籠る。宇喜多直家之を聞きて、則ち兵を出して攻むべけれども、秀吉大勢にて、播磨國中に控へて後詰すべければ、卒爾に上月へ取懸け難しと思ひ、毛利を語らはん爲めに、小早川隆景へいひ送りけるは、尼子左衛門尉勝久、二千餘騎を率して、播州上月の城に籠り、某之を討たんには安く候へども、羽柴筑前守後詰を致すべく候。其上に上方勢相増候間、此戦大事の時に存せられ候。早く御出馬あるべし。先陣は仕るべしと

尼子勝久上月に籠城す

直家小早川に出馬を乞ふ

毛利宇喜多の陣容

あれば、隆景則ち許容あり。輝元・元春等を催して、天正六年三月二十日、藝州吉田を出軍あり。同廿六日、備前國一宮に宿陣す。隆景より出せる制札今に残り、一宮にあり。此陣へ宇喜多直家より使ありて、病氣甚しく、出陣なり難く候故、人數計り差出すとの事にて、長船又右衛門・岡平内・富川平右衛門・明石三郎左衛門・浮田七郎兵衛・花房助兵衛・岡剛介・沼本新右衛門・中村三郎左衛門・足立太郎左衛門・高取備中・伊賀左衛門・富山平右衛門・市五郎兵衛・蘆田五郎太郎・延原内藏助・浮田□小原孫次郎入道親明・楢原監物・江原兵庫等、其勢一萬五千餘騎、岡山を打立ちて、毛利勢の先陣にぞ押行さける。斯くて寄手の總勢六萬五千餘騎陣附けて、上月の城を取巻く事、幾重といふ事なし。扱二宮佐渡守関頭をして、總軍関を合せて仕寄をつけ攻めけるに、秀吉は四月晦日に、後詰として四萬餘騎にて、上月表へ打出て、高倉山に陣を取り、此後詰の押として、高倉山の尾續きに、備前勢陣取りたり。先陣は中村三郎左衛門、二陣は浮田七郎兵衛・富川平右衛門、其頃は明石・長船岡以下一萬五千騎備へたり。隆景は山の上に備へ、元春は上月の城の山下平地に下りて備ふ。其頃南蠻より、渡り來りし臺なしの



大筒にて、五月四日、松原常陸が手より、水の手の矢倉を打崩し、又吉田三郎左衛門も、之に討たれて死にける。或夜城中より忍の者を出し、其鐵炮を取らんとしたれども、重きものなれば力叶はずして、城下の谷へまろばし捨てたり。之を寄手取返さんとして、夜中に士も雜兵も出てたるを、寺本市之丞勝重と名乗りて、矢倉より射出しける。夜ながら矢に當りて、射殺さるゝ者多し。かゝる事共ありし計りにて、此頃京都より、信長公の二男北畠信雄三男神戸三七を大將として、八萬に餘る大軍、加勢として下向あり。又信忠公も五月七日、三萬騎にて出陣あり、攝州に控へらるゝと聞えければ、後詰の勢に向つて戦ふ事もなり難く、率爾に城も攻められず、上方勢も亦中國勢と、始めての手合なれば、秀吉さすがの勇將なれども、戦を好まず。互に睨み合ひて對陣ある。京都にても、殊の外此合戦大事に、信長公も思はれるにや、加勢の人数も追々相増し、秀吉よりも聖護院の宮へ祈禱の連歌を頼み奉りて、五月十八日、京都に於て興行ある發句に、

常盤木もかつ色見する若葉哉

秀吉聖護院の宮へ祈禱

ゆふかげふかき夏山のころ

秀吉代句

村雨の音し音せぬ月出でて

紹 巴

百韻成就して、懷紙に御酒を添へて、高倉山の陣へ送りけるとぞ聞えし。斯く迄秀吉も大事に思はれければ、大軍ながら對陣のみにて、五月も過ぎ六月も末になりける。然るに高倉山の秀吉の陣所の麓に、熊見川といふ流あり。暑の時なれば、此川へ朝夕水を遣ひに出で、又馬の足をひやす事多かりける。此所の先陣宇喜多の士中村三郎左衛門備へたりしが、此川端へ出づる兵を討たんとて、其側にある柳原、竹村の蔭に、伏兵を置きて待ちけるが、六月廿八日、例の如く高倉山より、人数多く川邊へ出でけるを、藪蔭より、鐵炮にて三人打倒し、續いて中村が兵打つて懸れば、敵も取合せて、備を出し戦ふ。中村小勢にて危ければ、備前勢追々進んで戦ひける。夫より敵味方段々出重り、大勢になりて戦ひ、其外にも上月の郷内へ敵二萬計りにて出づれば、毛利勢も一萬餘り出會ひて、三箇所に分れ迫合あり。敵味方手負、死人多く、尤も手柄高名せし者もありて、互に引取りて、其日の戦は止みにけり。

熊見川合戦



其後秀吉は、中國勢との合戦、始終の勝利覺束なくや思ひけん。さしもの大軍を引取りて、書寫山へ歸陣あり。上月の城中より之を見て力を失ふ事いはんかたなし。此上は最早籠城叶ひ難しとて、毛利の陣へ使を立て、大將生害して、士卒の命を助けん事を乞ひて、七月三日、尼子左衛門尉勝久・同助四郎氏久并に神西三郎左衛門・加藤彦四郎政貞自害し、立原源太兵衛は城を出て、山中鹿之助幸盛は藝州へ下りて、上月の城落ちにけり。鹿之助は作州路を経て、藝州に赴くとて、備中國阿部川阿井の渡りにて、天野紀伊守が臣河村新左衛門・福間彦右衛門が爲めに討たれにけり。年三十九歳なりとぞ。今其墓阿井の渡りにありて、名は千載に残りたり。

上月城落  
山中鹿之助討死

### 毛利勢播州より歸陣の事

宇喜多直家は、今度上方勢と毛利家との合戦、大方毛利勢負軍なるべしと思ひて、虚病を構へて家臣計り出し、其身は出陣なく、其上角南隼人入道如慶を使として、織田信忠卿播州飭度津に在陣の所へ遣し、向後御味方申すべくとありければ、信忠

宇喜多織

田家に内通

卿も許容の返事なりし所、思ひの外上方勢打負け、上月の後詰の大軍引取りければ、案に違ひて、隆景・元春とも、上月落城の後、暫し黒澤山に陣取りてありし所へ、直家病平癒の由にて參陣し、隆景・元春へ對面、今度勝利の賀儀を申して、岡山へ歸りぬ。毛利の陣へも、直家上方へ内通の事畧ぼ聞えければ、杉原盛重は、直家を討取らんなどいへど、隆景許容なくて止みぬ。直家より、重ねて又使者を立て、隆景・元春の陣へ申遣しけるは、今度上方へ直に御出陣候はゞ、御先手仕るべしと合戦を進めけるも、内心は、何れにても勝利ある方へ従ふべしとの積りなり。若し直に御歸陣候はゞ、領内御通行の事饗應申すべきなど、懇に申遣しける。之も許容ありて、立寄る事あらば、元春・隆景を討取るべき謀なりけるとぞ。然るに中村三郎左衛門、兼ねて毛利家へ通じける故、此等の密計を黒澤山の陣へ内通して、其身は作州の居城へ何となく歸りける。直家又中村が内通せし事を聞きて、岡山より人數をやりて、八月二日の曉、中村を誅す。此事黒澤山へ聞えければ、直家が密計ある事、いよ／＼疑なしとて、隆景・元春藝州への歸路に、備前通行を止めて、八月三

直家、毛利を謀る



日、黒澤山を立ちて、隆景は播州奈波坂越より乗船して、海上を歸陣。元春は作州路を引取りて、岡山へは使を以て、藝州より、急に歸陣候様に申來るに付いて、残念ながら今度は、御饗應を受けず罷歸り候。重ねて立寄るべしとありける。直家は、此度隆景・元春を饗應して、仕手をいひ付け討取りて、其首を織田家へ働きの印に獻じ、其威を備中・備後迄取敷くべしと謀られけるに、其謀大きに相違したり。されどもさらぬ體にて、毛利家へも親みける。

宇喜多上方和睦并小西彌九郎が事

直家は其後、上方と毛利との勝負を見計ひ、病氣と稱して出陣なく、彼へも附かず是へも附かずしてありけるが、家の老臣を集めて、何れへか従ふべしと意見を問はるるに、富川平右衛門申しけるは、當時一度・二度の勝敗何れにありとも、それをば論ずべからず。信長公の威光、且つ秀吉の合戦の形勢賞罰の分明等を以て、以來を考ふるに、天下は必ず之に歸すべし。當家始終の御爲めには、少しも早く秀吉に依つ

て、信長公に附かせ給へと諫めければ、皆是に同じ、直家も尤なりとて、信長公へ和睦を望むと雖も許容なく、秀吉に便りて、再三申入るべく思へども、急いでも毛利家へ戸川が二男孫六を人質に出し置きたり。之をば如何せんと思案あれば、平右衛門申しけるは、孫六は少しも苦しからず。御家の大事に、私の悴いかて替へ申すべし。之は天運に任すべしとありければ、直家大に感じ悦びて、さあらば、彌、上方一味に極むべし。孫六を取返す手段も又あるべしとて、先づ播州の秀吉の許へ、足立太郎左衛門を使として遣し、進物品々取揃へ遣しける。然るに和睦の事、信長公許容なきを、強ひて秀吉へ頼み遣す事なれば、いと大事なる使なり。されば秀吉へ入魂なる者を添へて遣さずば、然るべからじと、此を尋ねらるゝ所に、岡山の町人に、小西屋彌九郎といふ者あり。元は泉州堺の者にて、秀吉を未だ猿と人の呼びし時、竹馬の友にて、今も秀吉目を懸けられし者なり。之を呼出し、差添へて遣しければ、秀吉許容ありて、此以後は何角に付き、申合すべき由の返答なり。是に依つて其後は直家よりも、秀吉へ加勢の爲めとて、花房彌左衛門正成に土足輕を添へて、姫路に



遣し置きける。其明年天正七年の秋、秀吉安土へ参りて、直家の事味方へ参り候由を申されけるに、伺ひもなく申合せ候事宜しからずとて、猶も信長公免しなかりしを、さまじく申乞ひて、十月晦日に免許ありて、味方へ参るべき由相濟み、其段岡山へ聞えければ、浮田與太郎基家を、信忠卿の攝州昆陽野の陣所へ差遣し、其禮謝あり。又播州の秀吉の許へは、直家自ら行きて對面ありて、其禮を述べられける。此時、信長公執奏ありて、直家從五位下に敍爵ありけるとぞ。扱富川孫六を藝州へ人質に出し置きたるをば、其頃藝州の安國寺の惠瓊上京ありて、下向に岡山旅行せしを申合する事ありとて、岡山の城中へ呼びて捕へ置き、藝州へいひ遣しけるは、富川孫六を返し給はるべし。さあらば惠瓊を返し進らすべしとありければ、毛利家同心あり。約束を極め、備中阿部川にて人質替にし、孫六も虎口を遁れて、岡山へ歸りける。又此度、秀吉への使に添へて、遣しける小西孫九郎といふ者、元は堺の町人、小西壽徳といふ者の次男なり。又以前、直家幼少の時、頼みて居られし阿部善定といふ福岡なる富家の手代に、源六といふ者ありしが、直家岡山の城を取立て、國中

小西行長の素性の

の商賣人を城下へ呼寄せられし時、善定が手代源六、岡山下の町へ出てて吳服商をして、魚屋九郎右衛門といひしが、實子なくて、彼小西壽徳が子の孫九郎を養子としたり。秀吉若年の時、大坂・堺などへ上り給ふ時、此壽徳が許に居て、此彌九郎と友達なり。〔幼少カ〕しよりの馴染なりし故、此度の使にも添ひて行きしが、是より一入懇になし、其上此孫九郎、利根發明なる者にて、内々の使などに行く間者のやうなる事どもせしが、程なく呼出され、侍に取立て、小西彌九郎と名乗り、段々立身し、後に五奉行の一人になる。小西攝津守といふは、則ち此人なり。今堺にも岡山にも、小西屋といふ者は、皆此類葉なりといふ。

### 虎倉の城主伊賀久隆を毒害の事

伊賀左衛門久隆は、虎倉の城主にて、無二の宇喜多方なり。又直家の臣に、難波半次郎といふ者あり。密に毛利家へ通じて、何卒伊賀左衛門を謀を以て殺し、毛利家への功とせんと思ひ、天正六年九月計りに、半次郎讒言して、伊賀左衛門、毛利家へ

秀吉小西を取立つ



直家、伊賀久隆を毒殺す

内通ある由をいふ。直家之を讒言とは思はず、何の穿鑿もなく、伊賀を殺さんと企てらる。左衛門は兼ねて、岡山城下にも屋敷を拵へ、虎倉の城も守り、岡山にもありて、父子交代せしが、左衛門岡山に在りける時、直家より料理を振舞ふべしとありて、家來迄も呼びて饗應ありて、此時左衛門、毒を入れて與へらる。扱下城ありしが、直家の料理人、伊賀が家來に所縁ある者ありて、今日の料理に毒あり、急ぎ毒を解すべき薬用ひられよと、密に告げける。左衛門之を聞き、今毒を解して難きを免るゝとも、逆も生かしては置かるまじ、終に死せん命、城に籠りて討死すること、本望なれとて、急ぎ岡山を打立ち、馬をはやめて虎倉の城へ歸り、子の刻計りに城に入り、家人を集め、籠城の手配し、門々を差堅めて、岡山の討手を待つ。左衛門嫡子與次郎は、急ぎ解毒の薬を調へ、父に與へけれども、早や延引せしにや、曉に至りて、左衛門は終に死しぬ。直家は左衛門が岡山を去りし事を聞きて、浮田源五兵衛を虎倉へ遣し、仔細を問はしむ。足輕五十人連れて虎倉へ至れば、早や城門を差堅め、用心厳しく見えければ、態と源五兵衛一人城戸に至り、直家の使の由をいへど

伊賀久隆の子虎倉城に籠る

も、答ふる者なければ、詮方なく岡山に歸り、伊賀籠城の由を申しけれども、城をも攻められず、其分にて過ぎにける。嫡子與次郎は城に籠り、毛利家へ使を立て、左衛門尉毒害にあひし事をいひやり、以來御味方申すべし、御人数を出さるれば、御先手申すべしとて、父の仇を報ぜんと謀りける。其後暫し城に在りけれども、與次郎舅明石飛彈より、内々知らせて、其儘あらば悪しかるべしと、進めければ、明年の正月下旬、虎倉の城を落ちて、藝州勢の備中へ働き出でたると一所に退さける。其跡の城をば、長船越中に守らせける。越中は其時、播州駒山の城に在りける故、其弟の源五郎・石原新九郎越中が妹婿なり有年太田原等を入れて守らせける。

一説に、伊賀左衛門が家臣川原四郎左衛門といふ者を、直家語らひて、左衛門を毒害せしともいふ。又川原に計り合して、殺させしともいふ。

### 備中忍山落城并金川城夜討の事

天正六年十一月中旬、毛利輝元・吉川元春・小早川隆景、三萬騎の勢にて出陣、備中



備後の諸士を先鋒として、備中に打出て、高田村忍山の城に、浮田信濃・岡剛介が籠りたるを圍む。吉川民部大輔經吉は、忍山の東に陣取り、伊賀與次郎に毛利勢を加へて七百計り、共に津高郡勝尾山に陣取りて、岡山勢の後詰せん押として控へたり。毛利勢精兵を勝りて、晝夜を分たず攻めけれども、城中少しも騒がず、弓・鐵炮を放ちて防戦す。されども信濃も剛介も小勢なれば、岡山へ加勢を乞ふ。直家は猶ほ病中なれば、加勢として岡平内・長船又三郎・片山惣兵衛等、大勢を率して出陣し、忍山の丑寅に當りたる鎌倉山に着陣す。吉川經吉、一千餘人を二備として、岡山の加勢に向ひて相戦ふ。岡山勢打負け色めく所を、藝州勢勇發して切崩す。城より之を見て、浮田信濃自ら打ち出て戦ふ。吉川が先手打負けて、二陣入替り戦ふ所に、城中より岡剛介打つて出て戦ふを、又小早川勢横を入れて戦へば、浮田も剛も人數を纏め、引拂ひて城へ入る。門々を差堅めて防ぎけるに、毛利勢も攻め兼ねて、備を引取り控へたり。年も明くれば、天正七年正月上旬、城内へ内通の者ありて、城に火を放つ。折節風強くして、火の紛飛散りて、城中の小屋一同に燃上る。寄手兼

忍山城の合戦

浮田信濃  
同孫四郎  
討死

忍山落城

ねて相圖の事なれば、此火を見て、四方の壁に一度に付きて攻入りけるに、城兵防ぐに術盡きて、爲方なく敗走す。浮田信濃・同孫四郎は、猶も防ぎけるが、終に腹切りて、火の中へ飛入りて死にけり。殘兵逃散りけるも、多く討たれて寄手へ城兵五百三十餘人を討取りて、城は落ちにけり。伊賀與次郎は、去年より勝尾山に陣取りて、岡山の後詰を待ちて、一戦して遺恨を散ぜんと思ひけれども、直家は近年の内、秀吉を語らひ上方勢と一所に、毛利を潰さんと謀りければ、忍山城の後詰も、さのみ心に用ふるに及ばずして、此度は強ひて人數をも出さざれば、伊賀手を空うしけり。されども此度、此儘に歸る事を残念に思ひ、兼ねて虎倉の邊の案内は知りたれば、我兵を引分けて、金川の城へ夜討を懸けたるに、宇喜多直家守りけるが、能く防戦して利なければ、翌晩引取りける。伊賀、是にては遺恨を散ぜず、又或夜、城中の油斷と見計り、夜討して、鐵炮を打懸け攻入りけるに、城中皆寢入居たる所へ、不意を討ち、城兵散々に防ぎ戦ひて、五十餘人枕を並べて討死す。されども斯く防ぐ隙に手を合せ、門を閉ぢ、狭間に弓・鐵炮を配りて防ぎければ、乗取るに及ばずして、伊賀も引

備中忍山落城并金川城夜討の事



取りける。漸々此五十餘級の首を取りたるに、少し恨を散じて、之を毛利の陣へ送り、虎倉を出でて、備後の三原に行き、小早川に屬して居たりける。

周匝城并作州飯岡・鷹巢等落城の事

去々年、天神山落城の後、北備前又作州城々、宗景に屬せし者共、直家に降らずして、楯籠る者多し。されども、毛利家との取合絶えずして、是等を攻むべき隙もなかりける。今年天正七年二月、花房助兵衛職之延原彈正等を以て、之を討たしむ。

佐々部勘齋討死

先づ赤坂郡周匝の城に佐々部勘齋籠城し、天神山の浪人共一つに籠り居けるを攻落し、城兵残らず討取りて、勘齋も周匝の一谷といふ所にて討死す。勘齋が壘今猶残れり。夫より

作州飯岡の城に、保志賀藤内籠城するを攻む。此城は鷲山とて、嶮岨の要害なれば、容易に攻められず、取巻きて日を經にける。されども外よりの助もなければ、終に防戦叶はずして、家臣秋山重左衛門・鮎矢亦七・大澤重郎左衛門等十七人、枕を並べて討死し、藤内も二の丸にて自殺して、落城す。之をはき捨て、岡山勢、海田村へ

飯岡の落城

兵を進めて陣を取る。其村の鷹巢山の城に倉敷の江見市之丞・同次郎楯籠る。直家より、使を立て、之を招けども、宗景の仇なりとて、更に従はず。江見に同意の浪人・百姓共を集めて籠城す。花房延原之を攻めけるに、江見よく防戦して攻惱む。然るに延原彈正兼ねて、八名の百姓を語らひ置きける。此に返忠させて、城に火を懸けて寄手を引入れば、城兵共を下知して、江見兄弟、爰を限りと防戦ふ。其中に清水帶刀といふ者、岡山侍の池土佐と渡合ひけるが、清水打負けて、土佐押へて清水が首を取る。清水が家人廣田七兵衛馳來り、主の敵遁さじと、池に打つて懸り、暫く戦ひて、終に池土佐を討取りて、廣田は其首を取り、主人の首と一つに之を提げ、海田の村へ引取る。其外城兵討死し、江見市之丞も討たれ、次郎は花房助兵衛、之を討取りて、城落ちたれば、跡を残らず焼拂ひ、岡山勢は引取りける。廣田七兵衛は、主人清水が首を葬りて墓を築き、其傍に土佐が首をも埋置きて、播州へぞ落行さける。其墓今も残れるか知らず。江見兄弟が墓は、つとは崎といふ所に、今にありといふ。尋ねべし。



一説に、周匝の城にて討死せしは、保志賀藤内、飯岡城にて討死せしは、江見次郎といふ。されども、是は誤りなるにや、笹部勘齋が墓、周匝に残りたるにて知るべし。其所にて勘齋が子仙千代が墓といへり。

### 作州三星城攻并落城、後藤勝元自害の事

花房助兵衛延原彈正は、同年四月上旬、倉敷村の南なる念佛山に陣取りて、三星城へ取懸り之を攻む。此は宗景の老臣後藤左衛門勝元、籠城す。相従ふ軍勢には、宗景の舊臣後藤河内久元・小堀備前吉秋・奥山源六友永・下山半内正氏・奥田青山・福田九屋・西田石田・蘆田等十一人、其勢百四十二人。後藤勝元が家臣には、後藤左近・山下六郎左衛門・山本權内・同彦右衛門・福田作内・林軍右衛門、其勢百十一人、本丸を堅む。水島久作・駿河將監・龍門又市郎、其勢八十一人、西の丸を堅む。安東・相馬・難波利介・柳原太郎兵衛、其勢百三十九人、東の郭を堅む。坂田織部・同惣左衛門・有元・戸坂・檜本等、其勢五十餘人は、北の郭を守る。坂田は、江見市之丞を亡し、後爰に籠る。油津り難波三郎左

### 三星城合戦

衛門、其外足輕原田・赤堀江田・島田、其勢三十餘人、南の郭を守りて、都合五百餘人楯籠る。然るに、城中の後藤河内・小堀下山・難波等いひ合せ、兵を引連れ城を出て、荒木・田村の山に入りて、靜に兵を隠し備へて、延原等が兵を進めば、其後を討たんと巧みける。延原は此謀をば知らず、倉懸山より先手を進め、段々に押出し、三海・田村に進む。時に荒木田の山中に隠れたる後藤河内守、延原が旗本の後より打つて懸れば、思ひも寄らぬ不意を討たれ、延原が旗本、忽ち敗北して散亂す。後藤河内久元真先に打つて懸り、延原彈正と渡り合ひ戦ふ。久元覺えある勇士なれば、延原、景光に手を負うて、既に討たるべく見えけるに、延原が家臣二人助け來りて、押隔て、漸々延原が旗本を位田鳥奥山迄引退く。後藤小堀下山等が兵追討して、首十八討取つて、勝鬨を作りて引取りける。此次に、倉懸山の延原等が陣屋を焼拂ひて、三星の城を見やれば、延原が先陣の者共は、旗本の崩るゝを構はず、城を攻めて、只一揉に乗取らんと戦うて、城兵共を討てども、兒島某・三保某自らよき首取りて競ひ進む所へ、後藤河内・小堀下山・難波等又引返して、延原が先



陣の兒島三保が城を攻むる後より、関を作りて打つて懸り、之に城兵も力を得、防戦して、前後より取挟み戦へば、寄手敗北し、湯郷村迄引退く。兒島は難波利介と戦ひ、終に兒島討たれぬ。其外寄手討死し、疵を蒙る者夥し。後藤河内爰にても、又勝関を作りて、兵を引いて城に入る。夫よりは城をも攻めず、延原も位田鳥奥山に陣城を築き、勝間の城と號し是に居て、岡山へ加勢を乞ふ。直家之を聞き、浮田左京詮家を大將として、人數大勢差向けらる。是に依りて、更に軍評議をなして、城中案内を聞かん爲めに、湯郷村の長光寺住僧を語らふ。其僧、彈正に語りけるは、三星の城中に、安藤相馬・難波利介・柳澤太郎兵衛といふ勇士あり。是等あらん程は、落城難かるべし。謀を以て是非味方に屬せば、必ず落城すべしといふ。是によりて、密に長光寺を頼みて、彼の三士へ使をいひ含め、味方へ來らば、恩賞は望に任すべしといひやる。長光寺、城中に入りて、潛に彼の使の趣を三人へ申しけるに、安藤は之を請入る。難波と柳澤は許容せず。斯くて四五日を経けるに、安藤が反心を人も察してけるにや、何となく城中騒ぎ立ちて、各疑をなし、互に心を置合せけれ

兒島勝元  
計が妻の智

ば、大將勝元、迎も士卒一和せず、此にては籠城叶ひ難し、城中の男女の命を助け、勝元一人生害して、城を渡さんと我妻にいふ。此妻之を聞きて、越後といふ女ありしを語らひて、勝元を諫めければ、君の覺悟甚だ宜しからず。さあらんは、誠に無益の生害といふべし。急に返忠する棟梁を聞き極め、之を殺して、城中の士卒を押静めて、堅固に籠城せん事、何の難き事あるべし。其返忠の者を討たんも、又易かるべし。我に任せ給へとして、安藤が反心をよく聞き極めて、一夕頭分の侍へ料理を振舞ふべしとして、安藤・相馬・難波・柳澤并長光寺をも呼びて、廣間にて料理を出し、圍碁などして在りける所へ、奥方より彼越後といふ女、菓子を持出でて、奥様より下され候とて、相馬へ渡す。相馬座を退きて之を戴く所を、勝元の妻物蔭よりつと出でて、相馬が首を一刀に打落す。されども此方は外へ洩さず潛に取隠し置きければ、城中外に知る者なし。其翌朝、相馬が首を大手の坪にかけて梟しければ、城内返忠せんと思ふ者、此に恐怖して、返忠をも又翻しける。夫故又、備前勢押寄せて攻戦ひけるをも、倉敷まで追返して、能く籠城しけるに、返忠の者のせし事か、過り



柳澤太郎  
兵衛討死

て火出でしが、本丸より焼出でて、十方に火粉飛散りて、所々陣小屋一度に焼上りければ、寄手其虚に乗じて、急に攻寄せて乗入れければ、城兵防禦の業盡きて、荒木田村を指して落行きける。延原が勢に取巻かれ、城兵多く討取られ、柳澤太郎兵衛も討死す。難波利介は蓮華寺まで落延びける。西の丸へも寄手乗入りけるを、爰を先途と防ぎける。されども、今朝辰の刻より、未の時迄息も繼がず戦ひければ、皆戦ひ疲れ、其所にて廿四五人、枕を並べて討死せしかば、城中今は防戦叶はず、皆火に飛入りて死にける。宇根田太郎兵衛、行年八十三なりしが、夫迄も若武者と同じく戦うて、靜かに具足脱捨て、腹切つて炎の中に飛入り死にけり。城主勝元、城の一方を打破り遁れ出でて、家士廿八騎引連れ、入田原の山院迄退きしが、備前士急に追討ちければ、家臣悉く所々にて討死しける。其隙に勝元、唯一騎長田村迄退きけるが、猶ほ延原が兵追懸ければ、今は遁れぬ所なりとて、隠れ坂といふ所にて、自害して失せにける。其首をば延原が討取り、延原が實檢にぞ入れける。今も隠れ坂に、後藤勝元が墓ありといふ。此三星城をば、宇喜多より、明石四郎兵衛を

後藤勝元  
自害

置きて守らせらる。此城の兵士、直家へ降參する者多し。其中に下山半内正氏は、此城を遁れ出で、花房五郎右衛門に所縁ありて、之を頼み、久馬の血山に入まより、中河内村寶藏院が山林に引籠り、一生外へも仕へずして終りぬ。此半内が祖父は、北條越後守氏吉というて、勝田南郡菜喰村の井内城に代々住せしが、氏吉が嫡子下山源五郎氏晴は、伯州大山にて鈴木新之丞と喧嘩して死ぬ。之をば此所に祭りて、下山明神といふ。二男筑後守清氏、三男大膳久氏二人共、尼子が爲めに殺さる。其久氏が子半内正氏なり。浦上宗景に仕へて、比類なき勇士なりしが、終に二君に仕へず、民間に終りける。此外作州表宗景に仕へし者共、或は討取られ、或は降參せしが、此所に番勢共置きて岡山勢歸陣せり。

備前軍記 卷第四 終

作州三星城攻并落城後藤勝元自害の事



# 備前軍記 卷第五

## 作州所々城攻の事

天正七年、直家下知して、作州の取出どもの堅固を言付けて、兵を籠めらる。先づ大寺畑城には、江原兵庫介直家の婿なり小寺畑には、蘆田太郎、篠葺の城には、市三郎兵衛同五郎兵衛玉串與十郎、其外岩屋城・宮山城・砥石城等を守りて、毛利勢の押とす。毛利家より、當二月兵を出して、小寺畑の城を攻む。蘆田切つて出でて防戦し、家手の大將今田玄蕃に手を負はせ、朝枝孫四郎を打取りて、寄手を突崩し、引取り守りけれども、寄手大勢にて、入替へく攻めければ、防戦力盡きて、二月十二日、蘆田太郎一方を切抜けて、大寺畑に入りけるに、同十六日より、大寺畑へ押寄せて攻動かず。城中に猶崎彈正といふ者あり。敵より此者に内通して、城に火を懸け、敵

大寺畑城合戦

吉川元春所々の城を攻落す

を引入れて、二の郭の切岸まで攻寄せけるに、城兵防ぎ兼ねて、門を開き突いて出て、一方を破りて落行きけるに、富山半右衛門、岡山より使に來りて居たりしが、城に残りし者共を諫め勵まして、狭間より弓・鐵炮を放し、寄手を防ぎ止めて、城を持固めければ、寄手も進み兼ね、暫く兵を引いて豫猶ひけるを、最前城より落ちたりし者共、之を見て、三十人計り又取つて返し、城へ歸り入りて防戦す。其中に引後れたる者もありて、寄手に交り、其上辰の上刻の事にて、朝霧深くして見分け難ければ、矢留をして、霧の晴を得て城下を見れば、塀下に寄手犇々と竝居たり。之を幸と狭間を開きて、能き兵と見ゆるを選打にしければ、寄手の松岡安右衛門・兒玉市之介・少阿彌などいふ能き侍、多く討たれける程に、先づ攻口を引取りける。其翌日、再び寄手嚴しく攻懸りければ、江原も防ぎ兼ねて、終に一二の郭を乗取られ、爲方なく圍を切抜けて、篠葺の城に入る。其後吉川元春出陣して、此篠葺も笠屋・砥石の城も、攻破られければ、備前勢皆、宮山城・祝山城に入りて之を守る。吉川續きて宮山城を圍みて、攻むる事數日に及びける。或時寄手の陣より、村里の浴室に行く者多かりしを、

作州所々城攻の事



城より見濟し、城より兵を密に出して、其浴室の邊にて之を討つ。其時寄手の陣より、助けて大勢になり、暫し追合ひて、やうく物分れして引取る。又或日は、城より兵を出して、民間の藪陰を楯に取りて伏せ置き、外に又兵を出して、寄手を招きて、懸れくといふ。吉川元春之を見て、自ら兵を進めて切つて懸る所を、藪陰の伏兵出でて横を打つ。是に切立てられて、井下左馬助・森脇彌五郎・小笠原二郎右衛門等大勢、或は討たれ或は深手負ひて引返せば、吉川散々に切立てらる。城兵勝に乗り追討す。元春も爲方なく、鐵炮を段々に備へて、追來る敵を打たせて、漸々繰引にして引入りける。扱祝山の城を攻取りて、藝州へ歸陣あれば、同三月直家、又、岡山を打立ち金川に宿陣し、翌日作州高田表へ發向して、藝州引取りたる跡の城々を攻めらる。升形の城に、吉田肥前・森脇市郎右衛門が籠りたるを、其儘捨置き、荒神山に陣取りて、祝山の城を取返さんと、謀を評議ありて、此城をば、熊谷信直が四男三須兵部・鹽谷豊後・同左介・猪股平六楯籠りけるが、直家より間者を城中へ入れて、猪股に内通して、味方を近日に城中に引入るべしと、平六に約束しけるに、其

吉川元春  
敗軍

直家三宮  
の城を攻  
む

事顯れて、平六を城中より追出して、城を堅固に守りければ、直家爰をも捨て置き、夫より三宮の城を攻めらる。是には村上勘兵衛楯籠る。或日勘兵衛、自ら侍六十人計り率ゐて討つて出て、戦ひて引取りけるを、味方之を追ふ。其中敵五人、鎧四本・長刀一振にて、打拂ひく引退くを、馬場重助、鎧一本にて城の木戸近く追込む。尤も餘りに嚴しく追ひける故にや、鎧三本は投突にして、五人共城へ入りける。重助は、敵の捨てたる鎧を取りて引返しける。其夜直家は、足輕大將宇喜多修理・浮田太左衛門・池田八右衛門・足立太郎兵衛を呼びて、明日は必ず城を乗〔取リノニ〕城主村上を討取るべしとて、城を攻むべき謀を申聞けらる。次の間にて、岡平内之を聞き、進出でていひけるは、忝くも弓矢を取始め給ふより以來、斯様の大事の謀を、富川・長船・我等三人に先づ仰なき事なし。然るに若き者共と謀り給ふ事、甚だ覺束なし。某、明日城に入りて、村上が首を取りて御目に懸くべし。其首を得ずば、再び歸らじといひ切つて、己が陣に歸り、戸川・長船にも之を語り合ふ。平内は、城主村上を討取らずば、討死と思へば、明日の出立、足輕なくては利を得難しと、甲冑六具



迄選び集めけるに、臈當の重かりければ、家臣半井原某を呼びて、汝が臈當と刺脚半とをかせよ。某が鐵炮・臈當を汝かけよ。明日は大事なりとあれば、半井原合點せず、君は城中迄も馬上にて乗込み給へば、鐵炮・臈當何の御構もなし。私は歩立なれば、鐵炮・臈當、歩行不自由にて難儀に候。是は御免なされよと、座を立つて歸りければ、平内も爲方なく、其儘鐵臈當にて打立ちぬ。さて前夜いひし事もあれば、富川も長船も岡も、同じく先を争ひて、三宮の城へ攻入りけるに、富川平右衛門が弟岡與八郎、當年十九歳、是は平右衛門が異兄弟なり、岡惣兵衛が子なり、力量人に勝れたれば、年若なれども數度の高名ある上、羽蝶の指物に、斧・熊手・鋤・鍬・大鋸等を負ひて、一番に城へ乗込み、續きて花房正成乗込む所へ、與八郎が膝の先を、篋深に射られて進退ならず。矢は抜きたれども、矢尻抜けず。無理に抜きたれば、骨碎けて氣絶して、岸より下へ落ちたり。津島善右衛門爰にありて、與八郎が首を揚げて、其家來に渡して戻す。平内は村上を心懸けて進む所へ、村上打つて出でければ、岡押雙へて、組み取つて押へ、首を搔く。時に村上が妹、長刀を以て岡が足を薙ぐ。されども鐵臈當

岡平内の高名、

三宮の城落城

なれば、少しも切れず。半井原駈付けて、彼女を切拂ふ。平内は村上が首を取つて、則ち直家の實檢に備ふ。大將討たるれば、其餘は散々に落行き、城は落ちにけり。其外毛利家持の城々は、秀吉の加勢を合して攻むべしとて、所々に番勢を置きて、同四月二日、直家は岡山へ歸陣あり。花房助兵衛、荒神山に残り居て、毛利方の城々度々迫合ありける。五月中旬の事なるに、祝山の城にありける鹽屋佐介、城を出て、近村に浴室ありけるに浴に行きて、仲間に十文字の鎗を持たせたり。之を荒神山の忍び見て、助兵衛に告げければ、潛に兵を出して、其浴室を取圍ませぬ。佐介は其浴室の屋根に上り、十文字の鎗を取つて、助兵衛が勢の群りたる中へ、飛込み突廻り、大勢に手を負はせて、其場を切抜け引退くを、弓を以て、遠矢に多く射懸ければ、佐介鎗をば捨て、刀を抜き又討つて懸れば、助兵衛が勢數十人、中に取籠めて終に突伏せられ、首をば難波六右衛門打取つて、荒神山へ引取りける。敵ながらも、佐介が働比類なきを感賞して、其旨を父鹽屋豊後方へいひ遣り、死骸首ともに祝山へ送りける。

鹽谷佐介討死



按ずるに、猪股平六、此後宇喜多に臣従して、備前にて終に死たるにぞ、此平六が墓、津高郡下牧村にあり。

### 辛川村合戦小早川勢敗軍の事

同年八月、藝州より小早川隆景を大將として、其勢一萬五千、備中國へ出陣し、備前へ打入り、岡山城をも攻むべき由聞えける。されども直家は、病中にて出陣なく、浮田忠家等人數大勢を引率して、岡山を打出でて富山を打越え、矢坂村を後に當て、一宮の此方迄、備を七段に立て、敵を待つ。戸川助七郎達安平右衛門事、後肥後守といふが一手をば引分けて、辛川村の邊の山陰に隠して、伏せ置き、相圖に任せて、打出てんと約し置く。斯くて隆景、大勢にて兵を進め、辛川村を過ぎて、備前勢に討つて懸る。先陣駈合せ戦ひけるが、兼ねて敵を誘はんとする餌兵なれば、百人餘りの先陣、弱々と打負け引退く。小早川の先手、競ひ懸りて之を追ふ。夫れに續きて、後陣も備を進めて、辛川を打過ぐる時、戸川助七郎が伏兵、山陰より起りて、小早川勢の後より打つ

小早川勢  
敗軍

て懸る。助七郎、今度初陣なれば、真先に進みて戦ふ。其時七段に備へたる岡山勢、静々と押出し討つて懸る。さすが大勢の小早川勢も、前後の敵に切立てられ、色めき立ちて見えけるを、岡山勢、隆景の旗本を目に懸け切懸る。隆景、采配を打振り、下知をなす所に、又近邊の山上にも、弓・鐵炮を配り置きけるが、関を作りて矢玉を打懸けぬ。本備よりは、頻りに追懸け戦へば、小早川勢總崩になり、西を指して敗軍し、一返も返さず、備中へ引退く。岡山勢も、小早川大軍なれば、かろく辛川村迄追討して、人數を引揚げける。今日敵を討取る事、大勢にて數を知らず。岡山侍高名多し。殊に富川助七郎、十三歳の初陣にて、采配持ちたる敵を討取る。猶原彦右衛門も十八歳、能き首取りて、勝鬨揚げて兵を打入れける。天正七年の辛川崩といふは是なり。

### 小早川隆景兒島へ出張の事

天正八年三月、一に曰、七年八月なりと小早川隆景、兒島に出張す。最前辛川表にて敗軍の事を

小早川隆景兒島へ出張の事



憤り、兒島を切取らんとし、又其序に、岡山をも攻むべき謀とぞ聞えし。其頃兒島、常山城に富川平右衛門在城して、兒島を守護す。小早川一萬餘り、常山より西所々に陣取り、近々常山城を攻めんとす。富川が組頭中島左近、廣戸與右衛門之を註進して、岡山へ援兵を乞ふ。是に依りて岡山には、兵船五十艘川口に浮べ、加勢の人数を催す。然るに、組頭兩人よりは註進したれども、平右衛門よりは、一度も註進せず、援兵も乞はず。如何なる仔細にやと不審なれば、暫し出船も留めて、之を問はんと思ふ所に、翌朝平右衛門より、飛船を以て申し來るは、小早川兵を出し、當城を攻むると見え候。然るに、敵の計を按ずるに、去年辛川へ軍を出し、岡山を攻めんと存ずる所に、思はざる敗軍せし故、今度常山に取懸け候體をなして、岡山より加勢到らば、其跡の海上を取切つて通路を絶ち、岡山不勢の所へ人数を進め、再び岡山を攻めて乗取らんとの手段と存ぜられ候間、御加勢は無用に候。當城をば御捨て然るべく候。此城攻落され候とも、御構に少しもならず候。岡山を堅固に持ち候へとぞ申越しける。直家之を聞き、平右衛門が遠慮至極せり。さらば川口に兵船を揃

富川平右衛門の遠慮

へし計りにて、加勢をば渡すべからずと下知する。隆景も其謀なりし故にや、急に常山の城をも攻めざりし所に、直家より、秀吉へ援兵を乞ひて、近日兒島へ加勢として、淺野彌兵衛兵船二百艘にて押渡るといふ事、小早川家の忍の者、播州より歸りて告げければ、隆景も思慮ありて、城をも攻めず、兒島を引拂ひ、備中高山の城迄、栗屋雅樂助を殿として引取りけるを、常山よりも兵を出して、追討して、敵多く討取りて引返しける。

一説に、此時加勢として、直家渡海、八濱二子山に陣し、秀吉も出陣して、南山八幡の城に陣取り給ふと雖も、秀吉、兒島に渡り給ふ事も終になし。又直家は、此時病中なれば、此説は誤なる事明かなり。

### 宇喜多直家卒去の事

宇喜多和泉守直家、近年腫物を煩ひ、出陣も叶ひ難く、浮田與太郎基家、浮田七郎兵衛忠家名代として、所々出陣ありしが、病氣重りて、天正九年二月十四日、行年

直家死去

宇喜多直家卒去の事



五十三にて卒去なり。法名は涼雲星友といふ。嫡子は、龜松とてありしが早世し、二男八郎とて、當年九歳なりしを家督とす。基家は、直家の弟春家の子平福院の位牌に、涼を凌に作る。龜松は龜松童子とて、廢屋町觀音坊に位牌あり。然れども戰國の事なれば、之を深く隠して、其儘病中と稱して、外へは葬らず、岡山の城に續きたる東の山今の本城の地なりに埋め置きて、後に平福院へ葬りて、堂を建て木像を安置して、今にあり。浮田與太郎事を計らひ、隣國への交も、以前の如くありしかども、自然と外へも死去の事、風聞せしといふ。其明年、天正十年正月九日、卒去と披露して、秀吉を頼み、正月十六日、八郎幼年なれば、御名代として、岡平内を使者として、信長公へ、直家の遺物、吉光の脇指、黄金千兩を進上す。同月廿一日、秀吉、岡を召されて、江州安土に到り、此由言上し、遺物を奉りければ、跡式八郎へ親直家の如く領地すべしと下知し給ひ、使者の岡平内に馬を給りて、岡山へ歸されける。一説に、直家の腫物は、尻はすといふものにて、膿血出づる事夥し。之をひたし取り、衣類を城下の川へ流し捨つるを、川下の額が瀬にて、乞食共度々拾ひけるに、二月中旬より、此穢れたる衣類流れざるより、直家早や死去ありしといふ事を、外にて推量して、皆之を沙汰しけるとぞ。

### 作州岩屋の城を攻落す事

作州久米北條郡坪井村岩屋の城主大河原大和守は、無二の毛利一味なり。如何なる仔細やありけん、其家臣茅田備後守、主人大和を招きて饗應して、之を弑す。同家來加藤伊豫守は、主人大和守、茅田が爲めに討たれし事を無念に思へども、病身故ノ一進退心に任せぬ程なれば、爲方なく、鬱憤の餘り岩屋の本堂へ出でて、腹十文字に切つて失せにけり。此事岡山へ聞えければ、天正九年三月下旬、戸川長船沼本等、出陣して城を攻む。蘆田備後を討取り、岩屋の城を取りて、直家の伯母婿浮田某を入置きて、此城を守らせけるに、毛利家の中村大炊助頼宗節、西郡山城村葛下の城にありけるが、岩屋を又攻取らんとて、兵を集めて、同月廿六日打立ち、兵を二つに分け、一手は櫻井越中守を大將として、大藏・片山・林屋・今屋、并に中村が家僕木村勘兵衛等二百人計り、岩屋の大手に向ふ。一手は大原主計・加藤兵部を大將とし

大河原大和守弑せらる



岩屋の城  
落城

て、立石孫市・武元又三郎大森久介・片山右馬助等に、若者三十二人を選みて差添へて、搦手の難所を岩根傳ひに攀登り、塀を越えて忍入り、屋上へ上り、火を放ちて関を作る、大手も之を相圖に攻入りければ、濱口へ支へもせず攻落され、其身は討死し、城兵は我先にと落去り、城は落ちにければ、葛下の城より、兵を分けて、岩屋の城を守らせける。其後、花房助兵衛出でて攻めけれども、實に直家死去なれば、強くも之を攻めず。其儘差置きけるが、高松陣以後、秀吉下知し給ひて、雙方和解して、中村大炊助も藝州へ歸りける。

### 兒島八濱合戦并七本鎗の事

天正九年四月の頃、秀吉より、宇喜多直家へ使ありて、近年毛利家征伐あるべし。是によりて、兒島を堅固に取治め、備中をも追々取敷くべき由申來る。直家は實は死去なれども、さらぬ體にて病中と稱し、浮田與太郎基家・浮田七郎兵衛忠家應對ありて、備中を討取る事等いひ語らひ、其謀ども、得心の由返答に及びける。藝州

毛利勢  
飯山に出陣

宇喜多勢  
八濱に出陣

の忍の者、此事を聞きて、歸り告げたりければ、毛利三家評定ありて、穗田伊豫守元清を大將として、有地美作守・古志清左衛門・村上八郎右衛門・植木出雲守・同下總守・同孫左衛門・福井孫六左衛門・津々加賀守等を兒島へ渡し、蜂濱より西四十町計りに陣取り、麥飯山を築きて砦として、先達て兒島を取敷き治めんと謀りける。毛利勢兒島に出でける事を、常山より岡山へ註進あれば、宇喜多與太郎基家を大將として、富川平右衛門・岡平内、其外諸大將渡海して、八濱の此方に陣を取りて、兩陣より、足輕共出でて迫合ありけるに、八月廿二日廿一日の朝、岡山勢より、麥飯山の城近く馬の草刈に出でける。敵少々出でて、其草刈を追ふ。味方の若者五六輩馳行きて、草刈を助く。敵より又十人計り出でて渡り合ひ、味方に之を見て、又二十人計り馳出で、夫より雙方段々に出重り、大勢になりて、大崎村の柳畑といふ海邊にて戦ふ。今も古戦場の地、白骨・刀劍の類など出す事ありといへり。一日、宮の森といふ所なり。毛利勢の村上八郎右衛門、三百計りにて舟に取乗り、磯邊に寄せて、横を打たんと控へたり。古志清左衛門・猶崎十兵衛・有地美作等と鎧を取つて、味方の勢に突いて懸る。味方の大將浮田與太郎も馬に



宇喜多勢  
敗軍

打乗り、味方を制し止むれども、止まざる故、馬場重助が傍に居たるを呼び、汝は爰にありて、跡より来る味方を止めよ。吾は行きて、同勢を引上ぐべしと、馬を馳せて見れば、追々に出たる侍共、毛利勢に喰留められて引取かぬるを、與太郎采配を振つて、味方を引取らんと、馬を輪乗して下知しける所に、何處より打ちたる鐵炮にや、流玉來りて、基家の内兜に當り、則ち馬より落ちて、即死なり。一説には、胸板此玉、味方より打ちたる鐵炮にやともいふ。大將討死と見て、敵喚いて懸る。與太郎の乳母子何の三五兵衛といふ者、敵を切拂ひ、基家に抱付きて討死す。中村宗助父子も、爰に討死しけり。大將此の如くなれば、味方總敗軍になりて引退く。重助は諸勢を留むると雖も、止まらざれば、跡より又馳行さけるに、早や敗軍になりて、味方崩れ來たれば力なく、其上馬にも乗らざれば、殿して引取る所へ、重助を討取らんとて、敵三騎追來る。先は青毛の馬、次は月毛の馬、三番は、蘆毛の馬に乗りたる敵なりけり。重助、之を突拂ひ突拂ひて、鎗の穂先を跡にして、脇に搔込み、馬にて乗懸けられぬ様にして引退く所に、戸川平右衛門も與太郎に續きて出でたるに、早や敗軍になれば力なく、引

退かんとするに、與太郎討死を聞いて、大將討死なれば士卒も皆追討になるべし。然るに、我一人生きて甲斐なし。馬引返し討死せんと、蒐出づるを、能勢又五郎、馬の口を捕へて、某も御供然るべし。されども、先づ若き者共御先を働かせ申すべしと、馬を引留むる所へ、馬場重助、岸本惣次郎、小森三郎右衛門、栗井三郎兵衛、追々來りて敵を支へける。國留源右衛門、完甘太郎兵衛二人は、外の山に居けるが、遙に之を見て、谷岸ともいはず走り來り、國留、真先に進みて、追來る敵と鎧を合せて、敵を突倒し、頭を取る。繼いで完甘太郎兵衛、能き鎧武者と鎧を合せるが、是は山を走りたるに、草臥れて敵と勝負果さず、國富は、完甘とは從弟なりけるが、之を見て、我分は濟みたり、太郎兵衛助くるぞと聲を懸け、鎧を以て向ふ。敵此聲をかけしを聞いて、國留が方を見ける時、太郎兵衛鎧を突入り、國留も又鎧を突いて、其敵を突倒す。太郎兵衛がいふ。源右衛門其首取りて給へ。我は大に勞れ倦みたりといふ。馬場重助は、敵の首取りて、上の岸に腰懸けて見物せしが、太郎兵衛よ。斯様の時は喰付さても懸り、首を取る。七人の者共、何れも手を合せて、さしも競ひ懸



りし毛利勢を、爰にて防ぎ留めければ、敗軍せし諸手、爰彼處より一同に引返し敵を支へければ、切つて追來る敵又逃散るを、又追討にして、敵數多討取つて引取りける。さて重助を追來る敵、三人の名を後に聞きければ、先の青毛の馬に乗りたるは三村孫太郎、次の月毛の馬は三村孫兵衛、三番の蘆毛の馬は、石川左衛門にてありけるとぞ。遙か年を経て、三村孫太郎姫路へ來りし時、重助が二男作介、孫太郎に逢ひて、其馬の毛色を以て、其名を尋ねけるに、又同事に答へけるとなり。

八濱七本

此殿の鑓を、後世に入濱の七本鑓といふ。所謂能勢又五郎・國留源右衛門・完甘太郎兵衛・馬場重助・岸本惣次郎・小森三郎右衛門・栗井三郎兵衛なり。此物語は、平右衛門子の戸川肥後守達長、家光將軍へも申上げられし事なり。爰に記す所は、備前宰相忠雄卿を、備中庭瀨の肥後守の家へ招請ありし時の物語を書留めしと、馬場重助が覺書とを合せ記す。是より間を置き末へつづく。此時備前宰相則國・富源右衛門を呼出し、逢ひ給ひしとぞ。之を以て思へば、源右衛門は宇喜多亡びて後に、戸川家に仕へけるにや、尋ねべし。一には、此鑓七人戸川平右衛門を加へて、栗井を退きたるあり。之を案ずるに、達安の物語に、吾父の事故、之を退かれしなるか、又栗井が事は分明ならぬか、此事を書留めしにも、外六

人を書きて、今一人失念と記せしに、後人聞き傳ふる事ありてや、此失念といふ一人は、栗井三郎兵衛なるべしと、書き添へたるによりて、茲に記し加へしなり。又浮田與太郎基家の墓は、兒島の大崎村にあり。

此戰濟みて、戸川平右衛門常山城にて、其時盛返し、場にありし者を集め饗應し、高名手柄の穿鑿ありける時、重助申せしは、其鑓をせし場迄後殿せしは、某一人なり。戸川馬を立てし所にて踏留り、敵を討取りしといふ時に、寺尾孫四郎がいふ、此崩れ口にて、重助は後殿せしを見ずとあれば、重助答へて、御邊は何所に居たるや。敵三騎追來るを突拂ひて引取る。其馬の毛色を見覺えたるかといふに、孫四郎答ふる事なし。重助荒言をして、崩れ口に早々逃げたる者は、追來る敵は、見ざる者なりといひて止みぬ。又重助が言は、其時盛返して鑓をせし時、鑓脇を射たる者あり。黒絲の具足に、朱にて筈を塗りし弓を持ちたり。開しくて顔をば見ずといふ時に、鷹見傳兵衛進み出てて、夫は某なり。只今迄證據なき故に、之をいはずといひし故、傳兵衛も恩賞に預る。小森三郎右衛門働き少し物蔭なるにや、さのみ人賞せ



ずして、高名帳に載せざりしに、後毛利家より、其時盛返せし中に、小森が働拔羣なりしと稱美せしかば、之を證據として、小森七人の中になりしとぞ。此常山にての饗應に、平右衛門盃を持出でて、其時の手柄の次第に盃を指す。一番に能勢又五郎二番に國富、三番に完甘、四番に重助、其次段々にさしけるとぞ。

### 宇喜多八郎家督の事

天正十年正月、宇喜多和泉守の家督、備前國・美作國・播州佐用・赤穂二郡一に曰、完甘と三郡といふ。備中の中をも、以前の如く八郎に給はる由、信長公の朱印を、江州安土にて、岡平内に給ひければ、之を、岡山へ取り歸り、八郎に渡しければ、諸士安堵の思ひをなしける。其謝禮として、八郎の名代長船又三郎、二月上旬に安土へ又罷上りける。播州姫路へは、宇喜多七郎兵衛忠家行きて、秀吉へ禮を述べ、又幼年なれば、萬事の後見頼入る由を申して歸る。岡山にては、浮田七郎兵衛後見し、戸川平右衛門・岡平内・長船又三郎仕置して國を治めける。

### 備中高松城攻并同國所々城攻の事

同春毛利家征伐の事、信長公の仰を承り、羽柴筑前守秀吉、備中國へ進發せんとして、三月十五日、姫路を出陣あり。備前國三石へ着き、其翌日福岡に宿陣し、爰を十九日に發足ありて、沼村に晝休みありけるに、沼城の南の山の側に、岡山より新しき假屋を造りて、種々饗應ある。宇喜多八郎は幼年故に、花房彌右衛門正成を名代として、爰に出し奉行す。秀吉甚だ悦びて、爰を立ちて、岡山を過ぎて行軍す。其時八郎の名代として、宇喜多七郎兵衛忠家岡平内・戸川助七郎・長船又三郎等總勢二萬餘騎、加勢として先陣に進む。秀吉の本陣をば、龍王山に居ゑ、總軍八萬騎は、備中の境なる山上山下に陣を取りて、高松の城を攻めんと控へたり。備前勢は、四月上旬、備中宮路山に乃美少輔七郎元信が居たるを攻めん爲めに、宮路山の上澁櫛山に押上り陣取りて、急に之を攻めければ、城兵防ぎ得ずして、降參しければ、命を助け追拂ふ。備前勢夫より、冠の城に清水長左衛門宗治が一黨にて、林三郎左衛門・鳥

宇喜多忠家秀吉を饗應す

秀吉龍王山に木陣を据う



越左兵衛・松田左衛門等籠居けるを攻めける。同月廿五日の卯の刻より、浮田忠家、諸軍に下知して、頻りに之を攻む。小城なれば、二萬の勢にて、只一揉にと攻めけれども、城中能く防ぎければ、死傷多く出来ける故、先づ引退きて控へければ、城中にも暫し息を繼ぎて休みける所に、城中の鐵炮の火、柴垣に移りしを人知らず、頓て燃上り藁屋に付いて、夏の事なれば、乾きたる屋の上に燃付きて、城中残らず焼上りければ、城兵十方を失ひ騒ぎける所へ、秀吉の本陣より、此陣へ來り居し加藤虎之助清正、一番に乗込み、野邊十郎・山下九藏も同じく乗入る。備前勢遅れず一同に攻入りて、敵を討ち高名する者多し。今は城兵も防ぐに術盡きて、林も鳥越も松田も、一つになりて、一方を切抜けて高松城に入りける。此松田左衛門盛明は、松田左近將監が二男なるが、去る永祿十年、父兄共に宇喜多の爲めに討死し、領地居城迄も奪取られ、今は毛利家に扶持せられて、成長しけるに、親兄の敵なれば、宇喜多勢を請けて戰ふ事本望なりとて、分外の勇を振ひけるに、落城しければ、怒を含みて退きける。それより廂山の東南に、日幡六郎兵衛に、毛利家の加勢上原

右衛門元祐籠城するを攻む。然るに上原元祐、秀吉に内通して、城主六郎兵衛を殺して、備前勢を招きければ、則ち兵を進め乗取りて、花房・長船市・福田等、并に秀吉よりの檢使木村隼人を籠められけるに、小早川勢より、猶崎彈正忠元を大將として、攻むる事厳しく、城も亦堅固ならざれば、防ぎ戰ふに便なくて、備前勢城を明けて引取りける。次に岩崎の東賀茂岡崎の城を攻む。此城には、毛利家の桂民部を置き、本丸には生石中務、西の丸には上山兵庫在番す。此生石中務、秀吉へ内通して、敵を引入れんと、備前勢へ約束したり。中務さらぬ體にて或夜本城へ行き懸るに、民部、折節夜廻りして門番を呼び、門の守り無沙汰なるとて咎めける。中務、門外にて之を聞きたれば、我が内通洩れけるにやと思ひ、急に東の丸へ歸る。本丸へ向ひて屏柵を付け、鐵炮を打懸くる。民部は藏の米俵を出して、屏裏に積ませ玉を防ぎ、用心厳しくせしに、中務備前勢を招きて、二の丸へ乗入らしむ。されども本丸をば、夜中堅固に抱へて、夜明けて見れば、備前勢大勢城に攻寄する。又夫に續きては、毛利家も後に詰めたれば、民部も之に力を得て、東の丸へ向ひ、弓鐵炮を打



込み、又其處に藁屋ありしを目當に、火矢を放つて之を焼く。中務が家人、其屋根に上り防ぐ所を、矢間より規ひ打にして、大勢打斃す。又民部は、門を開き突いて出づれば、寄手の中務も備前勢も、之を幸に此敵を討取り、直に本丸へ附入りに乗込まんと戦ふ。然るに民部、四百人計りを一手にして、眞黒になりて、爰を先途と能く戦へば、民部が家人も多く討死しけれども、寄手又多く討たれ、沼本新五郎、猶村五大夫、上田十右衛門、福田十郎、蘆田十左衛門、牧大八等、枕を並べ討死し、終に討負け、城外へ引取りければ、民部東の丸をも取敷きて、難なく城を持堅めける。夫よりは備前勢、城をば攻めず。浮田七郎兵衛、戸川助七郎は先陣に備へ、其餘大勢陣をなし、毛利、小早川の大軍を押へて、秀吉は、高松の城を攻めらるゝ謀のみなり。かく秀吉の總軍八萬餘騎、龍王山に本陣を居る、諸軍は高松の乾なる大崎より東南の山々、立田山、鼓山、吉中村、三手村、板倉村迄陣取りたり。高松の城は、小高き山なれども、四邊深田にて、容易く攻寄せ難き地なりければ、水攻にするには如何かじとて、猶ほ龍王山の本陣を進め、東の山の尾崎蛙が鼻といふ所へ移されて、五月七日

秀吉高松  
城を水攻  
にす

より、堤を築する事凡そ一里計り、東は蛙が鼻より、西は赤濱山の麓迄、石を疊み上げ柵して、山々の流を堰き入れけるに、五月雨の降續きし事故、程なく水積増して、城中も水に浸り、屋の軒にも及ぶ程になりければ、最早籠城叶はず。六月二日に、城主清水長左衛門宗治より、舟を渡し使を秀吉の陣へ立て、城中の頭分切腹すべし。諸卒の命を助け給はれと、申來りければ、秀吉許容あり。殊に清水が志を感じ、酒肴を送り、城主生害の用意次第に、檢使を遣すべしとありければ、同四日の朝、檢使を乞ひけるに、堀尾茂介を遣されければ、清水長左衛門、同兄月清入道并に加勢に籠りたる難波傳兵衛、近松左衛門四人船にて出でて、堀尾に對面して、潔く切腹せしかば、城兵は免されて、悉く退散したりける。然るに昨三日の夜子の刻、京都長谷川宗仁より、早飛脚來り、朔日に明智日向守謀叛し、信長公、信忠公を弑し奉る事を失たり。秀吉はさらぬ體にて、四日の朝も常の如く、馬驗を持たせて陣廻りどもありける。又昨夜京都より、註進ありけると即時に、西國往還筋へ忍を出し置かれけるが、明智方より毛利家へ、信長公御自害の事をいひ送りける飛脚を、庭瀬にて見



付け、之を捕へ、其書狀を奪ひて、共に秀吉の本陣へぞ出しける。凡て西國への道路の人を留めければ、毛利家へ京都の變も聞えざりける故、毛利三家より使として、安國寺惠瓊來りて、高松の城も落ち、清水も自害候上は、和睦をなし、信長公の御味方に屬し、備中備後伯耆三國を進上申すべし。此旨宜しく信長公へ御執成頼入るとの事なり。秀吉、安國寺をば返され、翌日返答に、彌、和睦致すべく候。然る所に、京都に於て信長公、明智が爲めに弑せられ給ひぬ。此上にて和睦あるべくやといひ送らる。毛利三家評議區々なりけれども、小早川隆景、一旦和議を申遣して、違變する事本意にあらず。其儘最初申遣し候通り、然るべしとあるにより、毛利三家よりの返答に、最初申候通り相違あるべからずと、申し來りければ、秀吉大に悦びて、又申遣しけるは、三箇國を送らるゝと雖も、是は申請に及ばず。されども今度和睦ありし印に、備中川邊より東は申請くべしとありて、盟約取交し、毛利家より人質として、毛利藤四郎元綱元就八男、桂民部を出されける。扱六月六日早朝に、先づ備前勢岡山へ歸陣ある。次に同日未の刻、秀吉陣拂ひし、辛川村に至り、爰にて人數を

分け、總軍をば半田山の前の古道より、釣の渡りを越して、先陣より次第に押返し、秀吉は旗本の人數計りを残し、矢坂を越え岡山へ赴かれぬ。宇喜多八郎は、明石飛驒差添ひて、町口迄迎に出てられしを、懇の挨拶ありて、岡山の城へ入りて、暫し八郎に、秀吉對面あり。家臣浮田七郎兵衛、浮田左京、明石飛驒、戸川助七郎、長船又右衛門、花房彌左衛門等も、次の間にあり。戸川平右衛門、此時は關東の草津に入湯して留主なり。秀吉挨拶に、此度備中表の勝利は、偏に宇喜多家の武功に依れり。是に依りて、毛利家より差出す所の河邊川より東を、直に八郎殿へ進らすなり。知行あるべし。是より上京して、明智を退治して本意を達しなば、八郎殿を我婿にすべしと約束して、岡山の城を出て、其夜は沼村に宿陣ある。秀吉の先手の總軍、釣の渡を渡ノ一す時、渡守の加子を、神子田半右衛門切殺す。其事岡山へ聞えければ、他國の者を心に任せ殺す事、甚だ狼藉なり。堪忍ならずとて、岡平内家來を集め、具足を堅め乗出す。此事半右衛門も聞いて、強み人に勝れたる者なれば、我髪をふるゝとさばき、守の者を集めて、之を待つ所に、蜂須賀彦右衛門、黒田官兵衛才覺にて、或宿の裏の方を見るに、



役中間と見えて、日に向つて蟲を尋ねて居る者あり。あの首討てとて討たせて、此首を岡山へ持たせ遣し、加子を殺せし中間を、成敗せしとぞ詫言をいひやりける。平内は、出石迄早や出づる所へ、其首持來り、且つ詫言せしを聞いて引返して、事なく濟みけるとなり。秀吉は其翌七日、沼を立ちて播州宇根に着ありて、姫路へ歸陣なり。岡山よりも人質として、富河平右衛門が娘と明石掃部を出さる。是等の人質を姫路に籠置きて、上方へ出陣ありし。其時、毛利家よりも宇喜多家よりも、秀吉へ助勢の人数を出しける。

一説に、此時秀吉、辛川村にて病氣以の外なりと披露し、爰に猶豫の體をなし、秀吉手廻りの人計りにて、雑兵に紛れ、釣の渡を〔渡ノ字〕して、馬に打乗り播州へ駈通られける。炎天の時にて、馬を途中に乗斃し、家士の馬を取りて乗り、宇根迄引取り、岡山へは使を以て、今日立寄るべき所、急の事出來て、立寄る事叶ひ難く、直に罷過ぎ候。重ねて申通ずべしといひやりけるといへり。されども是は虚説なり。此時秀吉、岡山の城に入りて、目見えせしといふ事、則ち戸川助七郎

覺書に見えれば、是にて知るべし。又一説には、七日に吉井川を越さるべき所に、大風雨にて、川水増し越難くて、八日に沼を發足ありしともいふ。

### 秀家諸國出陣并朝鮮征伐の總大將の事

秀吉姫路を打立ち、城州山崎合戦に打勝ち、明智光秀を殺して後、年々月々に權威廣大になりて、終に天下を治め給ひし後は、中國無異になりて、備前備中・美作等の國には、〔一字〕亂も起さず靜かなれども、豊臣關白、關西・關東を征伐あり、三韓までも、兵を出し給ふ事度々にて、其時は必ず備前よりも、軍を出さずといふ事なし。或は總大將を奉りて、出陣ありし事ども絶えず。先づ此度、山崎陣に加勢を出し、明くる天正十一年の春より夏に至りて、志津嶽合戦に加勢ありて、歸陣す。天正十二年春、尾州小牧合戦に、岡・長船・花房等、一萬五千人を率して、加勢冬に至りて歸陣す。天正十三年春、紀州根來を討たれし時、加勢として戸川・岡等出陣。同年五月、又四國陣に、戸川・長船出陣、七月歸陣。同十五年、九州島津退治ありし時は、宇喜多



秀家卿初陣にて、二月朔日、岡山出陣、一萬三千の人数にて、兵具等甚だ美麗に出立ちける。征伐の後、終に島津降参ありて、秀家卿も六月中旬、岡山へ歸陣あり。同十八年、關東小田原攻。又奥州陣にて、秀家卿四月に出陣、九月に至りて凱陣ある。天正十九年三月、豊臣太閤命じて、秀家を朝鮮征伐の總大將とす。よりて新に五十艘の大船を作らせ、明年二月に、備前國國表に之を泛べ、乗初ありて、同月廿五日、先手の總勢宇喜多安心を此時秀家十九歳なり。故に此安心、後見として出陣なり將として出船し、秀家卿は三月朔日、出船して朝鮮へ渡海あり。文祿二年十二月歸朝ありしに、又慶長二年上月朔日、朝鮮へ再び出船征伐ありける所に、明くる三年八月、太閤薨去ありければ、同十月に歸陣ありし。是等の軍役に、秀家卿戦功あり。諸士高名・手柄どもありし事は、隣國の事にあらず。或は異國の事なれば、爰に略して記さず。部將・士卒の勝れたる手柄高名どもありし事は、外に附録す。

### 秀家卿元服并昇進の事

宇喜多八郎は、天正十年、父の家督を繼ぎて、高松の城攻の時は、十歳なりし故、人数計りを出し、其外の所々の軍役も、皆名代なりしが、天正十三年三月、十一歳にて元服あり。秀吉公の一字を給りて、秀家と名乗り、從五位下に敍し、侍從に任ぜらる。夫より段々昇進ありて、同十四年七月に、從四位下に敍し、右少將に任ぜらる。同十二月、左少將に移り、同十五年八月八日、參議從三位に昇進あり。同十二年四月十四日、關白の聚樂亭へ行幸ありて、和歌の御會ありし時、寄松祝といふ事を、松が枝の茂りあひたる庭の面につらなる神も萬代や經ん

同八月十五夜、同じ亭にて和歌ありし時、

ところから猶も光や増さるらん心にあたるあきの夜の月  
斯かる詠歌共ありし。同十七年の春、前田筑前守利家卿の三女を關白の養女として、秀家卿の大坂中の島の屋敷へ入輿あり。是は以前同山の城にて、婿とせしと關白の約束し給ひけれども、女子のあらざりし故、利家卿の娘を養女にして、婚禮ありける。其後文祿三年に、朝鮮の軍功を賞して、五月二十日、横中納言に任ぜらる。



慶長元年には、又新に五大老といふ事出来て、秀家卿も其一人に補せられて、吾領國のみならず、一天下の政事迄も執行ありける。

### 岡山城改めて築添ふる事

斯くて天下無異に治りければ、秀家卿の居城造營の事あり。もと此岡山の地は、大島といふ島山なりし。後世地かたとなりて、岡山といひて、正平の始め、南都に仕へし上神太郎兵衛尉高直といふ者居たりし。其後、遙か世を経て大永の頃にや、金光備前といふ者居城たり。其時迄は狭少にて、西の方計りなりし。其子金光與次郎宗高、つゞきて居りしが、宇喜多直家に殺されて、天正元年、直家沼の城より爰に移り、普請ありて、本城を東の方の山に移し、郭共多く築添へて廣くなり、天正十年に及びて、其功ども終りけれども、其時迄は、隣國の合戦、手遣隙なかりし故、其經營も全からず。往還の大河にもやうく假橋を懸け置かれけるに、朝鮮の役も終り、國中近國に兵災もなく靜謐になりけるより、又城を改め築かれ、近年安土の城に始め

て出来し、天守といふ事を、爰にもあげ造られ、矢倉・廣間・出仕所等造營ある。其奉行は、中村次郎兵衛といふ者勤めける。此次郎兵衛は、近頃秀家の室家に附きて、前田家より參りし者なれども、才ありし者故、此事を是に任せらる。此時に本城を、以前より猶ほ東なる岡山の高みに移し、石垣を築上げ、大川を引きて、其本城の下を廻し、天守を造り、櫓を仕添へらる。又往還の假橋も改めて、以前よりは、三町計り下の川中に小島の二つあるにたよりて、三つの大橋を作り懸け、洪水の時も、旅人の煩なく通路なさしむ。以前より假橋のありし所は、今古京町といふ、是古京町の略語なり。又此天守を造らる、虹梁は、和氣郡吉田村龍王山の一社頭にありし大木を、切取り用ひたりしといふ。其大木の株、猶ほ朽残りて今にありといふ。此造營、慶長の初迄に成就せしかども、残りし事どもありて、其後猶ほ造り終りしといへり。

### 秀家卿長臣并家中騒動の事

秀家卿の長臣共は、直家の時より、戸川平右衛門秀安、政事を取りて勤めける。此



直家の長  
臣敍爵

秀安は、直家小身にて成立の時、幼年より直家に仕ふ。五歳の年劣りなり。勇才も忠義も雙びなき人にてありしが、秀家卿の世となりては、病身になり、天正十年、常山の麓に隱居し、友林と號し、慶長三年八月、六十三歳にて死す。今常山の麓に墓あり。按ずるに、友林天文七年生れと、戸川記にあれば、此時實に六十一歳か。其子助七郎達安は、友林隱居の節、年若なりし故、長船又右衛門國政をなしける。斯くて天正十二年冬、老臣敍爵して、戸川助七郎達安は肥後守、浮田七郎兵衛忠家は出羽守、長船又右衛門は越中守、岡平内則勝は豊前守、明石三郎左衛門景親は飛彈守になる。同十六年に、花房彌左衛門正成も敍爵して、志摩守になる。是は以前秀吉と直家と和睦の時、使を勤めし時より、關白の馴染にてありし故、心に應じける故なり。天正十六年閏正月五日、長船越中守、虎倉の城にて、右京新太郎が爲めに殺されしより、岡豊前守、國政を執行ふ。殊に關白の心に應じ、懇意なりし故、權威ありける所に、文祿元年、朝鮮の陣中にて病死す。其後は戸川肥後守、國政を執りしに、文祿三年、伏見の城普請の時、長船越中守が子紀伊守、岡山よりとりて秀家卿の手の普請奉行せしが、關白の心に應じければ、戸川が仕置を改

秀家の奢  
修

めて、此紀伊守勤めける。此紀伊守は、智ある者にて、岡豊前朝鮮にて病死せし末期にも、秀家卿へ遺言して、以後は紀伊守御家の仕置をなすべし。さあらば、御家は危かるべしと諫め置きし程の者なり。其上浮田太郎右衛門・中村次郎兵衛も仕置に加はる。皆邪智ありし者なり。國中靜謐になりしに従ひて、紀家卿奢相増して、鷹狩・猿樂を好み、鷹并に鷹匠・猿樂の役者多く養ひ抱へられ、其遊興に金銀の費え夥し。是によりて、備前作州・播磨備中迄、領國残らず新に檢地を入れて、家中の領分を過半取上げ、又寺社領多く止められて、二十餘萬石を打出しける。家中其外、國中難儀いはん方なく、此事に付いて老臣以下、不平の事出來て、已に弓矢になるべき事などありし程なり。又秀家卿怒りて、家中の日蓮宗改宗すべしと觸られる。其頃明石掃部・長船紀伊守・中村次郎兵衛・浮田太郎右衛門等、切支丹を信仰せし折故、此觸を幸にして、士民に至る迄切支丹になる者多し。又戸川肥後守・浮田左京岡越前守・花房志摩守などは其儘にて、日蓮宗を改めざる者も亦多し。此辛き仕置に苦しみ、家中皆長船・浮田・中村を憎む事甚し。花房助兵衛は、此事を諫め、若

中村助兵  
衛の諫言



し又此仕置を譏りもせしとて、秀家卿甚だ立腹し、岡山下町の屋敷に閉門させ、腹を切らんとあれども、朝鮮にて軍功ありしを、關白にも御感ありし者なれば、石田を以て此事を伺はれければ、朝鮮にて功もありし者なれば、伏見へ登すべし。關白預り給ふべしとあれば、助兵衛父子三人を伏見へ登しければ、三人共に佐竹義宣に召預けられ、常州に下りける。是より家中二つになりて、騒しかりけれども、慶長元年、秀家卿五大老に補せられ、再び朝鮮陣ありし故、強ひて事も起らざりしが、慶長三年、太閤薨去ありて、朝鮮より秀家卿も歸朝ありける故、岡山の家中又静ならず。斯くては宇喜多家の存亡も覺束なくありければ、紀伊守を其儘に置き難しとて、戸川・浮田・岡・花房相議して、毒を與へければ、程なく慶長三年死にける。依之戸川肥後守、再び仕置を勤めける故、四民皆悦びて、暫し静なりしかども、猶ほ中村次郎兵衛・浮田太郎右衛門を用ひられて、苛き仕置はゆるまらざれば、家中一統に怒りて、長船紀伊守が仕置の事は、太閤の御差圖なれば、是非に及ばず、次郎兵衛等は、其儀に及ばざる事なれば、此仕置を打破らんとて、老臣へ申立て、紀伊守次郎兵衛御取立

宇喜多家  
の紛擾

てし用人寺内道作といふ者を、山田兵左衛門といふ者として切殺させ、扱戸川肥後守・浮田左京亮・花房志摩守・岡越前守・猶村監物・中吉與兵衛以上六人、大坂へ登り、秀家卿へ訴へて、中村が私曲を書記して、成敗すべしと雖も、秀家其事を甚だ怒り、次郎兵衛も罪なき由をいひ分し、奥方に隠されて、夜に入り女乗物に乗せ、忍びて加賀へ落されぬ。秀家卿、兎角肥後守を惡みて、大谷刑部家へ呼寄せ、仕手をいひ付け、切殺すべしとて、肥後守を呼ぶ。肥後守は、何心なく夜五つ時、大谷が家へ行く。此事を或人聞きて、浮田左京に告げければ、左京長刀を提げて、大谷が家へ馳行き、戸川を引連れて歸り、玉造の屋敷に取籠る。其人々には、戸川肥後守・浮田左京亮・岡越前守・花房志摩守・同彌左衛門・戸川玄蕃・同又左衛門・角南隼人・猶村監物・中吉與兵衛等、其勢二百五十餘人、雜兵迄は夥し〔脱字ア〕玉造の表裏の門を堅め、討手を待ち、皆髪を切りて討死を極む。大谷刑部・榊原式部大輔扱に入りて、一先静りて、扱明くる慶長五年正月、東照宮御下知にて、戸川肥後守父子・花房志摩守・中吉與兵衛は、東照宮預り給ひ、戸川常州へ蟄居、花房は増田右衛門尉預り、和州郡山に蟄



秀家岡山  
に歸陣

居。浮田と岡・戸川玄蕃・角南・猶村は備前へ歸さる。岡山の仕置は、明石掃部、今迄客分にてありしといひ付けられて、秀家卿も二月中旬、岡山へ歸陣なり。

### 關原合戦秀家卿敗北の事

慶長五年、奥州の上杉景勝卿を追討し給ふとて、東照宮御進發、岡山よりも、浮田左京亮に人數を附けて差出され、六月十九日、左京亮伏見を立ちて關東に下りける。其後大坂にて、石田治部少輔三成、諸大名を牒し合せ、東照宮を討亡し奉らん事を謀りて、秀家卿をも語らふ。兼ねて東照宮と不和なりければ、則ち石田に同心し、岡山を出陣あり。七月二日大坂に着、其勢一萬五千人、同廿五日大坂を出陣、伏見の城を攻めて、八月朔日落城す。其後秀家卿總大將にて、總勢五萬三千六百人、大坂を發して、同十三日、大垣に着陣、九月十四日未の刻、杵瀬川にて小迫合あり。其時討取りし首ども、舍那院の前にて、秀家卿實檢ありて、大坂へ歸る。十五日の朝、關ヶ原の北の野に、秀家卿の人數騎馬千五百、雜兵一萬五千、辰巳に向つて備へらる。東

秀家、家  
康に叛く

秀家の落  
去

軍是に渡し合戦ふ。岡山勢力戦し、浮田源三兵衛廣戸與右衛門等多く討死して戦ふに、東軍色めき靡さけるが、福島左衛門大夫正則、八百挺の鐵炮を放懸け討つて懸るに、岡山勢切立てられ、敗軍し、大垣指して引返す。又金吾中納言秀秋卿、松尾山より裏切して、大谷が備へ切つて懸られければ、西軍總敗軍になりける。秀家卿敗軍を纏め、引取にも及ばず、家臣進藤三左衛門・黒田勘十郎只二人連れて、旗本を拔出て、膽吹山へ落行かれける。夫より、道もなき方へ山深く迷ひ行き、其夜は美濃國粕川の谷の岩蔭に、勘十郎が膝を枕にして、曉迄まどろみ、明くる九月十六日、白樫村五郎右衛門といふ者、落人を討たんと、鎗を提出てて行會へば、則ち突いて懸る。秀家卿主従三人、とても遁れぬ所と身構あるを、五郎右衛門つくづく見て、鎗を横へ平伏して申しけるは、唯人とは見えさせ給はず、痛はしくこそ候へ。何方へなりとも御供仕るべし、名乗らせ給へとあれば、秀家卿は包みもあへず、我名を名乗り、今は容易に歸る事もなり難し、何方へなりとも、山深き方に忍ぶ外なしとあれば、五郎右衛門承り、某が家見苦しくは候へども、人遠なる山中に候間、一先づ御忍び候へと



秀家の詠歌

て、主従三人を誘ひ、三里計りの山中を分行き、秀家卿をば、五郎右衛門が下部九藏といふ者搔負ひて、白樫村へ急ぎけるに、其間にて郷人餘多追懸けるを、五郎右衛門今様々に斷りければ、さらば腰物を給はれと乞ひければ、主人の爲めなれば、力はなく、三左衛門も勘十郎も腰物を抜きて、其郷人に得させて、漸々白樫村へ行き着き、五郎右衛門方に隠れ住みて、數日を経ける中に、秀家卿かくぞ詠ませらる。

山の端の月は昔にかはらねど我身の程は面影もなし

涙のみ流れて末は杳瀬川水の泡とや消えむとすらん

斯くて秀家卿は、薩摩湯まで落行きたく思はれければ、五郎右衛門才覺にて、里民湯治するとて、秀家卿を其體にして、乗物に乗せ、大坂に出でて、天王寺の内に、秀家卿の相知りける僧のありしを頼みて、爰に先づ落付き、夫より船を求めて、大隅國へ落行き、島津を頼み隠れられけるとぞ聞えける。

### 秀家卿父子遠流并岡山侍分散の事

秀家卿出陣ありて、備前にても人數を残されけれども、去年當春、家中事出來て靜ならず。戸川肥後守父子・花房志摩守・花房助兵衛・中吉與兵衛等の類、他家へ預けられ、浮田左京亮は、東照宮に従ひ奉りて、關東に下る。是に依りて、今度の出陣には、明石掃部を先手として向はる。岡越前守・戸川玄蕃・角南隼人・猶村監物等を留守に残されけるに、去冬、變ありし故、今度の供もせず残りけるを憤りて、岡山を立退き、南部に蟄居して、其跡に残りし者としては、浮田官兵衛・完甘太郎兵衛・同太郎左衛門・富松太兵衛等のみ残りて、はかしくしき老臣等の一人もあらざるに、關ヶ原戰に西軍敗北し、秀家卿の行衛も知らずといふ事、聞えければ、備前國中の士民の騒動いはん方なし。されども事を執りて、其騒を取治むべき老臣の一人もなければ、留守に残りける諸士の妻を、皆便に任せて、所々へ遣し、退散せし程に、城中の兵糧・大豆并に雜具等迄、亂取の如くなりし。明石掃部は戰場を引取り、大坂へ出でて船に打乗りて、飭摩津へ舟を着けて聞きければ、岡山の留主、一昨日明退きけるといふ事にて、岡山へも歸られず、備中足守邊に、親しき禪僧のありけるを頼みて隠

岡山城退散



れ、其所に明年三月頃迄も居たりしとぞ。其外關ヶ原にて敗軍せし岡山侍、引取歸りし者共多かりしかども、留守の妻子散々になりて、行衛知れざるをやう／＼求め尋ねて、備中・作州等の民間に皆隠れけるとなり。扱、岡山の城は、東照宮御下知あり、堅固に取治むべしとて、戸川肥後守浮田左京亮・花房助兵衛・花房志摩守四人を備前の國へ下されければ、九月下旬、岡山に至り城を請取り、城代浮田官兵衛・完甘太郎兵衛・同太郎左衛門兄弟・松田多兵衛等、已に主人の行衛知れざる上は、誰が爲めに城を守るべきやうもなく、則ち右四使に城を相渡して、妻子・從類民家に隠れ、近國へ落行きける有様は、目も當てられず。侍屋敷町屋迄も悉く焼拂ひける。浮田左京亮・花房志摩守城を守り、戸川肥後守・花房助兵衛は、備中濱村に宿陣して、別條なく岡山の城請取候由、東照宮へ註進申上げたり。大坂の秀家卿の屋敷は、皆闕所となる。其室家は、前田利家卿の女なれば、免許ありて加賀へ引取らる。娘一人ありけるも、母に従ひ行き、成人ありて後に、前田修理が子内藏助が妻となりしと聞えし。白樫村より天王寺へ、秀家卿出でられし時、潛に忍びて、元の家に内室の居

られけるに、行きて對面ありし。其時に彼の五郎右衛門へ、秀家卿の室家より、黄金十枚・小袖五つを給ひて、歸されけるとぞ。秀家卿三十にて、薩州へ下向の時、黒田勘十郎は供して下り、進藤三左衛門は、主人の行衛を深く隠すべき爲めに、大坂に残り、今此時迄帶せられし取替國次の家重代の太刀を申乞ひて、計略の爲めに、之を本多中務が許へ持行き、言上しけるは、秀家事、關ヶ原敗軍の後、主從三人にて、北國の方へ山傳ひに落行き候て隠れ候所、石田・小西以下捕はれ、面縛せられしと相聞さければ、今は遁れ難き身と覺悟致し、何と申す所とは知らず候へども、人家遠き山中に自害致し候を煙となし、其白骨を取りて、黒田勘十郎と申す者と某、爰迄罷歸り、其白骨は勘十郎首に懸け、高野山へ上り候。扱某爰に出て言上申す仔細は、秀家が行衛知れず候はゞ、内府公御心にも懸り、其妻子定めて召込めらるべし。何とぞ幼息八郎が命を、助けられ候事を願ひ奉候。又此取替國次の太刀は、宇喜多重代の物にて候。生害の節迄帶し候。之を今、下劣の者の手に渡さん事の口惜く覺え候故、差上候。偏に八郎が助命の事願ひ奉候。此旨ども、内府公の御前宜しく



頼み候由、落涙して訴へける様、いと哀れなりければ、三左衛門をも懇にもてなし、其太刀を請取りて、中書は、其始末を委しく東照宮へ言上ありければ、三左衛門が主人をよく見届けたる心中を不便に思召されて、近藤をば中書が許に暫し預り置けとぞ仰せける。又、明石掃部が郎等に、澤原某といふ者あり。召捕はれて、掃部が行衛を問はれけるに、知らずといひしを、猶ほ責めて問はれける時、澤原申しけるは、合戦の勝敗は計り難き者に候。若し此度東軍敗北しなんには、内府公、我が主人の如く、御行衛を知れざる時、皆々捕はれとなり給ふ事ありて、之を尋ね申すに、其御行衛を明に仰せあるべきか。其御覺悟を承り候上にてこそ、仰にも従ひ、主人の行衛をも申すべきにこそと、申しければ、何れも兎角の返答なくて、此囚を免されける。其時澤原、今恩免を蒙りし事の辱く候へば、其謝禮に主人の行衛を某承り及候を申すべく候。掃部事は、西國へ落行き、夫より便船にて、朝鮮國へ渡海致し候と申す。彼の國御尋ねさせあるべしと申して、退出しければ、此澤原が嗚呼なるを、皆人感じける。其後細川家へ行きて仕へけるといふ。一説に、此事は大坂落城の時に、明石掃部が行衛を尋ねらるゝ時の事と云ひなす。其

島津忠恒  
の愁訴

後は近藤が申せし如く、秀家卿は北國にて生害と人も思ひたりしに、一兩年過ぎて、未だ存生にて、薩摩に隠れ居らるゝ風聞ありければ、終には隠し得られじと、慶長七年十二月廿八日、島津忠恒、伏見へ參上して申さるゝは、宇喜多中納言事、薩摩へ逃下りて、領分に暫し隠れ居て、近頃、某を頼み何方なり共差置き養はれ候様にとの事に候。其體相不便なる様子に相見え候由、家來共申す。格別の科人に候へ共、御恩免の事相願ふ由、種々愁訴ありけれ共、御取上なくて、何れにもあれ、薩州より呼び登せられよとありて、秀家卿罷登られけるに、此度總大將にて罪も重し。去れ共忠恒の頼も餘儀なければ、父子共一命をば助けられて、八丈島へ遠流ある。此時秀家も難髪して休福と號す。嫡子八郎侍從、次男某、家臣眞田七郎右衛門以下、五人相従ひて八丈島へぞ至りける。扱近藤三左衛門に再び尋ねられしに、秀家存生にありけるが、北國にて生害の由は偽なり。如何と仰ありければ、兎角の返答にも及ばず。此罪遁れ難し、早く首を刎ねられ候へと申上げけるとぞ。東照宮聞召して、近藤が忠義尤なりと感じ給ひて、千石の地を下され、御家人となる。黒田勘十郎は島津家へ

秀家父子  
八丈島に  
流さる